
IS _ロスト_ナンバリング

imomushi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS | ロスト | ナンバリング

【Nコード】

N5733Z

【作者名】

imomushi

【あらすじ】

ISの誕生から、偽者の主人公が生み落とされる。彼はISを操縦できることを嫌い、ISの世の中を病んでいるように感じていた。そんな中である理由から、IS学園に入らなければならない状況に陥る。彼の中で、望まない学園生活が始まった。

1・0 | 3年前（前書き）

掲載されている皆様の作品を読ませて頂いて、投稿してみたくありませんでした。初めての投稿になりますが、よろしく願います。この作品は独自の解釈があり、ISの概念に対してアンチテーゼの傾向があります。また、読まれる方によっては、気分を害される要素が含まれる可能性があります。読まない場合はお戻りいただけると助かりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

1 - 0 | 3年前

| 0 / |

爆撃音はいつまでも続いていた。中東の昼間は暑いが、僕がいるブリーフィングルームはとてもひんやりとしている。

以上がテロ組織の中枢人物に当たる。貴君らの任務はターゲットの速やかな排除だ。活動時間30分以内で、できるだけ被弾を避けて帰還しろ」

僕を含めて言われた3人のうち1人が擬似トレーラーの電動シャッターの扉を開くと、ざらついた熱風の感触が頬を撫でつけ始める。砂漠の砂が当たって、ここがアメリカじゃないと実感した。

「サーフォ、貴方は暴走しやすいから最後尾で付いてきなさい」

何時ものうるさい女が語気を強めて喋ってくる。いつも、行動を全然自由にさせてくれないこいつが、僕は嫌いだ。いつも命令無視とか言っていじめてくる。

「何で？だつて、これから悪い奴の頭を消し飛ばしに行くんでしょ」

女は露骨に嫌そうな顔をしていて、いつものもう1人の女は対照的に哀しい顔をしていた。もう一人の僕を叱らないあんたは、なんでいつも泣きそうな顔で僕を見るの？

ホームでやってるゲームで、僕はいつも高得点を叩き出す。そうすると、周りの大人はみんなうれしそうな顔をするんだ。僕は褒めら

れたようで、それがうれしかった。だったら実戦でも、もちろん一番乗りで高得点を叩き出したい。

「いつものゲームと同じでしょ。獲物は早い者勝ち、邪魔する奴は脆い雑魚敵じゃない」

僕はISを直ぐに展開させると、リーダーで設定された目標へ向かって飛び出す。体に掛かる重みが気持ち良い。

ヒュンッ！！

音を立てて通り過ぎ去る砲弾を目で追いながら、自分の口の端が吊り上るのがわかる。ぞくぞくする。そこで、ガシリと何か力強く肩を捕まれた。

反動で体が反り返り、両足が振り子のようにあがる。僕が後ろを向くとフルフェイスマスクのISを着た女が肩を掴んでいた。そして僕の首を掴むと、いきなり腕を引いて自分のヘルメットを僕のヘルメットに押しつける。

『良いか欠陥モルモット、良く聞け。リーダーは私だ。お前はペナルティ加算が溜まっていて、これ以上勝手な行動するなら作戦に支障が出かねない。次に違反を犯したら私がお前を強制的にラボへ戻してやる。行くぞ、ナイザ』

バイザー越しに女のくぐもった声が聞こえた。声に怒りを感じる。僕が空中で静止している間に女達は2人で共に先へ飛んでいく。

……ふざけるな。

お前が僕をあの場合に戻す権利なんてない。そうさ、お前なんか邪魔だ。お前がいなければ、僕はもっと自由に動けるんだよ。だいたい、僕より弱いくせに歳が上なだけでうるさいんだよ。

やっちゃおうか。

やっちゃおう。

そうだよ。

そうしよう。

そうしなきゃ。

僕は無言のまま銃口を女に向ける。ロック表示がオレンジから赤に変わった。エラー音？そんなの関係ないよ。

「バイバイ、邪魔ばっかりの嫌な奴。大嫌いだったよ」

『おま

枯れ木をぼつきりと真つ二つに折るような感じかな。僕は通信音声越しで女が何か言い終わる前に、高出力レーザーライフルの銃口から綺麗な光の束を発射した。

1 - 1 | 2日遅レ

| 1 / |

春は何時も穏やかだが、始まりである為に煩いところもまたある。現に目の前の教室がそんな状態だが、先に入って行った教師の一喝したあとで途端にシンスと静まった。まるで封建主義の王が喝会の間へ入場したような静けさだ。

「いいぞ、入ってこい」

「はい」

その掛け声を聞いて、俺は適当に教室のドアを開けていく。入ってみると、当たり前だが女子ばかりで。やはり、IS関係はどこに行ってもこんな感じか。おや、世界初の男性IS操縦者も一緒なんだな。確か名前は織斑 一夏だったか。しかし、まー。女みてーな名前だな。同じクラスになるなんてのは、考えてなかった。周りを見渡すと、当たり前だが皆一様にざわついている。

「皆も入学3日目になるが、2日遅れの新入生だ。それでは自己紹介をしろ」

「市隈 喜久です」

皆一様に俺の方を見る。派手な髪形だの、目の色のことや背が低いだのと適当に言っているのが聞こえた。どうやら好みかどうかを話し合っているらしい。そんなふうに見回せば担任の織斑先生は頭の額を手で揉んでいた。

「昨今の男どもはみんなこうなのか。自己紹介はそれだけか？みんな見ての通りだが、市隈の情報は昨日まで秘匿されていてな。私も今日になって知った次第だ。何か質問がある者はいるか？」

数人から手が上がる。適当に指された女子が立ち上がった。

「男性なのにISが起動した理由はなんですか！？」

此処に来るまでに、道中で何回も質問された内容だ。途中まで数えていたが、何回目なのかもう思い出せない。だるくてしょうがない。

「触ったら動いたんだ。それだけだよ」

本当はそんな曖昧な理由と違うが、それを言うわけにはいかない。

「趣味は！？」

「読書と寝ること」

「何で1日遅れて入学になったの！？」

「書類の申請と家庭内のごたごたで。織斑先生、もう良いっすか？」

いい加減うざったくなってきたので、横にいる教師2人に声をかける。すると、織斑先生は手を2度ほど手を叩いて、質問の終了を告げる合図を送り生徒を静まらせた。

「複雑な家庭事情があるらしいので、余り本人を困らせる質問はしないように。市隈、席は一番奥を用意したのでそこに座れ。あと、ガキではないのだから猫背はやめろ」

めんどくさいが、反抗しても意味がない。それに、品性方向を謳っているような学園では当たり前なのかもしれない。ああ、反りが合

いそうにない。仕方がないとはいえ、どうして俺が一番嫌う場所へ放り込んでくれたのかね、あの姉さんは。

「どうした？早くしろ、先の予定がつかえる」

「ああ、はい」

ふと、考え込んでいたらしく、織斑先生に促されて席へ向かう。指定された席に着くと、興味津々と言った感じで横の女子が話し掛けてきた。ショーカットの似合う活発そうな容姿だ。

「これから宜しくね。私は貝田 啓子って言うの」

「ああ、宜しく。それにしても、やっぱりここは女子高だな。でも、教師は男子校みたいなのな」

貝田は振った教師の話題に嬉しそうにする。そして勢い良く話し始めた。

「織斑先生かつこ良いよね！！私も憧れてるの」

「ふーん。人気あんだな」

流石はブリュンヒルデだなんて呼ばれているだけあるのだろう。内戦地に派遣されて行ったら、さぞ一方的な戦果を上げるに違いない。

「それにね、前にいる織斑君で織斑先生の弟なんだって！」

「へえ、両方ともすごいんだな」

俺はノートと分厚い電話帳みたいな教科書を鞆から取り出す。元々知識があるとはいえ、今更ながら一から覚えようという気になれない代物だ。

前を向けば始まっている1間目の授業。えらい勢いで、詰め込み式

の授業がスタートする。授業と俺は水と油のように反応し、授業が進行するにつれてどんどん眠気が強くなった。これが後、午前中に3時間か…。

気合を入れ、何とか眠気を堪えて午前中を耐え切る。しかし、休み時間は全部魂が抜けたように机へと突っ伏した。

――

「ちょっと、宜しくて？」

なんだ？この漫画から抜け出たような、ふざけた喋りかたしてるのは？

まどろみの中で、そう思いながら顔を上げると金髪の海外人が俺の方を見ていた。顔立ちが綺麗だが、お高く留まっているのが感じでわかる。昼休みだと言うのに、飯を抜いて話し掛けても大丈夫なのか少し心配になった。

ちなみに周りを見渡せば、皆昼食を取っている。

「誰だ、あんた？」

「まあ、野蛮人に続いて貴方ものですの！？このイギリスの国家代表候補生で学年主席のセシリア」オルコットを知らないとは無知も甚だしいですね」

オルコットと名乗った女子は、呆れた口調で両手を上げながら肩を疎める。前言撤回、この外人は一度地面に頭を打ち付けたほうがいい。そう思うと同時に反面、俺はすごく感心した。

日本語がペラペラだし、アクセントも上手い。こいつIS乗りじゃなくて、通訳の方が向いてんじゃないの？いや。ここは優秀者しか

入れない場所だから、これくらいは当たり前なのか。

「ふぁ。悪いけど、ごたごたで左も右もわかんないんだわ。それに、昨日は徹夜でもう倒れそうなんだよ。それより、あんたは放課後暇な人？」

「そんな訳ないでしょう！！デートのお誘いならもう少し、気の効いた言い方をしなさいな。まあ、それでも忙しい身では

「ああ、デートの誘いじゃないし高圧的なのはタイプじゃないんだ。忙しいならいいや、お休み」

わざと言葉をぶった切って会話を終了させた。俺は知り合ったのは何かの縁と案内をお願いできるか聞いたが、本人は忙しいらしい。

プラスにならない会話なら、迷わず睡眠をとる。俺は頭を下げると再び眠りにつこうと瞼を閉じた。

頭上では「くぬぬ」とか言う声から、オルコットの顔が真っ赤になっっているのが連想できる。

「昨日の男といい、今日の貴方といい！！まだ話しは終わってません、起きなさい！！」

「痛え！！何すんだ！！」

教室中にスパンといい音が鳴り、続いて俺の怒鳴り声が続く。こいつ、いきなり人の頭を殴りやがった。周りの視線が痛くてしょうがないが、この際気にしない。

「貴方が途中で話しを切るのが悪いのです。宜しくって？」

何が宜しくってだよ、決め台詞じゃないんだからさ。

「一つ聞いていい？」

「普段は貴方みたいな輩に答える口は持ち合わせていませんが、なんでしょう?」

「なぜにそんなに喧嘩腰?それともう一つ、あんた顔は良いけど性格ブスで男にもてなそうだな」

「な!な、なな!」

「興奮すんなよ、事実だろ。それで話しの用件は何?」

オルコットの奴は一瞬で興奮が頂点に達したらしく、怒りで頬を染めているのがわかる。

「決闘ですわ!」

「はあ?嫌なこと言われて、怒るのはわかるけどそれはやりすぎだろ。イギリスは紳士淑女の国なんだろう?」

「昨日は祖国を!今日は私自身が侮辱を言われるなんて!!野蛮人の国の男は皆最低ですわね!!」

昨日をということは、残っているもう一人の男子の織斑　一夏って奴とも既に揉めたのか。

「で、その最低の野蛮人もう1人とは決闘になったの?」

「何を言っているのです、当たり前でしょう。今度のクラス代表をかけて、決闘となりました。当然、貴方も受けるのでしょうか?」

「え、俺はやだよ。面倒臭いし、メリツトないし、何より疲れそうだし」

「貴方、決闘を逃げると言うのですか!?」

「そうだよ、だから寝かせてくれ」

オルコットまるで信じられないといった顔をしている。そんなことはやってられないし、ISなんてものは出来る限り触れたくない。しかし、織斑一夏はこの阿呆の決闘を受け入れたらしい。こんな奴

に乘せられて、案外と単純思考型なのか。

「…そうですか、ならば戦わざる終えないように引きずり出して差し上げますわ」

「ふーん、精々頑張つて」

オルコットの阿呆は、やる気の欠片もない俺へと不適に笑い席から離れて行く。俺は再び目を閉じると、ぬるま湯に浸かる感覚で頭を腕の上に乗つける。まさか、このイギリス人が意外と頭の回る奴だとは、この時の俺は考えていなかった。

1 - 3 | ISノ在リ方

| 2 / |

「私セシリア」オルコットは、クラス代表に市隈 喜久を推薦いたしますわ」

「ほう、理由を言え」

授業の開講一番で織斑先生に対し、そんな発言が飛び出した。俺がまるで状況が掴めない中で、反芻したように織斑先生が理由を聞く。

「昼間、彼とお話をさせて頂いたのですが、是非出てみたいとおっしゃたので」

そう言つて、俺の方を見ると『やってやったわよ、だからとっと引きずり出される』という視線を感じた。嬉しそうに口元が笑つてやがる。俺はしょうがなく立ち上がると、前の教師2人の方を向く。

「今の発言は出鱈目です。俺は全くやる気は在りません」

「そうか。市隈に言つてなかったが、クラス代表を決めるのに推薦されれば拒否権は認められん。悪いが出てもらうぞ」

はあ？何だよその理不尽な仕組みは。俺はそこで今日初めてイラッと感じ、反論してやろうと少し前屈みになった。オルコットに反論しても意味が無いので、織斑姉のほうを向く。俺の視線で感じたのか、織斑姉のほうも聞く姿勢になるのが解った。

「人権が認められるなら、拒否権を行使できるはずだが」

「悪いが、この場で拒否は認めん。私が黒だと言ったら、それが白でも黒だ。覚えておけ」

「ここでは、軍隊式が基本なんすか？」

「そうだ。ひよつこの状態のお前をたったの一年で鍛え上げなければならぬ。その場合に駄々を捏ねさせている時間があると思うか？」

くっだらねえし、ふざけんじゃねえ。そっちがその気だったら、こっちも好きなようにやらせてもらうぞ。俺は、こんなクソ面白くも無い状態にしてくれたオルコットの方を一瞥した後、今度は睨みながら織斑姉の方を見た。織斑姉は反対に面白いものを見たような顔をしている。

「納得が行かないところがあるけどやりますよ。そのかわり、俺を引っ張り出した張本人を捻った後は、今後その強制権は無しにして欲しいんすが」

「ほう、それはオルコットに勝てると言っているふうに聞こえるが」
「そうです。だって、人殺しの道具を使用することに喜びを見出すことしか出来ない人間に、一体何が出来るんです？」

俺がそう言った瞬間、教室の空気が凍ったような静寂に包まれた。当たり前なのだが、俺自身がそういう考えなのだからしょうがない。オルコットは自分の思い描いていなかったであろう俺の反論に吃驚したのだろう、口を半句させて言葉を失っている。見ると、今さっきまで笑っていた織斑姉の顔が怪訝見を帯びた表情になっていた。は、危ない思想の持ち主だと思ったかよ。

「それはどういう意味だ。お前の意見を述べてみる」

「宇宙開発計画から国家間のミリタリーバランスへの転用変化がものがったってでしょう。政治と軍はたった10年ぽっち先より今

の目先に囚われる。それなら今のISの現状なんてのは、政治の玩具でしかない。つまるところ、ここで学んだことで役立つのは、国家のていの良い体分を盾にして行う将来を見据えた戦争の準備と、紛争地帯等への投入がメインになると思いますよ。女尊男非なんて言葉で言うが、武器を持つのが男から女に代わっただけです。前で殺しあうのが男から女になった」

「もう一つ聞こう。アラスカ条約はどう解釈している？」

「あんなもの、所詮は人間が作ったもので神様が作ったものじゃない。だったら破るのは簡単だし、変えるのも難癖つけて破れば良い」

授業が始まってたったの10分。それだけで、周りの人間がみんなお通夜のように下を向いていた。中には睨むようにこっちを見据えているのもいる。だが、少し考えれば当たり前だ。たとえ国家代表にならなくても、戦争なんてものが始まれば人手は幾らでも足りなくなる。ここに通う人間は、全て予備軍になるのが関の山だ。そんな可能性を考えれば誰だって暗い気持ちになる。

「そうか。お前の解釈はよくわかった。では、その人殺しの仕方を学ぶ為にお前はここに来たのか？」

「学ぶ気なんてないですよ。3年経ったら適当に仕事でも探します」

3年間は、おいそれとどこの機関もIS学園に介入できないのを知っている。今回この場所へ入らざるおえない状況にしてくれた奴らも、実際にここへは手を出しにくい。俺がここに来たのは、ただそれだけのためだ。

「3年経って卒業したら、どうするつもりだ？」

「どこかに所属するなんて論外ですから。国に捕獲されるなんてことになったら、世界の果てまで逃げますよ。当然そうします」

後ろ盾はないし、昔の出来事のせいで大手を振って歩けば即座に捕獲される。協力拒否なら実験動物の後は、ホルマリン漬けの最後が予想できた。織斑姉はしばらく黙っているが、沈黙した後には溜息をつくと再び俺の方を向く。

「お前の人生をどうこうしようとは思わないが、在籍中はオルコツトに勝ったとしても私に従って貰う」

「それは考えさせてもらいます」

「いいや、従って貰う。答えはイエスだけだ」

……根競べしてもしょうがない。それなら、要領上手く逃げればいいか。俺は自分の中で放心を固めると、片方の手だけを上げて教師を見た。

「わかりましたよ、従います。イエス」

「もう一つ。ISが兵器であることには変わらない。が、人殺しの道具だと言っるのは今後一切、校内で口にするな。わかったら返事をしろ」

「イエス」

座れと促されて俺が席に着くと、何事も無かったかのように授業がスタートする。しかし生徒の殆どが授業に集中できない様子で、みんなそわそわしていた。

1 - 4 | 同室者

| 3 / |

一日のカリキュラムが終わると、そのまま教室に残るように言われていた。なので、今は自分の席でぼーっと外を眺めている。結局授業中のやり取りが原因で、クラスの生徒は1人として話し掛けては来なくなった。

隣で最初に話し掛けてくれた女子も一言も交わさなくなっている。当たり前なことだが、それでも幾分気が楽になった気がした。

ここにきている連中は、全員がESに乗りたくて来ているエリート連中だ。決して、反対の意見を持つ者などいない。唯一の同性な織斑一夏は、長い髪を後ろで束ねた女子に引っ張られ直ぐに退室していった。織斑一夏は俺に興味があるようだったが、連れの方が用事があるのか急いでいた感じだろうか。授業もだるいが、プライベートルームもかなりだるい3年間になりそうだ。さてと

「市隈、待たせたな。寮に関して説明が必要だったのだな。山田先生、プリントを渡してやってくれ」

いつの間にか教室に入ってきた教師達は、俺に寮の規則がびっしりと書かれたプリントを数枚ほど渡してきた。朝に教室へ来る際、ちらりと寮があるのは確認している。ホテルのような建物で、無駄にお金が掛かっているような建物に見えた。

教師達の説明を受けながら書かれた文章に目を通していく。最後に俺の部屋番号が記載されている。ほう、女子寮しかないのです。そこに住むしかない。授業中は教師のほうで眉間の辺りを指で揉んでいた。まさか、今度は自分の方が揉むことになるなんて思わなかった。

よ。

「これって、体裁的に不味くないですか？予算や異例ずくしなのはわかるんですけど」

「ぎ、疑問なのは先生としても理解しているんですよ。織斑君も戸惑っていましたが、ルームメイトの子とは今のところ問題なくいつているので。ですから、しばらくの間だけ。ね？」

「そういうことだ。いずれ、部屋はお前と織斑の2人部屋にする。それまでは指定された部屋で女子と一緒に過ごしてもらおう。わかったら返事をしろ」

はあ？まさか織斑 一夏の奴は、既に女子と同室で過ごしてんのかよ。うらやましいよりも、気疲れの方が多いし問題を起す確率が高いんじゃないの。しかし、一週間以内に問題起きなかつたら、あいつはゲイ確定だな。

「イエス。で、俺は誰と一緒になんです？このクラスの人間は、みんな俺を遠ざけたいみたいですけど」

「それは、お前の自業自得だろう。自分で何とかしろ。私も山田先生もお前が言ったことは看過できんし、認めてはいないしな」

「市隈君の言いたいことは確かに考えさせられますが、それをこのクラスを預かる身としては容認できません」

山田先生は立場では認められなくて、織斑姉の方は認めないのか。

「で、結局俺の相方は誰なんすか？」

「それは自分で確かめてみるんだな」

織斑姉は不敵に笑い、俺は直ぐに山田先生の方を向く。すると、山田先生はすいませんと言って困った顔をした。なんだよ、織斑姉に

口止めされてんのかよ。やな感じだ。

「市隈、山田先生を萎縮させるんじゃない」

「へいへい」

「山田先生も、もう少し生徒の前では堂々としてくれないか」

「すいません」

山田先生はしょぼんと小さくなった。本当にこの人は教師なのか。俺が再び織斑姉の方を向くと、そこで何故か織斑姉は更に深い笑みを刻んだ。明らかに不敵から、からかいの笑みに変わっている。俺は背中にゾクリとした悪寒が走った。

「お前の鍵は既に部屋に置いてある。精々、相手に理解して開けて貰うことだ」

「はあ！？そんなん開けるわけないじゃないですか。野郎を認めて部屋に入れる女子なんて、普通いないでしょ」

「そうか、ならお前は私の部屋で寝泊りするか？規則正しい生活を送らせてやろう」

「絶対に、ご免被らせてもらいます」

どんなに美人だろうが、こんな軍人もどきの織斑姉と一緒に1日で脱走する。ましてや、横で自慰行為なんてなら絞め殺されかねない。くそ、後で絶対にやり返してやる。

「市隈君の部屋番号はプリントに書いてありますので、直接向かってください。荷物はフロントに預かっている筈ですからそこへ取りに行ってくださいね」

「あい」

俺は教師達に軽く一礼して教室を出ると、そのまま割り当てられた

仮住まいに足を向けた。

――

何てことはない、部屋を間違えたんだ。そう思いたい状況が、俺の目の前で展開していた。寮は一つしかないのだから間違えようもない。部屋がある階も字を読んで理解していた。部屋の番号は4桁で、一文字だけ読み間違えた可能性があるかもしれない。だから3度は見直した。だから3度も見直したんだ。

「貴方、私の部屋まで挑発に来ましたの？」

ドアを叩いて開けられてみれば、出てきたのは今日喧嘩したオルコットだった。当たり前だが、互いが喧嘩腰の対応になる。よりにもよって仕組みやがったのか、あの織斑姉のクソ教師が。俺は今すぐ部屋を変えろと言いたいのをぐつと飲み込んだ。そして、無言のまま教室で貰ったプリントを丸々手渡ししようとする。受け取ろうとしなかったが、オルコットの顔に近づけて認識させた。

「まったく、なんですよ!!」

オルコットは引っ手繰るように俺の手から奪い取ると、真面目にプリントに書かれた内容を読み始めた。そして最後まで読みきると、部屋番号が書かれているのを確認したらしい。美人特有の綺麗な笑顔のままドアを思い切り勢い良く、これでもかと言っくらいに気持ち良く閉め切った。

人間誰だって焦ったら変な行動に出るはずだ。思わず俺はドアを叩いていた。

「待てよおい！！ざっけんな、俺の意思で決まった部屋割りじゃねーんだよ！！文句なら織斑の奴に言えよ！！」

「冗談は顔だけにしておいて下さいな！！誰が貴方のような野蛮人を入れると思いますの！！」

「顔はかんけーねだろ！！そんなこと、わかりきってんだよ！！俺だって何が哀しくて、お前と同じ部屋なのか理解に苦しんでだよ！！」

「だったら、野宿でもしなさいな！！まあ、他に貴方を入れてくれるご友人の方でもいれば、泊まれるよう交渉してみなさいな。もっとも、そんな奇特な方が居ればの話ですが？」

うざい、うざ過ぎる。結局は不毛な会話だった。俺はそう思っ、あたりを見回す。今が5時前、人の出入りは殆どない。何人か遠巻きにこっちを見ていたが、俺が顔を向けると蜘蛛の子散ったようにそ知らぬ顔して去っていった。自分の行ったこととはいえ、やな環境だな。俺は一分程度の間を開けて、オホンと一息するともう一度だけ部屋のドアを叩いた。

「オルコットさん、同じクラスの貝田です。織斑先生から伝言を預かって来たの。開けてくれないかしら？」

俺の口から朝に知り合った貝田の声が響く。声を真似やすかったので、すんなり言葉を言うことが出来た。

「はい、ちょっとお待ちになって下さいな」

オルコットは当たり前のように対応し、ドアを開ける。そしてもう一度ドアを締め切ろうとして、俺はすかさず半身をドアと縁の間に滑り込ませた。俺とオルコットの押し問答が始まる。

「確かに貝田さんの声がしたはずなのに！！」

「確かに貝田さんの声がしたはずなのに！！」

オルコットの台詞と声を真似てやり、言われた当人は驚愕の様相を呈している。

「似てるだろ？特技じゃないけど、俺の喉の構造は不思議と女性に近いんだよ」

本当は別の理由があるけど。相手の顔が余りにも面白かったので、今度は織斑姉の声を真似てやることにしよう。

「私としてもしょうがないとは思っているが、何せ上の判断でな。部屋がお前のところしか空いてなかったのだ。悪いがオルコット、しばらく面倒見てやってくれ。ああ、なんなら行く所まで行っても構わんぞ。自己責任が私のモットーだからな。そして仲良く

ゴールインすれば良いなんて言おうとしたら、頬に衝撃が走った。視界が一瞬だけ真っ黒になる。口の中で鉄の味が広がった。

俺は床に転がり、痛みを忘れて思い切り顔を上げる。そこには仁王立ちして悪鬼の形相をした織斑姉がいた。横では山田先生がおろおろ泣きそうな顔をしている。オルコットはわけがわからないと言った様子で、不安そうに様子を見つめていた。

「喜べ市隈、今度なめた真似をしたら顎を砕いてやる」

「上等だ、クソ教師！！」

俺が叫んだ時には、織斑姉が屈み込んでいた。そのまま顎に衝撃が走る。視界で、2発目のアッパーが俺の顎に炸裂したのは確認でき

た。俺は仰け反り、再度の転倒をする。眩しい天井のライトが目に入ってきた。

女性の腕力だからだろうか、俺が気絶するには威力が足りなかったらしい。手を使わないで体のバネだけで勢い良く跳ね起きると、そのまま首を軽く鳴らす。

「ほう、意外と打たれ強いな」

「あんたが非力なんだよ」

「面白い、一発だけ全力で行くぞ」

織斑がそう言った瞬間、俺の視界は歪みながら真っ赤に染まり、次いで黒く変色した。

／＼／

寝起きは顔と腹の痛みで最悪だった。ずきずきと痛む部分を擦る。

腰から上を起き上がらせると、周りが薄暗いことに気づいた。

ライトがほのかに光っていて、下を向けば自分がベッドに寝かされているのが理解できた。まさか、気絶させられたのかよ。

「痛えな、たく。どんな腕力してんだか、あのメスゴリラは」

「そんなことを言っているから先ほどのようになるのです。それに、織斑先生なら貴方の横に居りましてよ」

「うそ！！」

冷や汗だらだらで、一息に横を向く。居ない。……俺はいつの間にか目の前に居るオルコットを半眼で見た。いい性格してやがる。当の本人は何事もないように、2つあるベッドの内で俺の居る反対の

方へ腰掛けた。手には紅茶の入ったカップが添えられている。イギリス人と接するのは初めてだが、本当に紅茶が好きなんだな。

「織斑先生と山田先生が言われるので、しょーがなく部屋の使用を許可するのですから。しょーがなく！！ですからね。もし如何わしい素振りを少しでもしたら、即つぎに！！部屋から叩き出しますから！！」

「大丈夫だって、安心しなよ。俺はお前にひとつ欠片も魅力なんて感じちゃいないから。性格ブスが直らない限り周りの男は声もかけないだろうしな」

「貴方って人は！！せつかく介抱して差し上げたのに、礼の一つも出来ないなんて！！ほんつとくに、野蛮人の国は礼儀の一つもなつてませんのね！！」

「お前の態度が尖り過ぎて、言う暇がないんだよ」

言われて周りを見渡して見れば、洋風の家具が幾つも確認できる。どうやらオルコットの私物に見えた。しかし、そのせいで、部屋面積が異常に縮んでいる。天蓋付のベッドなんてどこから入れたんだよ。文句の前に、俺はとりあえず部屋に入ってくれた事と介抱してくれたことだけは、心の中で感謝した。

「たつく、朝からここまでの時間で一週間分の疲れが溜まったよ。顔は良いんだから、もう少し丸くなれば可愛いのに。もったいな」
「な！！」

オルコットは赤面と怒りを混ぜたような微妙な表情でこつちを見た。何だこいつ、俺の言葉に動揺して。そんなに、男性経験が少ないのかよ。どんだけ純粋なんだ。

俺は気にせず痛む腹部を抑えながら立ち上がると、ハンガーに掛けてあった制服の上着の内ポケットを漁る。すると固い感触に指先が

当たった。

あったあった。それを取り出すと、見ていたオルコットが思わず違う意味で悲鳴を上げる。ひいっといた感じで、顔が蒼ざめていた。

「ちょっと、貴方は何をしれつと出しているんですの!？」

「何って煙草とライターだけ。酒はばれそうだったから、持ち込んでないけど」

「貴方、何を考えてますの?ここで吸ったら、臭いで直ぐに他の方がわかってしまいますわよ!!」

「だったら屋上で吸えばいいじゃん。こちら、14から吸ってんだから今更辞められないしな。イギリスじゃ18から吸えるんだっけか?裏じゃコカインも買えるって聞いているけど。なんならお前も吸うか?」

「私がそんなもの吸うわけないでしょう!!それに私が今の状況を許すとお思いのですの?」

生真面目ここに極まりりつてか。さすがはIS学園だ、品性方向がしっかりした生徒が集まっているな。俺は何も答えず靴を履くと、部屋の鍵を持って廊下へ続くドアを開けた。

「待ちなさい、話しはまだ終わってなくてよ!!」

「良かったじゃん。あんた、俺の弱みを見つけられたぞ」

オルコットは、はあ?と言った感じでポカンとした顔をする。俺はそのまま扉を閉めて屋上へ向かった。

屋上は鍵が掛かっていたが、無理やりこじ開けて外へ出る。涼しい風が頬を撫でつけた。人目につかなそうなところに腰掛けると、煙草に火をつける。蛍火のように赤い点が浮き上がり、紫煙がゆらゆらと宙を漂った。一息ついて、しばらくぼーっとする。次いで自然と言葉がもれた。

「なんで姉さんは、こんなところに放り込んでくれたかね。ここは俺の肌に合わないよ」

言葉は響くこともなく、すっと霞の如く消えていく。もう少しこの場所にいようか。俺は寝転がると、適当に買っていた缶ジュースのプルタブに指を差し込んで開封する。缶独特の開封音が小さく鳴った。

1 - 5 | モウ1人ノ男子

| 4 / |

俺が起きるとオルコットはまだ寝息を立てていたので、静かに着替えて部屋を出てきている。朝食の時間には早かったが、そちらの方が都合が良かった。

それに昨日の昼から食べていない為に、お腹は鳴りっぱなしでしょうがない。俺は女子の間で話題が拳がると、伝播するのが早いと感じている。それが面白い話題であればあるほどだ。きっと俺に関する噂は悪い意味で、よく浸透して伝わっているにちがいない。

配膳を取ると適当な席に着いて朝食を取り始める。周りは朝から部活動があるであろう、数人の生徒だけが疎らに座っていた。ゆっくり食べていると、だんだんと生徒の数が増え始める。

「横、空いてるか？確か市隈で合ってるよな？」

顔を上げながら横を見ると、織斑一夏が手に朝食を持って俺を見ていた。次いで何か痛そうなものを見たようにして顔を顰めている。隣で一緒に食堂へ来たであろう女子も意外なものを見たように、口に片手を当てて驚いた顔をしていた。俺はと言うと、片方の頬が青みがかっていてね。その上から絆創膏を貼っている状態だ。

「：頬のところ、どうしたんだ？」

「お前のねーちゃんに殴られたんだよ。三発目には、腹へ喰らって気絶した。随分鍛えてんのな、あの人。久々に良いのもらったよ」

俺が笑いながら話すと、織斑弟もつられて苦笑いながら「千冬姉は

怒らすと怖いんだよ」と言った。

ふーん、傍目から見ても姉とは随分性格が違いそうだな。織斑弟と連れの女子は俺の対面に座り、朝食を取り始める。

「あー、えつと…」

「一夏でいいよ」

「そうか、なら俺も喜久でいいから」

一夏はフレンドリーに話し掛けてくると、気さくなタイプなのかと適当にあたりをつける。俺はせっかくなので連れ添っている女子にも話し掛けることにした。

「そっちの人は？悪いけど、昨日はごちゃごちゃしてて何も覚える余裕無かったんだよね」

「篠ノ之 箒だ。呼び方は適当で良い」

篠ノ之は俺を悪印象に捉えていない話し方で接してきた。何で昨日の授業のことで、嫌悪感を持たないのか疑問が湧く。2人とも根っからのお人よしなのか？そんな事を考えていると、ふいに篠ノ之が話し掛けてきた。

「昨日は織斑先生と何かあったのか？」

「寮の部屋の入り口で同室の奴と人悶着合って、そこに来た一夏のねーちゃんと更に喧嘩になった。けど、ワンサイドゲームで3発喰らってノックアウトだ。お陰で顎が痛くて上手くご飯がかめない」
「まあ、喜久は昨日あれだけES批判してたからな。あんまり良いイメージもたれてないかもな」

一夏は欠伸をかみ殺しながら適当に答えると、コップに注がれた飲み物を口から注ぎこむ。俺も痛む顎を我慢しながら、適当にパンを

噛み千切った。3日は柔らかいもののお世話になりそうだ。

「市隈、同室の相手と言うのは誰だ？」

当然の疑問のように篠ノ之が投げかけてきた。

「ああ、高慢ちきのイギリス人だ」

2人ともげつとなり、俺のくじ運の無さにご愁傷様といった表情を浮かべている。そこで、いきなりこつりと頭を硬いもので軽く叩かれる感覚がした。

一夏と篠ノ之の顔が変わり、少し頬が引きつった顔をしている。俺が振り返って見ると、そこにはとても作り笑ひしてますといった表情のオルコットが俺を見下ろしていた。

「おはようございます、なにやら私の話をしていたようですが。何を話していたのです？」

「なんだよ。俺は、お前のいびきが酷くて寝れないって話をしてただけだ」

「へえ、そうですか。てつきり私は貴方が屋上でしていた行為をその野蛮人にも進めているのかと思いましたわ」

このやろう。お前、俺に対しての切り札を切るのが早すぎだろう。こつちが見せた弱みをどこで使ってくるのか、駆引きの仕方を見てみたかったのに。どんだけ気が短いんだよ。少し呆れた表情が顔に出ただろうが、気にしないでいることにしよう。オルコットの奴は今度は心底嬉しそうにしている。俺の呆れ顔を嫌そうにしている表情と、とったのだろうか。

俺は最後の一口を食べ終わると、席を立つことにした。が、オルコットは俺が立ち上がると同時に俺の肩に手を置く。一夏と篠ノ之も

何だといった表情をしている。

「私はこれから食事なのですが、膳を取りに行つて並ぶのが、些か
疲れますのよね。取つてきてくれませんか？」

「そんならい自分でやれ」

「あら、外を見れば今日はとても晴れていますのね。どこでも気持
ち良く過ごせそうですわ。人の目の届かない所でも。ねえ？」

どんだけ、揺さぶるつもりだこのやろう。俺は中指を立てながら、
オルコットの顔面へ持つていく。

「お前、絶対に後ろから刺されるタイプだろ」

俺は捨て台詞を残してトレイを持ち上げると、一夏と篠ノ之は理解
が追いつかないといった表情でぽかんとしていた。しょうがなく、
イライラを溜めながらももう一度生徒が並んでいる配膳列の方を目指
すことにする。

「それと」

「まだ何かあんのかよ？」

首を捻つて顔だけオルコットに向ける。

「私の名前はセシリア」オルコットです。お前ではなく、オルコッ
トと呼びなさい」

「面倒臭せーよ」

「ついでにタ・バ・スコもとつてきてくれませんか？」

「わかったよ、オルコット!!」

半ばやけくそ気味に答えて俺は生徒の並んでいる列へと向かう。そ

して、まったく可愛げのない対応をしてくるオルコットに、俺は不快指数を強めていった。

1 - 6 | 本人ノ実力

| 5 / |

あれから一週間、俺はオルコットの良い奴隷と化していた。毎日毎度毎回と、ことあるごとに煙草を吸っている事をちらつかせている。次からは絶対に弱みをみせんぞ。そんなストレスのせいで、持つてきていた煙草一箱は、僅か3日で底をついた。

そして、今日は今まで溜まったものを吐き出すための逆襲日を迎えている。そんな対戦当日の現在、俺は格納庫で2種類の機体を見て回っていた。

両方とも量産機で、鎧武者みたいなのと角張ったボディラインの多い変形ロボットみたいなのだ。ISが嫌いな筈の俺は、見るのもごめんなそれらの名前を知っている。

「打鉄とラファール」リヴァイブの好きな方を選べ。国家代表候補であるオルコットに対して、ひよつこのお前が勝つつもりでいる根拠は正直わからん。が、あれだけの大口を叩いたのだ。勝つ算段がついているなら、結果を見せてもらおう」

「わかりました。で、どこまでやっていいんですか？」

「どういうことだ？」

織斑姉は怪訝そうな顔で此方を見ていた。俺は思ったままのことを正直に告げる。

「相手が骨折するだけの攻撃をして良いのかってことです」

「駄目だ。これは戦闘ではない、少しは常識的に発言しろ馬鹿者が」

拳骨が振り下ろされて、もろに喰らう。頭に響く痛感覚が一瞬だけ、昔に嗅いだ硝煙の臭いを脳裏をちらつかせた。小さい頃は拳を頬に喰らっていて、俺の性格を矯正しようとしていた女性がいた。

が、そんな彼女も、もうこの世にいない。ラファール・リヴァイブの前まで来ると、手を触れてISを感じる。3年前は毎日感じていた名残と、IS入学試験に続いての感触だ。

「こっちにします。装備は自由に選んでも？」

「良いだろう。山田先生、レクチャーしてやってくれ」

山田先生がこちらに歩いてくる。

「市隈君、良いですか。装備を選ぶのはこちらのパネルに触れてください」

「ああ、大丈夫です。自分でわかりますから。予習したんで」

そう言っただけで俺はすいすいと作業を進めていく。何てことは無い、昔居たところで使ったことがあるだけだった。だから操作の仕方も知っている。淡々と作業をこなしていく横に、山田先生が感心した表情で画面設定を覗き込んできた。

「随分手際がいいですね。まさか、これを扱った事があるんですか？」

「いいえ。マニュアル通りやってるだけです」

覗き込んでいる途中で、山田先生が『えっ』と言う声を上げる。気になったのか、離れていた織斑姉が俺の方にカッカツとヒールを鳴らしながら近づいてきた。

「ほう、長距離用のスナイパーライフルを3丁だけで、弾を積み込

めるだけ。思い切った行動だな、相手が遠距離特化型なのに自信があるのか？」

「あるとか無いとか関係ありませんよ。俺は自分がやり易いように武器を選んだだけです。もう乗り込みますんで」

「そうか」と織斑姉は言つて、山田先生と一緒に機体のから距離を取る。俺は首を捻って回すと軽い準備運動の後で機体に背を預けた。機械の駆動音と共にピットのハッチが開く。射し込む日の光は眩しく、思わず顔を顰めた。段々と目が慣れると、外気の臭いが部屋に溜まっている微かな埃の臭いを塗りつぶしていく。一夏ならワクワクするだろうが、俺にはそんな感慨は沸かない。あるのは、過ぎり続ける嫌な思い出だけだ。

「この試合で勝ったほうが織斑と試合するんすよね」

「そうだ」

俺が織斑姉に聞くと、簡潔に答えられた。試合の展開上で一夏の奴は専用機がまだ届いておらず、結局このまま俺とオルコットが先に試合をすることになる。ハッチが開ききると、俺はラファール・リヴァイブを地面から切り離して宙に浮かせた。そのままゆっくりと前に進み、アリーナへと足を踏み入れる。頭上を見上げれば、視界にくっきりと映える青が基調のシルエツトがこちらを見下ろしていた。画面にはブルーティアーズの名が表示されている。

『逃げずに来たことは誉めて差し上げますわ。降参を言うなら今だけ見逃してあげましてよ?』

降参なんて、冗談にも程があるだろ。

「クソ教師に言われてから考えたんだけど、お前の中の常識的な決闘ってのはどういうルールだ？」

俺はオルコットに先の言葉を促す。

『もちろん、地面で無様に這ったときですわ。まあ、それをするのは私ではなく、貴方ですが』

なかなか良いことを言う。同感だ、俺もそれぐらいやらないと納得がいかなかったところだ。その透かしきった笑顔を泣きっ面に塗り替えてやるよ。

『あらあら、いけません。私としたことが軽率でしたわ。既に貴方は這いっばなしでしたわね、下僕さん？』

予定変更だ。絶対にこいつの笑みを後悔の2文字に変えてやる。ピーっというブザー音が鳴り響くと同時に、俺とオルコットの機体が素早く動き出した。

――

俺は満身創痍のような状態で、地面にめり込んだまま頭上を見上げている。そこには空の色に保護色で紛れそうな青い機体が空中を漂っていた。浮いているオルコットは、余裕とも不敵ともれそうな笑みを浮かべながら。

「口ほどにもありませんわね。まあ、挑んできた勇氣だけは誉めて

差し上げます。ワンサイドゲームで物足りませんが、これで終わりです。私を引き立てる為に華々しく散りなさい!!」

上空でオルコットのブルーティアーズがライフルの銃口をこちらに向けた。目の前のエネルギー残量を確認する。53か。まあ腐ったハンデにはこれくらいで充分だろう。瞬間加速は1回程度しか使えないが、それだけあれば余裕だ。俺は起き上がると、スナイパーライフルの銃口を無造作にオルコットへと合わせ

引き金を引いて、ブルーティアーズのレーザをこちらのレーザで相殺させた。

『な!!』

「驚くなよ。これくらい射撃に特化した人間なら朝飯前だろ?」

『くう、まぐれに決まっていますわ!!』

オルコットは叫んで武器を乱発し始める。1、2、3、4、5、6発。撃ち放たれるビーム光に難なく追従し、撃ち放たれた分だけを全て相殺していく。すると、きりがないと感じたのか他の武器らしきものを射出し始めた。

直ぐに視界の右下で相手武器の説明が表示される。へえ、ビット武器ね。俺は自身が避けられる幅を確保するため、すぐさま上空まで飛翔してある程度の高度をとりだす。

「貴方、どこまで私をこけにするおつもりですか!!それだけの力量を持っていながら、最初から何故全力で私に挑んで来なかったのです!!」

頭上からオルコットの怒鳴り声が、距離の離れている自分のところで響く。よっぽど腹に据えかえたらしい。オルコットはビットを4

つ射出すると、自分の周りに停滞させていた。

「別に、全力で行く必要なんかないだろ。ほら、ハンデだ。俺の残量エネルギーは53。まあ、ほぼ一撃で落ちる数値だ。嬉しいだろ？」

『くう、どこまでもぬけぬけと！！良いでしょう、そのまま堕ちなさい！！』

話しは終わりとばかりに、ビットを勢い良く加速させて俺の周りを取り囲もうとする。俺はスナイパーライフルを両腕で抱えると散歩道を歩くような速度で、オルコットの方へゆつくりと近づき始めた。

6時、3時、8時、0時と順次に角度が決められた位置からビットのレーザー攻撃が飛んでくる。見上げるが、本体からの攻撃はない。捻りがないな。そう考えながら最低限の移動で俺はオルコットへと距離を詰めていく。相手からしてみれば、回転独楽がヨレヨレで軸を失ったような避け方に見えるような感じだろうか。俺との距離がだんだんと縮まっていく。

しかし、当人の顔に焦りのような表情が見えない。まだ、何かもう一つくらい隠したまを持っているのだろうか？しかし、こいつは表情に出すぎだな。内心溜息を吐きながら、距離を10メートルまで詰めた時だった。

「堕ちなさい！！」

声がしっかり届く範囲まで近づいたところでオルコットが叫び、突然サイドスカートになっている部分が持ち上がる。そのまま俺に向かって実弾ミサイルが4つ、空を切るように飛び出してきた。

「勉強の時間だ。先ずは下に這うんだな」

次の瞬間、俺は呆れながらオルコットの顔面3センチ付近に、スナイパーライフルの銃口を突きつけていた。何てことはない、ミサイルの下を掻い潜っただけだ。

「そんな、イグニッション・プー瞬時加

相手が言い終わるのなんて、待つ道理もない。俺は構わずに0距離射撃を敢行した。

「きゃあー!!」

オルコットは盛大に叫び声を上げて一瞬パニックになる。絶対防御があるのが衝撃を全部殺せるわけないし、ましてや顔面に大口径の銃口を向けられたら普通は正気でいられない。俺は相手の頭上まで機体を上昇させると、そのまま足を振り上げた。

「何発耐えられるか、確認してやるよ」

弓なりに振り上げた足をピタリと止める。俺の力を絞って出された蹴りは、そのまま、矢を放つような速度でオルコットの顔面めがけて振りぬかれた。

オルコットはパニックから回復したわけじゃなく、咄嗟に庇ったのだろう。俺の蹴りはオルコットの両腕に阻まれて甲高い金属音が上空でこだました。それでも勢いは殺せなかったのだろうか、両腕が弾き跳んで体全体が、がら空き状態になる。

「一発で終わると思ったか？」

体を捻り、全体を丸ごと回転させて、続けざま2発目の蹴りをオル

コットの腹部に放つ。

「きゃあああ!!」

ズンツと沈み込むような感触に手ごたえを感じる。今度は綺麗に入り、オルコットは体をくの字に曲げると重力の従うままに地面へと落下した。

地上で土煙が膨らむように膨張し、拡散していく。俺はそのまま両手にスナイパーライフルを構えると、標準を覗き込んで獲物を狙う。サイトの中心はヘッドショットのあたる位置へ固定できた。

地面に埋っているままのオルコットの顔面に合わせて、トリガーを引

『勝者、市隈。終わりだ、そこまでにしておけ』

会場内に響くスピー力越しの声。俺は思わず織斑姉の居る方向を向いた。舌打ちして、銃を肩に預けて担ぎ上げる。

『市隈、この後どう戦うつもりだった?』

織斑姉の声がスピー力越しに聞こえてくる。そんなことは、決まっている。

「頭にヘッドショットを打ち込んで、組み付いて武器を全損させます。相手のエネルギー残量がなくなるまでひたすらオルコットの顔面に0距離射撃の繰り返し。止めに全治3週間くらいの骨折をさせて終わりでしたけど?」

『貴様は、ピット内での私の言ったことを聞いていなかったのか?』

「いいえ。だから最後に威力を調整して、エネルギー残量をギリギリ1にした後で、瓦解寸前の絶対防御中に折りたい場所を貫通して

打ち抜くつもりでした」

『市隈、オルコットを立たせて反対のピットへ運んでから自分のピットへ戻り、そのまま待機している。話がある』

「イエス」

俺は、気だるく返事をする。スナイパーライフルの武装を解除してオルコットの方へ近づいていく。最後までヘッドショットはやり続けるつもりだったが、良い気づけにはなっただろう。地上に着地すると、オルコットは青ざめた表情でこっちを窺っていた。

おおかたさっきの会話を聞いて恐怖したのだろう。俺はゆっくりとISの纏った手をオルコットの前に差し出す。すると、「ひっ」という声が聞こえた。

「もう攻撃はしないって約束する。それに最後に貫通させるなんて言ったのは、あの教師のやり方にむかっているから反抗してるだけ。お前は、俺がああ教師にイラついてるの知ってるだろ？それと、戦闘中に行動が顔に出すぎなんだよ。立てるか？」

俺がしばらく体勢を維持している。やがてオルコットは顔を引きつらせながら、恐る恐るといった感じでゆっくりと手を差し出してくる。手に重みを感じると、俺はそれを握ってゆっくりオルコットを立たせた。

右にまわり込んで体を支えながらピットの方へと向かう。運んでいる途中で、オルコットはゆっくりと小さな口を開いた。

「：貴方は、容赦がありませんのね」

「そうだなあ。まあ、俺は子供の頃に防弾ガラス越しで、実弾を0距離射撃され続けたことがある。最初の2日間は、何も喉に通らなかった。3日目でも食事を吐いてもどした」

いきなりの発言にオルコットは絶句したように、俺を見ている。

「何でそんなことを…」

「いろいろとね、毎日そんなことばっかやってたんだ。だから、12までは学校なんて行っただことがない。容赦も何も、俺の基準なんでもともとズレまくりなんだよ。音声は向こうにも届いてるからな、俺がお前に話せる内容はこんくらいだ」

独白のように俺は自分の過去を語る。じつとりと手に汗が浮かんたような気がした。なんとなく、なんとなくだけれど、ISは平和に届かない代物だと言うことを体感して欲しかったのかもしれない。だから、自分が昔受けた過酷な思い出の一端を同じように再現したのだろう。そこに後悔感はない。そして、それ自体はエゴだと理解できている自分がいた。

オルコットは無言でこちら側を見ている。整った綺麗な顔立ちは、埃で汚れていも健在だった。どんな状態でも絵になるってのは、美人の特権だな。

「なあ、競って強くなって、国の代表になって世界のトップになつてさ。その先にあるのって何だ？もし、軍事バランスが崩れて戦争になった時に、お前は敵国の人間をISで殺すのか？」

「…わかりません。ですが、今の私にはこれが必要なのです。」

「まあ、事情は人それぞれか。話しは終わりだな」

そう言っただけでオルコット側のピットにたどり着くと、俺は自分のピット側に向かっていく。視線の向こうでは鬼の形相をした織斑姉が立っているのが見えた。戻りたくはなかったが、結局きつい一発を喰らうために足を運んだ。

1 - 7 | 候補生ノ気持チ

| 6 / |

試合後に織斑姉のきつい一発を顔面に入れられてから、1時間の休憩を挟んだ。今は一夏との試合になり、2人ともISで空中に浮いている。一夏には黄色い声援がとび、俺には凄まじい野次の嵐だった。前回の試合でオルコットに顔面0距離射撃なんてのを敢行したせいで、殆どの生徒が今や敵になっている。ようは、一夏が正義で俺が悪役といった構図が生まれていた。

試合の後で一夏に「やりすぎだ」と言われたが、俺は「あれぐらいがちょうど良い」と言った。なので、今はお互いが険悪な雰囲気となっている。

『市隈、聞こえているか?』

「なんすか?」

うつとしい声が聞こえて、自分の口からやや剣呑な声がでた。先ほど織斑姉は、俺の治りかけの頬に突き刺さるようなパンチングを行っている。今はささくれだった感情のせいで、適当に答えることしかできない。

『織斑相手に手加減する必要はない。半殺しでやってかまわん』

「はあ?ここでは普通、俺にセーブさせるところじゃ?」

『お前にできるならな』

「へえ」

こいつ本当に教育者か?けど、その挑発に乗ってやるよ。俺は通信

を終えると一夏に喋りかける。

「一夏、お前の姉からお達しが出たぞ」
「何だよそれ」

一夏もつつけんどんな会話をしてくる。話してる間に、ピーっと試合開始のブザーが鳴った。俺はスナイパーライフルを構えながら笑って伝えてやる。

「半殺しにされてこいだだよ。俺も人のことはいえないけど、お前の姉も恐ろしいな。野郎相手だ。最初から全力でやるから、武装を呼び出せ。準備できたら始めるぞ」
「ああ」

武装の展開を促す。しかし、しばらくして一夏の奴は焦りだすと、なんの覚悟を決めたのか剣を構えだした。あいつ、何で銃器類を構えないんだ？

「一夏、何やってんだ。お前それ近接戦闘用だろ」
「しょうがないだろ！！こっちは武器がこれしかないだよ」
「嘘つけ、ちよつと見せてみる」

試合がしらけるがしょうがない。俺はライフルをしまつと、無防備を強調して一夏に近づいていく。一夏もぶつくさしながら剣の構えをといた。俺は一夏の肩に捕まりバランスを取りながら、2人で装備と一緒に確認する。すると、ばかげた装備内容に俺は思わず戦慄した。

「お前これ、装備内容をごっそり剣一本に持ってかれてるぞ。それのせいで、スロットにも余裕ないじゃん」

「何だよ!!」

「俺に怒るなよ。つまんね、しらけた。…どうせ、まだ一次移行が終わってないんだろ。ゆっくり待ってやるから、終わったら始めへ」

俺は一夏から距離を取る為に、背を向けて距離をゆっくりと取っていく。それにしても、雪片二型ね。ごつい名前なこと。距離をとって振り返りながら一夏の方を向くと、俺はその場でゆっくりと待機した。

一向に試合が始まりを見せないのを不信に感じたのか。観客からは声援と罵声が消えて、一体いつ始まるんだといった雰囲気になってきている。

『何をしている、時間がもったいない。早く試合を開始しろ』

そして、観客の声と入れ替わるように織斑姉の命令がとぶ。

「一夏の準備が終わってないし、剣のみじゃ話しにならないですよ。そっちが、何を考えてんのか知らないし、知る気もないです。俺は俺のやりたいようにやらせてもらいますよ」

『始めなければ、お前を失格にするぞ』

一夏の方を見れば、一次移行がいまだに終わる様子がない。俺は肩を上げながら織斑姉に答えた。

「やりたきゃやれよ。俺は別に勝ち負けに興味なんてねえよ、最低限で適当に卒業できりゃ良いしな。バトルジャンキーは他を当たれや」

『そっか』

そのままビーっというブザー音が鳴り響き、今日の試合は終了した。もちろん勝者は一夏になった。

――

俺はここでの生活にきつと疲れ始めている。女ばかりの空間は色々な意味で苦痛なのだろう。愚痴を吐ける相手もない。現に今も、試合放棄と目上への態度不謹慎の罰をくらっていた。

試合後に課せられた罰は寮の大浴場の掃除だ。俺の隣では一夏も掃除している。俺だけ罰を喰らうのは納得が行かないらしい。律儀なんだが、意見を押し通す辺りが頑固だな。真面目で頑固で一本気なんて俺と正反対だ。

「なあ、喜久。お前なんで、俺の一次移行まで待ってたんだ？」

「そらあ、オルコットの奴は最初から戦える状態だったしな。一夏の場合はわけもわからず乗ってただろ。フェアじゃないのは嫌いなんだよ」

お陰でデッキブラシ片手に床を擦ってるけどな。織斑姉め、殴っても無駄だと判断したら今度はこれかよ。オルコットとの試合で、俺だって少なからず体を酷使してんだぞ。一夏は笑いながら喋りつつ、ブラシを床に当てる。

「おまえって律儀だな」

「お前にだけは言われたくないな」

「なんだよそれ」と一夏が言っつて、仲良く1時間かけて風呂を端までブラシをかけた。掃除が終わって片付け終わると、俺は気になっ

ていることを一夏に聞く。

「それより、一夏。オルコットと試合すんだって？」

「ああ、お前が試合放棄して俺が勝ったことにしたんじゃ、負けたオルコットは意味不明な状態だろうからな」

教室へ向かいながらも話は続き、一夏はうんうんと考え込んでいる。

「そらそうか。確かにそれじゃ、むこうさんも納得しないわな」

「だろう。俺だって、あいつと同じ立場なら考えちまうよ」

まあ、俺の気分で試合をぶち壊したんだ。そら、悪いのは俺だしな。他の女子連中からは、随分生意気に見えるだろう。

「試合は明日だっけ？」

「ああ」

「まあ、一夏じゃ勝てないだろうけど、応援はしてやるよ」

「言っただ。暗にお前の方が強いって聞こえるぞ」

俺もオルコットも搭乗時間が一夏よりも圧倒的に長い。この差はど
うにも埋めようがないし、一夏はそれをわかってないらしい。

「さあな。まあ授業以外、俺は極力ISに乗るのはごめんだからな」

「なあ、なんでお前そんなにISを否定してるんだ？」

純粹ってのは怖いね、人が聞いて欲しくない質問も平気でしてくる。
俺はどう答えるべきか。理由を話せば、言いたくない過去も話すこ
とになる。出来ればそれは避けたい。

「授業中に言った通りだよ。IS否定の本人がISに乗ってるんじ

や、矛盾してるけどな」

「そうか、喜久のIS嫌いも少しでも良くなるといいのにな。俺は、ギスギスしたのって苦手なんだよ。オルコットとは、俺も含めてだけど仲直りしてくれよな」

「それこそ、説得力のない言葉だな。まあ、向こうは基本が上から目線だからな。蠟燭と鞭を持ったら、さぞ似合うだろうよ。結局は、相手の態度しだいだろ」

教室で鞆を取って寮に戻る道すがら、俺の耳に入ってきた言葉がある。市隈は女の敵で外道だと。やった後の後悔もあれば、後の祭りかんでも否めない。が、生徒たちから絶大的な人気のある教師にまでたてついたんだ。当然、悪口にも拍車がさらにかかった。

寮まで来ると、そのまま二人して俺の部屋に向かう。ノックをする、ドア越しからオルコットの「開いてますわ」と声が聞こえた。自室なのに、何が悲しくてノックしなけりやならないんだらう。

「織斑も一緒だけど良いか。オルコットと、話したいことがあるんだそうだ」

「どうぞ」

「だとさ、入ろうぜ一夏」

「ああ」

一夏を促して部屋に入ると、セシリアが西洋アンティークみたいな椅子に座って足を組んでいた。一夏が思わず部屋の状態に驚いている。西洋家具で埋め尽くされた部屋は、学園でもここだけに違いな。俺も周りを見渡して驚いたから、当たり前前の反応だわな。

「オルコット、試合中は悪か

「セシリアと呼んで下さいな、喜久さん。一夏さんもすいませんでした」

そう言つて、オルコットは俺の言葉を遮りながら頭を下げた。

「はあ????」

俺は思わず一步仰け反つて部屋の壁の端に頭を打つてしまい、一夏も驚いて俺の方を怪訝な表情で伺っている。まるで、お前なんかしたんだろといった顔だ。てか、何があるのかと俺の方が勘ぐっちゃう。痛む後頭部を摩りながら、俺はあわてて弁明する。

「待て、俺は試合以外は何もしてねーよ」

「じゃあ何で俺にまで、謝ってんだよ」

「一夏さん、勘違いですわ。喜久さんは何もしていません。私が間違つた行動をしていたのです。ですから、謝罪するのは当然のことです」

俺も一夏も驚きすぎて、頭の中で慌てふためいている。これじゃ、話が進展しない。しょうがない、核心だけ聞こう。

「なあ、オルコット。何で

「セシリアと呼んで下さいまし」

何で親しくもない相手に呼び捨て強要すんだよ。

「なあ、セシリア。間違つたなんて言ってるけれど、何を間違つたと感じたんだ」

「そうだな。俺も聞きたい」

俺の後に一夏が言葉をかぶせる。セシリアは一拍置いてから独白のように喋り始めた。

「私の両親は既に亡くなっていて、この世に生きていません。両親が生きている間、父は婿養子という立場もあり母に引け目を持っていました。ISの登場で女尊男非になると、余計に父は臆病になっていったのです。私はそれを端から眺め、情けない表情に嫌気が差していました。情けない男は嫌いだと。それがいつしか周りにいる全ての男性に当てはめていたのです。喜久さんと試合をして、恥ずかしながら自身の勘違いに気づかされました。喜久さん、あなたが疑問に感じていることをお答えします。私は家族から残されたものを守るために、ISに乗るという手段を選んで学園に来ました」

セシリアの口から出たのは、なかなかヘビーな内容だった。しかし、拒絶的からの友好的な態度への変換が激しい。俺は理由には納得いくが、未だに疑ってた。

何せ、この一週間を下僕のように扱われてきたのだ。自業自得だったが、腑に落ちない。一夏は素直に納得し、俺の肩にポンと手を置いている。わかってやれよといった表情で見られると、俺だけが悪役みたいだ。

「喜久も俺もだけど、セシリアと仲直りしたくて話をしに来たんだ。こっちこそ、ありがとうな。だろ、喜久？」

「入ったら、鬼の形相で構えてると思ってたんだけどな。しおらしくなってるから、正直びっくりしたよ。まあ何にせよ、俺にも謝らせてくれ。試合中は悪かった、俺も頭に血が上ってたよ」

セシリアは嬉しそうに頷くと、泣きかけだったのが軽く目尻を拭いた。俺も一夏も頷いて、その場に和気藹々とした雰囲気広がる。俺は奴隷から解放されたことを確信し、それも嬉しく感じた。

「そっかそっか。じゃあ、引き続きタバコのことは黙認することで良

いんだよな」

「なに！？おい、喜久。お前、煙草なんて吸ってんのか！？そんな駄目に決まってるだろ、直ぐにやめろ」

なに！？一夏は反対派なのか！！

「それとこれとは話が別です。今すぐお止めになるべきです」

結局、俺はセシリア側に援軍を送ってしまい、そのまま二人に煙草をやめろという説教を小一時間垂れられる。告げ口はしないが、止めるよう散々言われた。

見上げる晴天に広がる青空は清々しい。世界中どこで見ても、この光景だけは変わらないからだ。そんな上空で、2機のISが浮遊している。そして、急降下して一機だけ派手に地面へと激突した。無残にも埋つたのは一夏の展開している白式。で、これが俺の目の前に広がるIS学園での授業風景のひとコマだ。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

織斑姉から檄が飛ぶ。周りのクラスメイトはクスクスと笑っていた。これは一夏の奴、精神的にくるだろうな。

「ふむ。おい、市隈。お前が手本を見せてみる」

「嫌ですよ、面倒くさい」

「私は寛大だからな。風呂掃除を一週間連続と、どちらが良いか選ばせてやる」

このやろう。俺は反抗的に視線を向けながら、学園から半ば強制的に与えられた俺専用のラファールⅡリヴァイブを展開した。専用機なんて欲しくもなかったが、受け取らないと懲罰扱いだなんて言われりやしょうがない。だが、受けとった直後はアクセサリーの状態を見て、溶鉱炉へ投げ込んでやろうか考えた。それでなくとも入学してから一ヶ月近く経つが、未だに織斑姉とは仲が悪いままだ。手早く終わらせるために、無言のまま一気に上空まで急上昇する。

そのまま、今度は一気に急降下すると、減速と反発的に一瞬だけ瞬間加速ツシヨン・ブーストを行なった。織斑姉は、珍しく感心したような声を上げる。

「ほう。スピードも殆ど落とさずに1センチ以内か」

「どうも」

まったく、面倒だ。周りの女子達からは、失敗しないことへの舌打ちなどが聞こえた。ISの展開を解くと、俺は輪の中心から外れようと移動する。

「市隈、まだ戻って良いとは言っていないぞ。武装展開の開放課題が残っている」

「そんなん、俺じゃなくても良いじゃないすか」

「3度目は言わんぞ、戻れ」

「イエス」

俺が再び輪の中心に戻ると、一夏とセシリアは既に部分展開を行っている。セシリアはある程度が順調だった。一夏は上手くいったが展開時間のせいで怒られている。織斑姉が俺の方を向いた。

「市隈、やってみる」

「イエス」

俺は面倒くさがりながら、無言でスナイパーライフルを呼び出す。それを引っ込めるとブレードを展開して、また引っ込めた。あんまりすんなりで行ったからだろう。教師二人以外がぽかんといった表情で見えていた。

「市隈、もっと早く行ってみる。手抜きは許さん」

「んだよ、これが限界ですから」

ち、提出した経歴以外で、どんだけ俺のことに探りを入れるつもりだ。

「風呂掃除は確定だ。これ以上増やされなくなったら、各々の手に違う武装を同時展開をしてみろ」

「…スパルタめ」

そんなに俺の全力が見たいなら一回だけ見せてやるよ。

「いきますよ」

言いながら両腕に違う武器を同時にそれぞれ呼び出した。これには、織斑姉以外が驚いて俺の方を見ている。

「やはり異なった武装の同時展開も、素早く使えるのか。もう良いぞ、展開を解け。市隈、お前は授業後に織斑とグラウンドの穴を埋めるように」

「そら、嬉しいご褒美だな」

俺は展開を解くと、そのまま輪から外れて適当なところを陣取る。すると、そこで授業がおわったらしく、織斑姉は号令をかけて授業を終わらせた。クラスの奴らが教室へ戻ろうとする中で、俺は一夏に声をかける。

「なあ、一夏が開けた穴を埋める為の土は、一体どこにあるんだ？」

「いや、俺が聞きたいくらいだ」

周りを見れば、余分な土を貯蔵している場所は見当たらない。しょうがなく、2人して地面の穴を埋めるための土を探すところから作

業を開始した。

――

「ふーあ。おちつくわ」

星が微かに見える夜の時間に、俺は寮を抜け出してこっそり喫煙タイムに耽っていた。最初のストックが三日で切れた俺は、中学時代の不良仲間カートンで煙草を小包にして送ってもらっている。そして、囷として一箱はわざと同室のセシリアに見つかるようにして取り上げられた。次いで、しつこく返してもらえるよう食い下がるのも忘れない。これで、煙草はもう吸えないと向こうは認識しただろう。しばらくして、吸い終えてから吸殻を携帯灰皿にしまうと、俺は寮を目指して歩き出した。

「ちょっと、そのアンタ。道を聞きたいんだけど？」

「んあ。ああ、俺のこと？」

寮への帰宅がらに、声を変えられて後ろを振り向く。すると、見慣れない髪形の女子に声を掛けられていた。

「そうよ。寮ってどうやって行くのかしら？」

「そりゃ、ちょうど良かったんじゃない？俺も今から寮に戻るところだよ。何なら一緒に行くか？」

「ラッキー！ところでさ、あんたはIS学園の生徒なの？」

「一応な」

「へえ。男子は1人しか居ないって聞いてたんだけど。情報が古い

のかしら」

情報も何も、俺のことは学園自体が最近把握したばかりだからな。3ヶ月前までは国の一部の奴らも知らなかったわけだし。まあ、言う必要もないか。そんなことを考えていると、横を歩く女子Aはしげしげとこちらの顔を覗き込んでいた。

「あのさ、織斑　一夏は知ってる？」

「一夏つてのはあの天然だろ」

俺が寮から少し離れた方向を指差すと、一夏が篠ノ之と何か口論になっていた。いつもの良く見慣れた夫婦喧嘩だろうから、そういうのはほっとくに限る。しばらく観察していると、篠ノ之を慌てて追いかけるように、一夏が去っていく。

「な、なな、なんで…」

横から声が聞こえて向けば、イライラした女子Aが一夏の方をずっと睨んでいる。この反応だと、一夏の知り合いかなんかか？ だったら、ここは薮蛇は突付かないに限るな。

「そのまま、まっすぐ行けば寮の正面玄関だから。それじゃ」

「ちよつとちよつと、あんたも寮に戻るんじゃないの？」

俺は前方の寮を凝視して見ると、仁王立ちしたセシリアが外に向かって睨んでいた。こっちはまだ気づいてない。

「俺は鬼の居ない裏口に行くとするよ。正面に、金髪の子がいるでしょ」

誰が好き好んで捕まる方へ行くというのか。この前の試合のあと、一夏とセシリアが試合してセシリアが勝った。どちらも相手の武器を把握していたが、遠距離に徹したセシリアに軍配があがったのだ。しかし、セシリアは経験をつんで欲しいからと一夏にクラス代表を譲った。

まあ、俺のせいで試合形式自体が滅茶苦茶になったせいもあるが。そんなわけで、今日はクラス一同が一夏の代表祝いと称して騒ぐらしい。俺は行きたくないが、一夏とセシリアは強引にでも連れて行く算段らしかった。

俺が行ったところで、場がしらけてしょうがないだろうに。外に一服しに行った理由も、だいたいそこにある。

「なにあれ、あんたの彼女？」

「良いなあ、その発想は好きだな。残念だけど、彼女じゃないし俺には高嶺の花だな」

「ふーん、まあ良いわ。ここまでありがとね。ところで名前を聞いてなかったわね。私は凰　鈴音っていうの。どうせ、学年一緒だしまた会うでしょ？」

「同じ一年なら、そうだな。俺は市隈　喜久。適当に呼んでくれりゃ良いよ。凰て苗字からして中国人だろ？最近の海外の人って、みんな日本語がそんなに流暢に喋れるん？」

セシリアの時もそうだが、IS学園に居る海外人は総じて日本語が上手だった。この凰て子も綺麗に滑舌が回っている。

「さあ、それはわからないわね。私の場合は、日本に住んでいたことがあるから」

「ふーん。ハーフかなんかか。悪いな、長話して。それじゃな」

俺は適当に話を切ると、凰を見送ってから寮の裏口へと戻って行

つ
た。

1 - 9 | クラス対抗戦

| 8 / |

次の朝、いつもの様に一夏と篠ノ之、最近加わったセシリアの4人で教室のドアを潜る。すると、教室は、いつもより少しざわついていた。

4人分かれて各々の席に向かうと、鞆を置いたセシリアが俺の机に近づいてくる。一夏と篠ノ之もやってくるのだが、遠巻きに見ると一夏は他の女子に捕まっているっぽく見えた。篠ノ之は基本が一夏に追従なので、まだこちらにはやって来ない。

「なにやら朝から騒がしいようですが。一体なにがあっただんでしょうか？」

「そらきつと、どっかのクラスに転校生なんてのが来たからじゃない？」

俺は昨日会った、時期外れの転校生を思い浮かべながら頼杖をつく。が、行儀が悪いとセシリアに窘められ、もなく頼杖を止めて適当な他の姿勢をとることにした。

「喜久さんは何かご存知ですか？」

「ほら、昨日俺は外に逃げてただろ。その時に寮の場所を教えられて、そいつに頼まれて案内したんだよ」

「へー。私から逃げている間に、そんなことをしていたんですの」

「何を勘ぐってんだか。今さら、女子高みたいなど来て、女子に夢見たりなんてしないから。この1ヶ月で現実をよく学ばせてもらったよ」

「そうですか。なら、良いですわ」

セシリアはにこにこと笑う。好意もってくれてるのも妬いてくれるのも嬉しい。本人が俺をどう思っているのかもの気持ちも予想はつく。が、セシリアと過ごしていて、毎日ねつとりと甘ったるい関係はそこにはない。今の関係は、まさに母親のセシリアと悪ガキの俺という構図と化していた。俺にとっては、そんな状態で恋愛感覚もへったくれもない。

「それはそうと、昨日案内した鳳は教室の入り口で何やってんだ？」

俺に言われて、セシリアがドアの方を向く。そこでは、鳳が一夏に向かつて「二組の代表は私よ」と言っていた。そして直ぐに織斑姉が出現し、叱責と出席簿による打撃攻撃をくらう。そんな光景を見ていた俺は、顔面パンチよりあっちの方が良いなと考えていた。

隣を見ると、セシリアはおずおずと自分の席に退却している。俺は、女子でも容赦なく振り下ろされるあの凶器は、セシリアも怯えてるんだらうなと感じた。

――

午前の授業が終了して、何時もの昼休み風景になる。俺は席から腰を上げると、一夏がこちらを向いて手を上げていた。それを見たクラスの女子達が、恨みがましそうに俺の方を見ている。しょうがなく、俺は溜息を吐いて一夏を牽制することにした。

「おい、一夏。俺が邪魔でクラスの女子がお前を誘えずにいるぞ。たまには、他の奴を誘ったら？」

「セシリアのことは、もう済んだだろ。現にセシリアも一緒に飯を食べるようになったし。大体、昨日はそれを改善しようと、ずっと寮で待ってたのに来ないお前が悪いぞ」

「わかってるけど、反省する気もないからって、痛え！」

後ろからいきなり耳を引つ張られた。

「何に駄々を捏ねているのです？早くしないと、食堂が埋りますわよ」

「なにすんだよ！！い、やめ、わかったから」

セシリアに引つ張られて、一夏と篠ノ之が苦笑している。クラス的女子もいい気味だだとばかりに笑っていた。俺はピエロじゃないぞクソツタレ。しかし、そんな気持ちも置いてきぼりをくうくらいに、セシリアが耳を引つ張り続けた。

「待ってたわよ、一夏！」

そして、食堂につけば着くで、今度は例の転校生が待っていた。適当に席を陣取って、昼食を取りながら話をする。聞けば、やっぱり一夏の知り合いだった。篠ノ之と幼馴染だとは聞いていたが、鳳も同じような感じらしい。先ほどから会話を交わしているが、どちらも一夏が好きなのがわかる。はつきり言って、傍から見てる分には面白い。が、当人だったら嫌な板ばさみだな。俺がセシリアと話していると、鳳の顔がぐるりとこちらを向く。

「ところでさ、喜久。隣の人は本当にあんたの彼女じゃないの？」

いきなり話を振られて、今まで話をしていたり聞いていた面子が俺の方を向く。俺は溜息をつくと箸を下に置いた。隣とは、もちろん

セシリアのことである。

「俺とセシリアの関係は、躑る母親と躑られる子供みたいなもんだよ」

「なによそれ？」

凰は「その意味不明な解釈はなんなの」と反応し、一夏と篠ノ之は納得したような顔をする。セシリアは対照的に少し拗ねた顔をした。そして肘内を地味に鳩尾に入れる。

「痛いんだけど、それ。無言で肘を入れるなよ」

「おほほほ。何のことでしょうか？」

俺はセシリアのじとつとした抗議の視線を受け流しつつ、再び食べ物を口に運ぶ。そして水を飲んで、口内を空にする。

「というわけだ、凰。そっちが肴に出来るようなものは提供できないよ」

「ふーん。でも、一夏よりぼけてもいなさそうね」

「一夏より酷かったら、入院確定だろ」

仲良くなってから聞いた話だが、一夏は両親がいらないと言っていた。織斑姉が育てたのだろぅが、どうしてそんなに異性関係に疎いのか。

「なあ。何で俺は酷い言われようなんだ？」

「お前が鈍すぎるのだ」

一夏が抗議の声を上げるが、篠ノ之がそれを撃沈した。こういうことは自分で気づくしかないだろう。というか、篠ノ乃と凰が可哀想なので、直ぐに気づいてやって欲しい。凰が興味を無くして、話が

近況に変わる。するとISの話になった。

「悪い、俺ちよつと先行くわ」

「ああ、後でな」

一夏が返事をして俺は席を立つ。

「ちよつと!?!待って下さいな!」

食事中にまでISの話は聞きたくない。トレイを片すために歩き出すと、少し遅れてセシリアが後を追ってきた。

――――

あれから、数週間の時間が過ぎた。どうも、一夏と凰は喧嘩したらしく、俺とは会話しても一夏は無視されていた。まあ、一夏が何かやらかしたのだろう。そして今日は、クラス対抗戦の当日。俺は人気の無い寮の屋上で煙草をふかしながら、アリーナの活気を見下ろしていた。

なんとも大規模な行事だ。学園で唯一の専用機持ち男子の一夏と、新しい専用機持ちの凰は話題性抜群だろう。セシリアも見に行つたから、今ごろ篠ノ之と隣同士で観戦中にちがいない。

あの二人は協力して、毎日一夏を鍛えてたからな。俺は嫌なので参加しなかったけど。アリーナから少し視線を動かせば、外に設置されている金の無駄遣いを象徴しているような、一際大きなモニターが目を引く。

「ここにいたんだ」

「はあ？」

後ろを振り返ってみると、初日に会話を交わした貝田がこちらを見ていた。今の俺は手に煙草が握られている。つまり、もう隠すのは手遅れだという事実だけは理解できた。

貝田も少し驚いた様子でこちらを見ている。

「えー、黙っててくれませんか？」

「どうしようかなー？」

「ですよー」

もういいやとばかりに、やけになって俺は隠しもせず煙草を吸う。フェンスに腰掛けると、何故ここに來たのか聞くことにした。

「俺と話していると、他の女子に仲間外れにされるぞ。それに、一夏の試合見に行かなくて良いんか？」

「友達にはトイレに行くって伝えて、先にアリーナに行ってもらってるの。なかなかこういう機会って、ないから。市隈君には、どうしても謝りたくて」

貝田は申し訳なさそうに言う。女子同士は男子のそれよりも、付き合い方がめんどくさいことは知っていた。それに、いつもは一緒にいるセシリアも今日は試合を見に行っている。貝田はセシリアが俺の傍に居ないのを見計らってたのか。俺は貝田に対して適当に手を振ると、吸いきった煙草を携帯灰皿にしまった。

「別に気にしてないよ。もともとは、授業中に俺が取った行動が原因だしね」

「それでも、無視してたのは私だし。市隈君が織斑君やセシリアさんとかと普通に話してるのを見て、私が考え方を変えた方が良くない

「思ったの」

「さいですか。まあ、どつちでもいいけど。とりあえず、貝田さんの好意には甘えておくよ」

「ありがとう」

貝田は「これは仲直りのしるしね」と言って、背中に隠していた両手を前に出す。そこには缶ジュースが2本握られていて、そのうち一本を俺によこした。特に断る理由も無いので、受け取ってプルタブを開ける。2人して飲んでみると、少しの間を置いて貝田が話し掛けてきた。

「市隈君は、なんでISが嫌いなのに学園に入ったの？」

「まあ、やむにやまれぬ事情ってやつかな。そっちは？」

セシリアの時は事情が事情だったけど、他の奴はどうなのだろうか。

「私の理由は単純だよ。ただ、ISに乗ってみたかったから。そのために猛勉強もしたし、そのおかげで憧れの織斑先生にも会えたし。クラスみんなは良い人多いしね。前から聞きたいことがあったんだけど、何で市隈君はISの操縦があんなに上手なの？」

「感覚が良いからじゃ答えにならないよな……。じゃあ問題だ。代表候補生がISに乗っている時間はどのくらい？」

「え、いきなり！？うーん、300時間くらいって覚えてたけど」

貝田が答える。はい、良く出来ました正解です。俺は空を見上げながら上空に手を翳す。貝田は俺の行動に何をしているのか、ぼかんとした表情で見っていた。

「まあそんならいだよな。1日1時間として、約一年くらいだよ。じゃあさ、俺が乗ってるのがそれくらいとしたらさ。まあ、こん

な具合になるわけだ!!」

上空からアリーナの方へ飛来する人型めがけて、瞬時展開した腕とさらに展開したスナイパーライフルから弾を発射する。人型は挨拶代わりに攻撃をかわして、こちらを見据えていた。

「煙草のことは黙っといってくれよな」

ISを部分展開から全面展開すると、イグニッション・ブースト瞬時加速で人型と同じ高さまで上空を一気に駆け上がる。相手の姿を完全に視界に納めると、そいつは異様な光景だった。

全身が完全に装甲で覆われている。こんなISの型は今まで見たことが無い。軍事系列の特殊な物でもこれは何か異質だ。俺はスナイパーライフルを展開しながら前を見据える。普段の校則では普通時のIS展開は禁止だが、今は緊急事態だから知ったこっちゃない。

「どこに行こうっての？部外者はさっさと退場してくれよ。全身装

甲さんよ」

「」

少しの間のあと、相手からの答えは腕部から発射されたビーム砲だった。

1 - 9 | クラス対抗戦（後書き）

お気に入り、ポイント評価ありがとうございます。ストックを投下致しました。後は、誤字脱字を修正いたしました。稚拙で汚い文書になってしまい、申し訳ありません。

戦闘行為が始まって5分。最初に体当たりで海上へ押し出すと、そこからお互いが得物の撃ち合いによる膠着状態になっていた。無骨でゴリラみたいな姿形から予想していたが、こっちのラファールより向こうの方が明らかに火力が高い。たまに瞬時加速を混じらせながらでないと、避けようもない攻撃もある。

このままだと、いずれはこちらがエネルギー切れでジリ貧になっちゃう。機能停止させるなら、相手のエネルギーを無くすか核を潰すしかない。核は大抵守りやすい背中辺りにあるはずだ。

やってみるか。

「いくぜ、木偶の坊! !」

喝を入れる為に叫びながら、イグニッション・ブースト瞬時加速で相手の懐に潜り込もうとする。すると、相手は腕部のビーム砲を止めて、振りかぶりながらパンチングしてきた。

「甘えんだよ」

さらに単発的に瞬時加速を連続で使い、ぐるりと相手の背中に回り込む。イグニッション・ブーストライフルを1発を後頭部へ、ラビットスイッチ高速切替で両手にブレードを取り出す。

「避けるもんなら、やってみろ!」

そのまま、両手を相手の背中に振り下ろた。ものすごい勢いで、紫電と火花が散っていく。俺は、俺だけが持っている能力がある。しかし、これにはでかいリスクがつく。迷ってる暇なんて無いからな、忌々しいがやってやるよ。

「引きずり出される、クソツタレ!!」

叫んだとたんに、自分の五感が鋭くなる。そして、ピシリと音がすると、ブレードが瞬間的に絶対防御を突破したのがわかった。そのまま、背中の装甲へとブレードがめり込んでく。これで終わ

「なん、ぐああ!!」

視界が回転する。

「うん、がふあ!!」

しと思ったたら、今度は何かに叩きつけられた。色が青から、より濃い青へと変わる。混乱したあとで、そこが海中だと気づいた。くそ、視界が霞みやがる。海面に激突したのが効いたか。俺は一息に体制を戻すと、海面から飛び出して再浮上した。

「足掴んで、投げ飛ばしやがって。核が背中に無いなんて反則じゃねーか」

「」

「だんまりか。そら、そうだよな。無人機のくず鉄じゃ、喋るわけ無いわなあ」

俺の読みが外れて、核は背中^{コア}に無かった。目の前で、胸に穴が空いている無人機ISが佇んでいる。そして視線を移せば、初回に消耗した分のせいでエネルギーが100を切っていた。形勢が一気に逆転して、有利な状況が無人機ISへ傾く。手にはジトリと汗が滲むのを感じる。このままじゃ最悪は殺される可能性もあるだろうか。もう一度、力を使うなんて論外だ。あれは、使い続けると俺自身が危なくなる。くそ、どうすれば良い？

『市隈、聞こえているか？』

突然、織斑姉から通信が入る。

「冷静な対応なんて出来ないけどな！！今、良いところなんだよ！！」

敬語で話す余裕なんてないし、会話を待ってくれる相手じゃない。再び、無人機が腕部からビーム砲を撃ち始めた。

『お前が所属不明ISと交戦中なのを確認した』

「遅い報告よりも、援軍を寄こす連絡だろうな！！こっちは、もう持たねえぞ！！」

俺は戦闘が学園内なので、騒ぎに気づいて直ぐに援軍が来るものと期待していた。が、今はその読みも外れている。

『今、手の空いている教員を大至急向かわせている。あと3分で良い、持たせる』

「死んだら、絶対に呪ってやるからな！！覚えとけよ体罰教師！！」

俺は集中するために通信を一方的に強制遮断する。正直、3分なんて今の状態じゃ持たない。考えている間にも、どんどん相手の攻撃でエネルギーは削れて行く。イグニッション・ブースト 瞬時加速も残りは最悪2回しか使えない。やるしかないのか。

くそつたれ、死んだら本当に化けて出てやるからな!!

「行くぜ、鉄くず!!」

俺はもう一度、3年前に決別したはずの呪われた能力を引きずり出す。瞬間、今度は何かが脳天に突き刺さったような感覚に陥って

全てがクリアな世界に感じられた。

「
」

無人機は両腕を前に突き出して、ビーム砲を打ち出してくる。

「遅せえ、んだよ!!」

まっすぐ突進しながら、ビーム砲を目視だけでかわしていく。俺の目には、視界の入る全てが止まったように見えていた。ビーム砲の弾幕を抜け切り、相手の無人機を前にしてブレードを発生させる。俺は勢いよく、そのまま両腕を振りあげた。イグニッション・ブースト 敵が砲撃を止めて、そのまま俺を殴り飛ばそうとする。俺は最後の瞬時加速を使って、ギリギリのところで無人機の側面に回り込む。

「顔がから空きだぞ、鉄くず!!」

これで核があるとしたら、人の顔が普段ある頭部だ。それじゃなくても、せめてカメラを仕込んでそんな視界だけは潰してやる。

「くらえやあ!!」

もう一度、無人機の絶対防御を突破する。ブレードは相手の顔を捉えるとそのまま、顔面にめり込んでいく。

「ぐう!!」

後ろを取ったわけじゃない。無人機の腕が俺の体を鷲掴みして握り潰そうとしていた。ラファールの装甲が、ひしゃげた音をどんどん増やして悲鳴を上げていく。俺はそれを無視して、力の限り叫ぶ。

「く、た、ば、れええ!!」

数秒後、綺麗に無人機の頭を吹き飛ばした。無人機の腕がだらりと下がる。やがて、停止しそのまま力なく海中へ落下していった。核は潰せた手ごたえはないが、エネルギーは切れたらしい。

「俺の方が一枚上手なんだよ、ざまあみろ」

結局は援軍が来る前に、俺が無人機を壊して戦闘は終わった。だるい、眠い。俺はもう嫌だぞ、こんなの。

— — —

無人機ISの破壊を終えて、勝手に自室に戻る。そこで初めて気を

抜いた。俺に貸し与えられたラファールⅡリヴァイブは、もはや半壊の様相を呈している。だけど、今はそんなこと知ったこっちゃない。

「はは、だっせえ。異物に頼っちまうなんて最悪だな」

自嘲気味に呟き、こと切れたように思わず床に倒れこむ。全身の発汗作用が止まらず、体中がガクガク揺れる。3年ぶりに使ったIS TS《IS同調システム》は、とても反動のきついものだった。

強い力には跳ね返りも強い。使用の代償は、俺の寿命だ。今回のせいで、確実にそれを蝕んだろう。鏡に自分の像が写る。そこには見慣れた赤髪はなく、白髪で真っ白だ。眼球も真っ白になっていた。こつも完全に色が変わってしまつと、最早1時間は元に戻らない。しょうがないとは言え、とても見慣れたくない姿だった。

キイツとドアの開閉音が聞こえる。頭だけ動かしてセシリアの姿が目に入った。クラス対抗の試合が終わつて戻ってきたのか。

「…よお、お帰りさんだな」

「喜久さん！！大丈夫なのですか！？なぜ髪の色が変わっているのです！？」

セシリアの困惑した声だけが耳に入る。声も籠っているような聞こえ方しかない。第一、自分がちゃんと喋れてるかもわからない。が、人が来たのなら後はお願ひしてしまえば良い。俺は楽になりたいとばかりに、その場で意識を切り飛ばした。

1 - 11 | 不明点考察

| 10 / |

学園内の一室は薄暗く、光源としては青白い発光色に照らされている。そんな中で無人機ISが寝かされ、スキヤニングをかけられていた。

「先ほどから調べていますが、登録されていない核コアでした」
「そうか」

教員である、千冬と麻耶が会話を交わす。

「ISの核は世界で467しかありません。しかしこれには、そのどれでもない核コアが使用されていました。どこから、誰が一体こんなことを…」
「それもそうだが。まさか、無人機がこんな状態で回収されるとわな」

お互い、疑問は尽きることがない状態だった。麻耶が続けて報告を行う。

「無人機の状態も頭と胸部が欠損しています。随分激しい戦闘を行ったようですね。しかし、これは一体どうしたら…」

「無理やり絶対防御を突破した結果だろう。しかし、尋常ではない威力がなければ無理だな」

疑問の焦点が核コアから、もう一つの問題へとスライドしていく。現在、

彼女達は二つの問題で悩まされていた。

「市隈君ですが、彼の個人履歴は本当なのでしょうか？」

「政府直轄で通達が来た人間だからな。中身の公表も殆どされていない。麻耶、これを見てみる」

千冬が手元に持っていたファイルが麻耶に手渡される。それには、喜久から一時回収されたラファールの行動履歴が記載されていた。しばらくすると、麻耶が絶句した表情になる。

「これって。戦闘の際の動きや切り替えも凄まじいです。ですが、記載されている同調率が、とどころで計測不明なのは一体なぜでしょうか？」

「これはあくまで仮定だが、100%を超えたのだろう。私としては、それ以外に説明がつかん。それにしても、これではISに選ばれた男というよりは、ISのために作られた男といった感じを受けるな」

二人して思考の渦に吞まれそうになる。麻耶は不安な顔をして千冬を見た。

「それにな。もう一点だが、オルコットから妙な報告を受けた。試合観戦の後に部屋に戻ったら、市隈の髪と眼球が真っ白に染まっていたそうだ。しばらくしてから元に戻ったらしいが。それも関連性があるのかもな」

「…彼は一体何者なのでしょうか？」

「さあな。だが、いずれは本人に聞かなければならないだろう」

沈み込んだ雰囲気は誰しも好ましくない。千冬はわざとらしく肩を浮かせて苦笑いした。

「まあ、それじゃなくても手のかかるガキには困ったものだ」
「そう言ってますが、手の掛かる子はそれだけで愛着が湧きますよね」

追従するように麻耶が言葉を返す。

「そういうものか？」

「そういうものですよ」

麻耶が笑い、つられて千冬も笑う。

「まあ、感情が素直に出やすいからまだ可愛げはあるかな。さて、こいつの解析を済ませてしまおう」

「はい」

2人は再び作業を再開した。

1 - 12 | 目覚メタ後デ

| 11 / |

「目が覚めましたわね」

セシリアの声が聞こえた。俺が意識を手放してどのくらい経ったんだろう？目だけ動かせば、俺の周りにはセシリアの他に、一夏、篠ノ乃、鳳がいる。そして、いつもより一人多く貝田が追加されていた。依然として全身が疲れを訴えていたが、俺は構わずに身を起こす。

「おはようさん」

「喜久、体の調子はどうだ？」

「おおかた大丈夫かな。悪いね、心配かけたな」

俺は、無理やり背伸びをして体に鞭を打つ。しばらくは、抜けなさそうなダルさに軽く嫌気がさした。時計を見れば、夜の8時を回っている。うゝん、寝すぎだな。

「貝田さん、いきなり話きつて悪かったな。教師に連絡してくれたのって貝田さんでしょ？」

「ええ。それより、本当に大丈夫なの？さっきまではあんなに髪が白かったのに」

思わずどきりとして、周りを見渡した。脳裏には恐怖感が渦巻く。

「あらら、見ちゃったの。理由を挙げるなら、俺は特異体質でちょっとだけ体が変わんだよね」

「それより喜久、俺たちはアリーナに居たんだ。それなら、直ぐに助けを求めれば良かったのに。なんで1人で戦ったんだ？」

一夏が話をずらしてくれて、恐怖感が薄れる。

「そうですね。会場には私もいましたのに。なぜです？」

一夏とセシリアが俺を見て怒っている。あの無人機に向かって行く時、後で言われると思っていたことだ。もちろん、言い訳は用意してる。

「焦ってて、余裕なかったんだよ。一夏のねーちゃんと通信会話もしてたけど、すごい暴言しか吐いてないし。それにさ、アリーナは人だらけじゃん？そんなところに突っ込むわけにも行かないでしょ」
「本当はどうなんだ？」

一夏が俺を見据えながら言う。いやに突っ込んでくるな。なんだよ一体さ。

「なに？それしかないけど。じゃあ、本音を言えば1人の方がやり易かったからだよ。俺以外は足手まといだったからだ」

「アンタ！！それが、心配した人たちに言うセリフなの！！」

黙っていた見ていた凰が、いきなり噛み付いてきた。こりや、殴られるかな。そう思っていたら、一夏が凰を手で制止する。なんだ？

「鈴、ちょっと待ってくれ。喜久、お前さ。誰かが傷つくのが嫌だったからじゃないのか？」

「俺にそんな良心なんてないぞ。大体ISが大嫌いな人間がそんなことするかよ」

おいおい、なんで今のお前は変に鋭いんだ？

「喜久がISを嫌いなのは知ってるよ。でも、俺や他の連中とは普通に接してるのはなんでだ？お前って、ISは嫌いだけど人は嫌いじゃないからだろ。違うか？」

一夏の澄んだような黒い瞳が俺を見る。俺は少し沈黙した。たく、くさいセリフ平気で吐きやがって。俺は話を続けるために口を開く。

「アリーナに被害はいつてないだろ？一夏は今日、勝ったのか？」

言った途端、凰が苦虫を噛み潰した顔をした。対戦相手は君だったのね。俺は対戦表ぐらい見とけばと、少し失敗感を感じる。しかし、勝った一夏も嬉しくなさそうな顔をしていた。

「ああ、お前が守ってくれた試合だからな。勝ったよ。でもな、次からは必ず俺たちに頼れ。試合なんかより、お前が傷つくのを止められない方が俺は嫌だからな」

「そうですね。何も知らずにいる方が、辛いです」

ずっと、少しだ緊張の糸が解れるのを感じる。思ったよりは、ここで俺の存在を認めてくれる奴らがいるんだな。俺は一夏とセシリアに心の中で感謝した。

「わかった。次からは、必ず知らせるようにしますよ。一夏、右手出せ」

「あん？」

わけもわからずと言った感じで、一夏が右手を俺に差し出した。

「違っよ。握って出すんだ」

俺は一夏の握った右手に、自分の右手を軽く打ちつけて静止させる。

「おめでとさん」

「おお、サンキュな」

中学以来、男同士の碎けた会話が愛おしく感じる。だから前が当たり前で、今がストレスの連発だと感じていた。しかし一夏と知り合ったおかげで、ここでの生活も少しはまんざらでもなさそうだ。そして、当たり前のように恐怖の時間がやって来た。

「市隈、体の具合はどうだ？」

「うおっ！」

ノック無し、ドアの開閉音無し、歩行音も無い。いつからそこにいたんだよ！一夏の横からスライドするように、軍曹織斑姉が現れた。当たり前だが、他のメンバーも驚いて一歩その場から離れている。

「何を驚いている。私も鬼じゃない、今のお前を殴ることはないから安心しろ」

「はあ」

ああそうだ、俺は暴言を吐きまくったんだよな。今度はどんだけサンドバッグにされるんだ？

「お前に渡したラファールⅡリヴァイブだがな。随分派手に壊してくれたので、回収して修理の方に回したぞ。それとな、お前は今回

ISの無断展開使用で、1週間の謹慎処分が学園から通達された。良い機会だ、一週間は部屋に籠ってそのまま休んでいる」

「なんでそんな温いんだ？退学にしてもおかしくないだろ？」

俺の発言に、織斑姉は軽く溜息をついた。

「教師には敬語を使えと言っているだろう。まあ、今回は学園を守ったという大義名分があるんだ。しかし、はじめはつけなければいけない。学園長は擁護側だったがな。しょうがなく罰したというのが、本当のところだろう」

「そ、すか」

俺は気が抜けたように背中を丸めた。

「市隈」

「まだ何か？」

「今日は、あの状況でよく凌いだ。良くやったな」

「は？」

俺はぼかんとして、織斑姉の方を見た。え、なに？なんか今、褒められたの？俺が？

「お前ら、今日はもう時間だ。さっさと寮に戻れ」

織斑姉がみんなを保健室の外へ追い出していく。俺は、一緒に退出しようとする織斑姉に慌てて声をかけた。

「先生、ちょっと！」

「何だ？」

「迷惑かけました」

「そうか。だったら、今の反省は今後の態度で示すんだな」

笑った顔のまま、織斑姉はドアをスライドさせた。俺はしばらく保険医が来るまでの間、狐につままれたようにしていた。

2 - 1 | 6月ノ転入生

| 1 / |

クラス対抗戦が無事に終わって、外は緩やかな空気に包まれている。五月病なんて言葉があるが、俺の五月病は女子の空間に慣れすぎて麻痺したこともかもしれない。が、俺の横ではもう1人、それに慣れちまった人間と一緒に教室へと向かっていた。ちなみに今は六月の梅雨を迎えている。

「なあ一夏」

「ん、どうした？」

「何で、ここって男子が少ないんだろっな？」

何を今更と言ったような顔で、一夏が俺を見返してきた。

「貴方たちが他の殿方と違ってにいるからでしょう。それよりも、そのだらしない姿勢を直しなさいな」

一夏とは俺を挟んで反対側を歩いていたセシリアが、ありがたくないうちを注意をとばす。鳳と篠ノ乃は一夏を挟んで反対に並んで歩いている。

「しかし、なんで俺らの部屋は別々なんだ。一夏は、なんでか聞いてない？」

「いんや、なんも知らん」

2人して首を捻る。そう、セシリアとの精神的に落ち着かない同居

生活は、このほど教師の天の声で終了を告げた。そして、蓋を開けて引越してみれば、一夏との同室にはならなかった。これが腑に落ちず、俺は織斑姉の不敵な顔を思い浮かべる。前回は、本当にはめられたと思った。だからこそ、今回も考えてしまう。

「私としては、同室でも構わなかったのですが…」

横でぶつぶつとセシリアがぼやく。

「この国は、男女7歳にして同衾せずってな。それじゃなくても、今までがありえない状態だったんだよ」

「なにそれ。アンタ、ジジ臭いよ」

「なに！？そんなことはないぞ」

俺の言葉の変なところに凰と篠ノ之が反応した。俺たちは「またな」と言っただけで別れ、そのまま教室のドアを開ける。ついで、いつもと違う違和感を感じた。

「なんだよ。これが理由か」

「理由とは何だ？先がつかえるぞ、進んでくれ」

俺が先頭で教室に入ろうとしたために、後ろでつかえた篠ノ之が声を上げた。俺は進みながら指を2回ほど別々の場所へ指し示す。

「ほら。他の連中は気づいてないけど、机が二つ増えてないか？」

「あれ、ほんとだ。喜久よく気が付いたな」

一番後ろの列に見慣れない、はみ出した机が二つ並べられていた。

「もしかしたら俺と一夏のほうか、篠ノ之とセシリアのどっちかに

ルームメイトが増えるかも」

「なんですの、それ！！喜久さんの部屋に女子が来ると言うことですよの！！」

「冗談ではないぞ！！一夏の部屋に女子が来ると言うのか！！」

うお、なんで2人して俺に食って掛かるんだよ。そういうのは、一夏だけにしてくれ。俺は、一夏の方を向きながら話を進める。

「まあ普通は転入生ならそうだろうさ。とはいえな、それじゃあ俺と一夏が同居から外れる意味がないだろ。そしたら、最低1人は男だろうって結論は考えられない？」

「でもよ、それじゃあ世界でISを扱える男はそいつを含めて3人にならないか？そんなに、ぽんぽんと男の適正者って見つかるものなのか？俺は来るのは女子だと思うぞ」

一夏の馬鹿野郎。そこでまた、女子なんて単語を出すんじゃないよ。

「一夏あ！！お前は、女子が来た方が良いのか！！」

「一夏さん、不健全ですわ！！」

「なんでだよ！！俺は、ただ単に予想しただけじゃんかよ！！」

矛先が俺から一夏のほうへ向く。俺は一步下がって、呆れ顔でその様子を眺めた。しょうがないな、まったくよ。

「なあ、賭けないか？転入生の最低1人は男かどうか。俺は男だと思っけど、一夏は？」

「良いぜ。喜久が男子なら俺は女子にする。どう見てもそっちの方が可能性が高い」

助け舟とばかりに一夏が話しくいつく。

「学生が、そんなことしていいわけないだろう！！私はやらんぞ！」

「あら、では私は分の悪い方が愉しそうですので、男性に賭けさせて頂きますわ。篠ノ之さん、意外とお堅いんですね」

ぎょつとして、篠ノ之がセシリアの方を見る。セシリアが意外とノリが良いのにびっくりしてるのか。いや、賭博はイギリスが本場だぞ。イギリスの競馬場は社交場でもあるんだからさ。チャイムが鳴ると、俺たちは各々の席に座り、教師2人が入ってきた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「え……」

「「えええええっ！？」」

朝のホームルーム中に山田先生が告げた報告で、一気に教室内が騒がしくなる。数秒遅れて教室のドアがスライドすると、2人の生徒が教室に入ってきた。

「失礼します」

「……」

俺は一夏のほうを向くと、当の本人はそんな馬鹿なとも言いたそうな顔をしていた。篠ノ之も呆氣にとられている。セシリアと2人して満足げにアイコンタクトしあうと、俺は前を向いて転校生を確認した。

そして、実は一夏のほうが当たりかも知れないと思った。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不

慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

フランス人の方が挨拶する。柔和な笑顔を皆に向けるが、俺が一番後ろの席から食い入るように観察していた。金髪を後ろに束ねて、中世的な顔をしている。男にしては体が角張っていないので、スマートさが際立って見えた。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を」

誰かが声に発し、丁寧にデュノアが返事をする。

「ちゃんとした、3人目の男子……！」

「根暗に見えないし、どっかの誰かとは全然違う……！」

「美形の男子が2人もうちのクラスにいるなんて……！」

拍手喝采で女子に迎え入れられるデュノアに対し、対比として俺が槍玉に上げられる。一瞬、昔みたいにくれてやろうかと思考が過ぎった。

教師2人は騒ぎを止めるために口を開く。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんまだ自己紹介が終わってません。静かにしてください」

もう1人の銀髪が姿勢を正したまま、微動だにせず立っている。肩より下に伸びた髪とナチ党みたいな黒い眼帯が特徴的だった。だが、独特の威圧感のようなものがその特徴を圧倒している。背はシャルルより低い、そんなことを感じさせない軍人のような印象を受け

た。なんか、ヒトラーユーゲントみたいだな。

「……挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

呼ばれた女子は、織斑姉に素直に従っている。教官なんて呼んだってことは、前のどこかの教え子か？しかし、織斑姉はめんどくさそうにしながら続きを喋りだす。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒とかわらん。呼称は先生を使い」

「了解しました」

自己紹介で、随分面倒臭い状態になってるな。ラウラが織斑姉から生徒側を向いて、俺らを見据える。へえ、随分蔑んで見るんだな。姿勢を正すと、ただ一言だけラウラは自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……。あの、以上ですか？」

「以上だ」

しばらくの沈黙の後で山田先生が続きをうながすが、当人はきつぱりとそれを拒否した。続けて、ボーデヴィツヒは俺のことを指差しながら睨み付ける。なんでだよ。

「お前が教官の弟か？」

「はあ？髪の色が違うだろ。一夏はお前の目の前にいるよ。なんだよ、片目のせいで見えにくいのか？」

俺が指摘すると、無言でこちらを更に睨みつける。

「貴様、後で顔を貸してもらうぞ。お前が織斑教官の弟か？」
「そうだけど」

一夏が答えると、ボーデヴィツヒはその場で激昂した。

「貴様が！！」

パンツ

綺麗な音が教室内に木霊す。すげえな、綺麗に一夏の頬を叩きやがった。おいおい、なにやってんだよ。

「いきなりなにしゃがる！！」

「ふんっ」

一夏が怒って席を立つと、ボーデヴィツヒはそのままつかつかと無視して歩いていく。俺の横を通って、空いている席に無言で座った。そして、それは位置的に俺の真横になる。

「貴様、逃げるなよ」

ボーデヴィツヒが小声ですごみながら、こっちを見てきた。あとは、機械のように静かに前を向き続ける。俺にも平手打ちつかか。そんなの、絶対ごめんだね。俺はにやりと笑って、先手を打ってやろうと手を上げた。

「先生、ボーデヴィツヒさんが部屋に忘れ物をしたそうです」
「なに、本当か市隈？ここに来て、まだ不慣れなのはしょうがないか。ラウラ、何を忘れた？」

いきなりのことに、ボーデヴィツヒが戸惑い俺の方を睨みつける。
その後、立ち上がって姿勢を正すと、織斑姉に答えた。

「いえ、何も忘れていません。ん？な、そんなはずは！！」

「なんだ、何か忘れたのか？ならば今すぐとりにいつて来い。時間は厳守だからな、この後の授業には遅れるな。各自、着替えて第2グラウンドに集合だ。今日は2組とISの模擬戦闘を行うので、迷惑をかけないようにな。解散！！」

織斑姉はパンパンと手を叩いて、先を促す。まあ、恥をかかすならこんなもんだろ。俺は手に隠し持っていたボーデヴィツヒの部屋の鍵を奴に向かって軽く放った。

他の方を向いていたボーデヴィツヒは、即座に反応してそれをキャッチする。なんてことはない、さっき俺の横を通るさいにボーデヴィツヒから掏っただけだ。

「手癖が悪いのが特技なんだ。俺は急ぐんで、用があるならまた今度な」

「貴様！！」

一拍の間を置いてから激昂するボーデヴィツヒを無視して俺は席を立つ。そのまま、逃げるように教室の出口へ向かうと、いきなり後ろから襟首を引っ張られた。

「うぐお、誰だよ！！」

「私だが？」

見ると、織斑姉が後ろに一夏とデュノアを従えていた。

2 - 2 | 3人目ノ男

| 2 / |

織斑姉が後ろに一夏とデュノアを従えている。そのまま、廊下に引き釣り出されると、やっと襟首を離された。俺は、喉の調子確かめながら半眼で織斑姉を見る。ちなみに、俺を追いかけてきたボーデヴィツヒは、織斑姉を見て悔しそうに引き下がっていった。

「時間厳守じゃ？」

「織斑とお前で、デュノアの面倒を見る」

二人で見る必要なんてないだろ。俺は嫌々な顔をしながら答える。

「一人で十分なんじゃないすか？」

「デュノアはお前のルームメイトだ。しっかりみてやれ」

デュノアの部屋の割り当てが、なんで一夏でなく俺なんだよー！！くそ、強制的に決めやがって。これが教員特権てやつなのか。次から次へといらぬものを俺の頭に落としてきやがって。

「喜久、数少ない男子じゃないか。お互い助け合おうぜ」

「あんなあ」

俺は溜息をついてデュノアのほうを向く。

「ごめん、迷惑だったかな？」

「はあ。…着替えに行こうぜ、デュノア。それじゃ、急ぐんで」

俺は織斑姉に礼を取ってから、三人で歩き出す。そして、廊下の角を曲がったところで今度は女子の一群がやって来た。多分、デュノアを見に来たのだらう。俺はしようがなく、デュノアの手を掴んで早歩きをする。

「え、ちょっと」

「なんだよ、おい」

デュノアと一夏が、戸惑ったように声を出した。面倒を見ると言われたのはデュノアだけだ。後は知らん。俺は早歩きから、ダッシュに変更して走り出す。

「遅刻したくなけりゃ、一気に突っ切るぞ」

「うわぁー!!」

俺は悪評のせいで、周りの人ばかりが十戒のようにして廊下の真ん中を開いていく。しかし、一夏のほうで、潮が引き返すように人間の壁が出来上がって行った。デュノアを捕まえられない分だけ、全て一夏へ集中されていく。

「待ってくれ市隈、デュノア!!」

「あ、え、あれ、大丈夫なの!？」

「先に行ってるぞ、一夏」

後ろで薄情者とか叫ばれたが、気にしないことにした。更衣室に到着すると、後ろから一夏が息切れしながらやってくる。

「たす、けて、くれたって、良いじゃんかよ……」

俺は、水の入ったペットボトルを投げて渡す。一夏は蓋を回して開けると、それを一気飲みした。デュノアが思わず一夏に声をかける。

「大丈夫？」

「女子に群がられるのは、俺のせいじゃないし。時間ないから、早く着替えて集合場所行こうぜ」

扉を開けてロッカールームに入る。俺は適当なロッカーを開きながら、デュノアのほうを向いた。

「俺の呼び方は適当でいいから。なあ、呼び方はデュノアで良いのか？あとさ、デュノアってフランスの会社に同じような名前があるけど？」

「そうだね、僕の父はその社長だよ。呼び方は喜久でいいかな？僕のことはシャルルで良いし、織斑君もそう呼んでくれると嬉しいな」

「ああ、わかった。しかし、社長の息子かー。道理でさ、気品みたいなもんがあると思った。シャルル、俺も一夏で良いからな」

「よろしくね一夏」

シャルルのしぐさを観察していくと、俺の中で核心だけが深まっていく。それにしても、戦争屋の子供がご入学か。良い宣伝にはなるだろうな。そう思いながら上を脱いで、着替えを取り出す。

「うわ！？」

「どうした！？」

デュノアが叫び声をあげて一夏が反応する。なんか阿吽の呼吸みたいだな。くだらないことを考えながらシャルルのほうを向くと、シャルルは両手で顔を覆って下を向いていた。

「ごめん、なんでもないよ…」
「?」

一夏は原因がわからず俺は判ったために、やっぱりなと内心で溜息をついた。気づかない一夏もだが。シャルルもなんで、男装なんぞ馴れないことしてんだ。

「一夏に喜久さ。ちょっと向こう向いて着替えてくれない？」
「??? いやまあ、人の着替えジロジロ見る気はないが……」
「て、シャルルはジロジロ見てるな」
「見てない！別に見てないよ!？」

一夏に指摘されたシャルルが慌てて否定する。しょうがない、少しいじってゲロらせるか。そう思いながら、俺はシャルの近くに歩み寄った。

「なあに、女子みたいなことしてんだよ」

俺はシャルルの尻をスパンと叩く。

「ぎゃああ!! な、何するんだよ!!」

すると、シャルルが泣きそうな顔をした。俺は気にせず言葉を続ける。

「何言つてんだよ。野郎同士じゃ、こんぐらい普通だろ?なあ、一夏?」

「うゝん、そうだな。まあ、体育会系の部活じゃ当たり前だな」
「えええ、そうなのお?」

シャルルは情けない声を上げてその場に崩れ落ちそうになる。

「喜久、シャルルは慣れてないみたいだし。今後はそういうの、やめてやれよ」

「一夏ああ」

そして、一夏の言葉に復活して心の底から喜んでいる。まるで飴と鞭みたいだな。俺はわかったよといいながら着替えを続ける。すると、シャルルは慌てて1人だけ、ロッカールームの反対へ移動した。俺はそれにかまわず、反対側に聞こえる声の大きさを話で話を続ける。

「それより、一夏や俺の着替えだけで反応するなんてさ。シャルルって、同姓に欲情するタイプか？」

「…え？」

俺の言葉に一夏がびっくりした顔をしてこちらを向く。すると、既に着替え終わったらしいシャルルが、真っ赤な顔して飛び出してくる。

「ゲイなら先に言っといってくれよ。国や文化が違っても俺は受け入れるからさ」

「ない！！それだけは絶対にない！！」

かなり必死の形相に一夏が引いてしまう。そんなシャルルの猛烈な抗議に、俺は笑いながら対処する。結局、見かねた一夏が止めに入った。

「おい、落ち着けシャルル。喜久、お前も煽るようなことすんな」
「つい、からかいやすそうなんで」

「つい！？ついつて、どういうこと！！」

本当は早くぼろを出すか、正体を明かして欲しいんだけどな。シャルルを見ると、今のところはまだ耐えているように見えた。俺は着替えを終えると、ロッカーを閉めて扉の方へ歩き始める。

「悪気はないんだ、それじゃ遅れないように行きますかね」

「おい、ちよつと待ってくれよ。てか、シャルル着替えるのはや！
！なんかコツでもあるのか？」

「い、いや別に……って、一夏まだ着替えてないの？」

一夏は、まだ半分くらいしか着替えていない。俺は時計を見て、これは遅刻確定だなと内心で覚悟を決めた。それにしても、こういう仕組みのスーツなのか年頃のシャルルの胸が殆ど平らだ。制服はわかりにくいけど、どうやって胸を抑えているのか。着ている本人が苦しくなさそうなので、体系を隠せる機能に感心する。

「これ、着るときに裸だろ？履こうとすると、引つかかるんだよ」
「ひ、引つかかって！？」

俺がシャルルにしたセクハラより強烈だな。気づいてない一夏のほうがわかっていない分だけ、発言がストレートだ。なので、シャルルは顔を真っ赤にしてしてもじもじしている。

「…なあ、シャルル。その行動じゃ勘違いされてもしょうがないぞ」

俺が言うと、はっとなったシャルルがこちらを向く。男連中の中に1人だけ女子が放り込まれると、こんな感じだろうか。

「だから、違うつて!!」

「じゃあ、お前の好みのつてどんなの？」

「え!？」

俺がシャルルに質問すると、戸惑った表情になる。

「え、えつと。優しい人かな」

「そう言うお前はどうかんだ？」

すると、着替えが終わった一夏が俺に話を振った。

「そうだな。乳と尻がでかいだけのお頭の弱い女かな」

「…喜久、さいてーだね」

シャルルが死んだ魚のような目で、こっちを見た。一夏も「なんだよそれ」とシャルルに追従していく。

「まあ、本当は違うけどな。そういえば、シャルルは向こうのエロいのとか持ってきてるか？」

「そんなもの、ここには必要ないでしょ。持ってきてないよ」

「持ってきてないってことは、持ってはいるんだよね？」

俺の回答に、もはや投げやりだったんだろう。適当に答えたのが失敗して罰の悪そうな顔をしている。俺が何もしていないのに、勝手にドツボにはまったよ。

「向こうつてモザイクもないんだろ。過激なもの多いのか？」

「知らないよ!!僕は先に行くから!!」

ついに、シャルルは限界を超えたらしく、キレて先に行くために走

り出した。

「どうせ遅刻だしな。俺はゆっくり行くけど、一夏はどうする？」
「おまえ、シャルルをいじめすぎだ。あれじゃ嫌われるぞ」

そう言っで、一夏はシャルルの後を追いかける。俺は、欠伸をしながらグラウンドを歩いていった。

2 - 3 | 模擬戦ト訓練

| 3 / |

俺が歩いて集合場所にたどり着くと、既に授業が開始されていた。一夏とシャルルは既に混じって話を聞いている。一番後ろに混ざろうとすると、織斑姉が授業を中断して俺を呼び止めた。

「市隈、お前が一番最後だ。何をしていた？」

「遅刻が決まっていたので、諦めてゆっくり歩いて来ただけですけど」

はぁ、と織斑姉が両手を腰に当てて溜息を吐く。織斑姉の中で俺の評価が駄々下がりだろうが、もう既に底に着地しているので落下しようもないだろうな。

「市隈、これはお前のだろう？」

そんなことを考えていると、織斑姉は手に収まるサイズくらいのものを俺に向かって軽く投げた。すかさずキャッチすると、手に重み加わる。それは、ラファールの待機状態になっているアクセサリだった。

「ラファールの修理が終わったのでな。次は壊してくれるなよ。それと、お前には遅れてきた罰として、模擬戦闘をもらう。良いな？」

全然良くない。反抗したくてしょうがない。だいたい、ISなんて

もう持たなくて済むと思ったのに。俺が嫌そうな顔を見ると、織斑姉はそれ見て軽く笑った。

「はあ。イエス。で、相手は誰ですか？」

「お前が遅れている間に、説明は既に終わっている。相手は凰とオルコットだ。お前の方には山田先生がつく」

「よ、よろしく願います」

織斑姉に言われ、ISを装備したままの山田先生は律儀に頭を下げてきた。セシリアと凰は準備万端と言った感じで、こっちを見ている。なんか、妙にやる気があるように感じる。織斑姉に何か吹き込まれてもしたのか？

「鈴さん、喜久さんは気を抜ける相手ではありません。最初から全力で行きます」

「なによ、そんなに警戒しちゃって。喜久って、そんなに強いわけ？」

「やればわかります。向こうは、山田先生と私が5人はいると仮定してください」

「へえ、それは意外と齒ごたえがありそうね」

前回、戦闘をしたことがあるセシリアは明らかに俺を警戒していた。おいおい、5人分は過剰評価しすぎだろ。対照的に俺と対戦経験がない凰は、余裕の笑みを浮かべている。そして山田先生の扱いが軽く、蚊帳の外に置かれていた。

ひどいな。仮にも先生なんだから、生徒より弱いわけないだろうに。俺はISを展開すると、山田先生に話し掛けた。

「山田先生、俺が場をかき混ぜるんで。適当に後ろから、あいつ等を誘導して詰めてください」

「はい、わかりました」

俺は山田先生にお願いして、ISの状態をチェックする。別段変わったところなく、特に問題なく動くみたいだな。一通りチェックを済ませていると、音声センサーがシャルルと一夏の会話を拾った。

『ねえ、一夏。喜久が乗ってるのってラファールみたいだけど。彼って強いのか?』

『それがさ、セシリアとやった時は、あいつ最初はわざと手を抜いててさ。真面目にやれば一方的過ぎて、千冬姉が止めてたけどな。初回からちゃんとやるのは、今回が初めてじゃないか?』

悪いな一夏、正直いつて真面目にやるかどうかは悩んでる。

『あんなに変態なのにISを操るのが上手なのなら、なんかずるいね』

『うーん。あいつ普段は下ネタなんて、あんまり言わないんだけどな。あそこまでしつこいのって、正直いつて珍しいぞ。実はあいつも新しい男子が増えて浮かれてるのかも』

浮かれてもいないし、シャルルの中じゃ俺は変態が確定か。意識を切り替えて織斑姉の方を向くと、模擬戦開始の合図が出ようとしていた。

「始め!」

4人で一斉に上空へ上がっていく。俺は誰よりも早く動き出し、瞬間^{イクニ}時加速で鳳の後ろを取ろうとした。

「甘いのよ!」

すると、両手にある斬撃武器見たいな二刀を連結して、一刀の得物を勢いよく振りぬいてくる。画面には双天牙月なんて名前が表示されていた。

「1つとつたぞ。俺は、一夏みたいに直線的な動きはしないよ」

イグニッション・ブースト
瞬時加速からの二回目の瞬時加速で変則的な動きを加えて、双天牙月を避けきり鳳の後ろを取る。

「それじゃな」

「ぐう!!」

そのまま鳳の背中に蹴りをお見舞いして、反動を利用し加速する。続いてやって来たブルーティアーズの4つ分のビットとライフル攻撃をそのまま紙一重で避けた。

今度は垂直に上がって、セシリアと鳳から距離をとりつつスナイパーライフルを取り出す。下を見れば、山田先生がスナイパーライフルの射撃で見事に2人の行動パターンを削っていく。

面白いように、みるみる2人の逃げ道が消されていつている。そんな中を、鳳が強引に突破して俺の方へ向かってきた。

『喜久!!よくも、踏んずけてくれたわね!!』

「あー、女子の怒った顔は怖いね」

俺は急降下して、タイミングを計りながら一気に鳳へと接近を開始する。さっき見ていたが、鳳の奴は突破してくる際に山田先生に向かって、肩から見えない砲弾を打ち出していた。

しかし、ラグがあるらしく撃ち出すまでにほんの少し時間を食う。なら、撃ち出される前に近づいた方がいい。咄嗟に俺の読みに気づ

いたらしい凰が、再び双天牙月を構える。俺はそれにかまわずスナイパーライフルを逆さに持って、フルスイングしながら突撃を敢行した。

スナイパーライフルは射撃武器で、打撃武器じゃない。一発で凰の双天牙月に粉々に破壊され爆散する。

「くらええ!!」

凰が双天牙月を振りぬいた勢いで、一回転しながら切り込んでくる。しかし、その瞬間に凰の腹部で衝撃と爆発が起きた。

「が、ぐう!?!」

奴が驚いた顔をして見ると、俺の手には新しいスナイパーライフルが現れている。

「なんでそんな早い展開ができるなんてって顔してるな。手品みたいだろ?」

瞬時展開でもう1丁ほどスナイパーライフルを取り出して、面射撃を行う。

「きゃあ!!」

「ライフル一本壊したぐらいで、油断してんなよ」

殆ど間近にいた凰は、俺の攻撃を両手で庇いながら防御一辺倒になる。ハイパーセンサで位置を確認すると、山田先生がセシリアをこちに誘導してきている最中だった。

「こりゃ詰んだな」

俺は急いでその場から離脱する。すると凰から距離を取った瞬間に、セシリアのブルーティーズが凰機に激突した。

お互い一瞬のことで、何がなんだかわからないのだろう。案の定、凰は俺と勘違いしてセシリアを殴り飛ばしかける。そして、山田先生はタイミングを見計らうと、2人同時に当たるようにグレネードを投擲した。

ドンッという綺麗に命中する音と共に、2人仲良く地面へ落下していく。激突して煙が晴れると、セシリアと凰が地面にめり込んだのが確認できた。

俺と山田先生はお互いを確認して地上へ着地し、俺だけISの展開解除を行う。

「アンタねえ…。良いように誘導されてんじゃないわよ。しかも、ビットを早く出しすぎなのよ」

「そっちこそ、あれ程言っただのに。喜久さんに一撃も当てられていないではないですか！！完全に手のうちも読まれて衝撃砲も出せずじまいですし！」

セシリアと凰の間で、ギヤーギヤーと責任の擦り付け合いが始まった。今更だが、品格も何もあったもんじゃない。周りを見れば、これらの女子から笑い声が出ている。俺は一夏とシャルルの方へ近づく、シャルルが意外そうな顔で見ている。

「喜久って、本当に強かったんだね」

「その発言はどっから聞いて出た言葉だよ。俺は自分が強いなんて一言も言っていないぞ」

一夏を見ると、ごめんなと言った具合に苦笑していた。いや、お前らの会話は途中まで聞いてたけどな。俺はシャルルの背中に組み付

くと、軽くヘッドロックをかます。慌ててシャルがじたばたし始めた。

「わ、なにをするのさ！ギ、ギブ」

「シャルルから見ると、なんで俺は変態なんだ？」

そう言った瞬間に、シャルルの顔が青くなった。

「お前らの会話は、ISを展開してる間だけ筒抜けだったぞ。言いたい放題だからって、勝手に言ってくれやがって」

俺はシャルロットを開放して、一夏を軽く睨んでから織斑姉の方を向いた。織斑姉は全員を前にして喋りだす。

「さて、これでIS学園にいる教員の实力は解ってもらえただろう。以後は敬意を持って接するように。専用機持ちは全部で5人か。専用機として貸し出している市隈を含めると6人だな。これから専用機持ち一人につき、7人8人のグループを作るように。各リーダーは専用機持ちが勤める。では、行動を開始しろ！」

途端にものすごい勢いで迫る女子の群集によって、俺が跳ね除けられる。専用機を持っていない女子たちは、猛アピールをしながら一夏とシャルルに群がって行った。

2人はどうしていいかわからず、困惑して対応に追われている。

「この馬鹿ものどもが……。出席番号順に1名ずつ各グループに入れ！次にもたつくようなら、今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！！」

恐怖の怒声が響くと、女子たちが無言で迅速な動きを發揮する。2

分もせずに整列すると、俺の前にはとても嫌そうな顔をした女子の一団がいた。

「最初からそうしろ。馬鹿ものどもが」

織斑姉のはごもつともな意見だな。他の奴らを見渡せば、わりと和気あいあいに行っている。無言の空間が吹雪いているのは、俺とボーデヴィツヒのグループだけだ。まあ、お互い今更な光景だな。山田先生の指示で、俺と同じ型のラファールリヴァイブを女子達が運んでくる。待機姿勢を取らせると、一同が嫌そうな顔をしながら寄ってきた。

「ああ、織斑君の方が良かった。なんでこんな奴に習わなきゃいけないの」

「デユノア君のところも楽しそう。今日は最悪な一日ね」

「あなた、二人のことを知ってる限り私に提供しなさいよ」

残りのメンバーも大体同じ言葉を口走っている。俺は首を軽く鳴らしながら、適当にやろうと待機状態のラファールに近づいていく。そして、やっぱりやってられないとばかりにその場で胡坐をかいた。

「雑談するなら練習に付き合う必要はないよな。俺は適当に休むし困らないから良いけど、あんたらはどうするの？」

「なによー！男のくせに生意気ね」

「だったら、生意気な俺よりISの操縦が上手いよね？」

しかし、えらい嫌われようだな。正直ここまでだと、付き合い合ってもらえないよ。

「ちょっとぐらい動かせるからって、調子にのって!!」

「俺、本当にもう休んでいいか？」

俺は胡坐から雑魚寝へと姿勢を変更する。欠伸をしていると、後ろから肩を軽くタッチされた。見れば、貝田が俺を上から覗き込むような姿勢で立っている。

「あれ、貝田さんじゃん。グループ一緒だったっけ？」

「そうよ。良かったら教えてくれない？」

女子が全員同じように見えていたのか。俺はまったく貝田の存在に気づかなかった。1人だけでも受け入れてもらえると、ちよつとは気が楽になる。彼女には感謝しないとな。今度、なにか奢って借りを返そう。

「良いよ。ラファールに乗って、そのまま起動してくれる？」

「わかったわ」

「え、ちよつと貝田さん！？」

貝田の行動で女子一同が困惑し始める。まあ、当たり前か。貝田はラファールで立ち上がると、直立の姿勢を取った。

「試験の時もそうだったけど、視線の高さが違うだけで面白いね」
「上手いじゃん。じゃあ、歩かなくて良いから、俺の手に掴まってくれる？」

貝田がラファールの手を俺のほうに伸ばしてくる。

「これで良い？」

「じょうとつだよ」

俺は笑いながらその手を掴むと、ゆつくりと左右前後にラファールをスライドさせ始めた。移動する感覚に慣れさせると、今度は実際に歩いてもらう。一通りISに慣れさせてから、俺は他の組とは違う事を提案した。

「それじゃあ、最後に軽く飛翔でもするか」

「ええ、そんなの今日のカリキュラムにはないわよ!？」

「そっちは何もしなくて良いから」

俺はISを展開して、貝田の後ろに回り込む。そして、相手の腰回りに腕を軽く回して10メートルほど飛翔した。

「わあ、すごい」

「だろ？」

貝田が子供のようにはしゃぐ。そのまま少しだけ静止してから、俺はゆつくりと降下した。すると、タイミングよく織斑姉の怒声が聞こえた。

「市隈!今日のカリキュラムに含まれていないことをするな!」

「イエス」

適当に答えて織斑姉のほうを向いて会釈する。他の奴らはどうか。俺は一夏の方を見ると、奴は篠ノ乃をお姫様抱っこしていた。どうも、前の奴が待機姿勢を取らずに降りたらしい。おかげで篠ノ乃は嬉しそうにしている。そのまま視線を動かすと、凰が悔しそうに歯をギリギリと鳴らしていた。

あれは、一夏は後が怖いな。そしてもう一人。セシリアが俺の方を向いて、いつでも刺しそうな雰囲気だった。

俺は気にしないようにして、貝田に待機姿勢を取らせつつラファール

ルから下りるようにお願いする。空を飛んだことに感動したのだろう。貝田が嬉しそうに俺から離れていった。

「それじゃ、次に飛びたい人いる？」

「え、先生にさっき怒られたばっかじゃない。なに考えてんの？」

俺が適当に話すと、聞かれた女子達が怪訝な表情をする。まあ、当たり前だわな。

「俺はどっちでもいいよ。でも、ISに乗れる時間は限られてるしな。少しくらい他のやつより無理してやんなきゃ、どんぐりの背比べで終わっちゃう。上手くなるなら貪欲にならなきゃ。俺がサポートする限りは、怪我をさせるつもりはないし。制限時間はあの軍曹が俺の頭に拳固を落とすまで。誰からやる？」

みな一様に黙っていたが、一人が耐え切れずにその場で笑い出す。

「ぶ、軍曹って。貴方、先生に怒られるわよ」

「拳骨が落ちるのがあんただけなら、やってやっても良いわよ」

限られた時間だけ、貪欲に。エリート思考の女子達へと煽りを入れていく。それに反応した何人かは、俺のやり方に同意した。ISは嫌いだが、この学園に来てから少しだけ考えを改めることにしたことがある。

「そんじゃ、始めますかね。まずは、起動からやってみようか」

それは、ISを乗りたいと思う人間を否定してはいけなと感じたことだ。ここで出来た友人は、俺と違ってみんな素直で良い奴ばかりだった。それを否定すんのは、なんか小門が違う気がする。だっ

たら、協力してやるほうが筋だろうと考えた。
俺は名前も知らない女子に行動を促して、練習用のラファールを起動させた。

――

結局のところ、授業中に無理やり最後のメンバーまで俺は飛翔させた。しかし、その間に織斑姉からは頭に3発、減らず口を叩いて顔に1発の拳骨をもらう。なので、目下2箇所からの痛みに耐えている。俺が無理やりやったことにしたので、女子達の分もこっちに集中していた。

「一人の馬鹿が暴走したが、お前達は絶対に真似をするな。お前だぞ、市隈！今度こんな真似を試してみろ。お前にだけ、特別メニューを加算してやる」

「イエス」

面倒臭いので、適当に答える。こっちを見ていた織斑姉は、俺から生徒全体へと向き直った。

「では、午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人収納庫に班別で集合すること。専用気持ちは、訓練機と自機の両方を見るように。では、解散！」

そのあと、俺は織斑姉に指示された通りにIS用のカートで訓練機を運んでいく。しかし重いよこれ、人力っておかしいだろ。かといって周りを見れば、みんな同じように運んでいた。

同じ班の女子達に任されたとはいえ、くだらないくらいやってられ

ん。俺はISを展開してカートを押し始める。すると、一夏から非難の声が飛んで来た。

「おい喜久、普段のIS展開は禁止だろ」

「楽なほうが良い。ばれなきゃ良い。共犯者が多ければ怒られかたが分散するので、なお良い」

反省なんて、はの字もない。俺はカートをすぐさま運び終えてISを粒子化する。後はシャルルと一夏を待つだけだが、シャルルは他の力がありそうな女子数人に運んでもらっていた。一夏はうらやましそうにそれを見ている。そして、俺に「ズル野郎」と嘆きなら運んでいく。あいつは真面目だな。ISの状況を確認していると、一夏が訓練機を運び終えていた。

俺は作業を終えて一夏のほうへ歩いていく。

「そんじゃ、戻って飯にしますか」

「そうだな。もう、いい加減にくたくただ」

2人してシャルルの方へ歩いていくと、本人はまだISの確認作業中だった。シャルルは作業を中断して、こちらへ振り向く。

「一夏に喜久さ。僕はちよつと機体の調子を少し見たいから、先に行っててくれないかな」

「良いよ、終わるまで待つてるから。早く終わらして飯くいにいこうぜ」

「そうだな。少しくらい時間も余裕あるだろ。シャルル、後どのくらいかかる？」

俺の返答に、シャルルはどう答えたものか、少しの間が空く。一夏は何気なく、俺は理由を知りつつ聞いた。おおかた、着替えを見ら

れたくないんだろう。

「まだ少しかかりそうかな。本当に大丈夫だから、2人とも先に教室に行つてよ」

「ああ、まあそれなら。それじゃシャルル、できるだけ早く来いよ。行くか喜久」

「そうだな。シャルル、ほらよ」

おれは、持ってきていたドリンクとタオルをシャルルに放つて渡す。それを見た一夏が驚いた様子で見っていた。

「お前、それどこから出したんだよ？」

「授業に来るさいに持つてきといて、グラウンドの端に置いといた。まあ、飲み物の方は外気で温くなつてるけど。陽射しは直で暑いし、これくらいないとやつてらんないよ。シャルル、ボトルは適当に捨てていてくれればいいし、タオルは適当にそこらへ放つといてくれ。あとで回収しとくから」

シャルルの奴は、信じられないといった目で俺の方を見る。しばらく鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしていたが、やがて笑顔に変わった。まあ、もともとは俺が飲みたいから用意してたんだけどな。それは、言わぬが華だろう。

「ありがと、喜久」

「またあとでな。行くか一夏」

「そうだな」

俺と一夏はシャルルから離れて教室へと歩き出した。

2 - 4 | 昼食ノ1コマ

| 4 / |

昼休み、俺は屋上で昼食をとっている一団に混ざっている。今日は天気も良いので、食後はそのまま授業をすっ飛ばして昼寝でもしたいような穏やかな気候だった。

それにしても、この学園は寮もすぐければ、屋上も綺麗に完備されすぎている。俺は思わず首を捻り、金の使いどころがおかしい気がした。

「……どういうことだ？」

「ん？」

座っている篠ノ之は明らかに不機嫌で、一夏はそれに疑問を感じている。大方、篠ノ之は一夏と2人で食べたかったんだろうな。結局、言いあつた末にシャルルの世話のことを一夏から切り出されて、篠ノ之は押し黙ってしまった。

納得できるが納得できないといった表情が、ありありと浮かんでいる。今は凰とセシリア、篠ノ之、一夏、シャルルのメンバーで場を囲っている。そして、女子側はみんな揃って弁当を用意していた。ちなみに俺は来る途中のコンビニサイズみたいな、ばかでかい購買のところで菓子パンを買ってきている。

「一夏、アンタの分よ」

「お、酢豚だ」

一夏が美味しそうに食いつき、喜んで食べている。隣を見れば、篠

ノ之の雰囲気が悪化していた。

「今日はお弁当を用意してみましたの。みなさん、どうぞ召し上がってくださいな」

セシリアがバスケットみたいなものを取り出して、サンドイッチが入っているのが見える。一夏は、それにも嬉しそうに手を出していく。しかし、一口つまんで停止した。

「…お、おいしいよ。ありがとな、セシリア」

美味しいのなら、何でそんなに言葉がたどたどしいんだよ。

「まあ！ありがとうございます。是非、喜久さんも食べてください！！」

確かに見た目は大丈夫そうだな。セシリアは貴族だつて聞いてたから、料理なんてしたことあるんだろうかと思つてたけど。まあ良いか、好意に甘えさせてもらおう。

「ああ、ありがとさん」

何気なく掴んで、一口かじる。途端、劇薬のような刺激が口の中を占拠した。

「がぁ、ぐおおー！！」

俺は、急いでさっき買っていたペットボトルの中身を一気に口の中へ流し込む。流し込んだ後も、変な味がまだ舌に残っていた。

「セシリア！お前は俺を殺すきか！！一夏！！お前、騙しやがったな！！」

「え！？どうしたんですの？」

まるでわかっていないセシリアが、きょとした表情でこっちを見ている。

「おい、喜久！！」

一夏は俺の口を塞ごうとするが、俺はそれを強引に払いのけた。

「セシリア、自分の作ったサンドイッチは味見したのか？」

「い、いいえ、していませんが」

「してみる。一夏、お前は良い格好しすぎると、後で絶対におかしなことになるぞ。この場合に指摘しないのは優しさじゃなくて、甘やかしてるだけだ。本人も後で苦労するしな」

俺が興奮しているのに対して、皆がついていけないような表情をする。一夏は疲れた表情をしていた。

「全員、セシリアのを食べてみる。舌が破壊されるから」

一夏と俺を除いたメンバーが口にして、その場が全体的に固まった。まるで時間が止まったかのようなようだ。再び動き始めた時は、食べた全員が飲み物を口に流し込んでいた。例えるなら地獄絵図だな。正直に言わなかった一夏は、少しばつの悪そうな顔をしている。

「…確かに、一夏は女子に対して甘すぎるわね」

「どうやったら、こんな味になるのだ？」

「これは、誰かにきちんと習ったほうが良いかもね」

凰、篠ノ之、シャルルは俺と同じような感想を漏らす。

「そんな。こんなはずでは…」

そして、落胆と共に肩をがつくりと落とすセシリアがいた。

男はいいが、女子が料理できないのは後々で響きそうだな。しょうがないな、駄目元で提案するか。

「なあ、わかったところでさ。俺は菓子パン持ってるの見ればわかると思うけど、料理はからっきしだしな。それでさ、誰かセシリアに料理を教えられない？」

その場にいる全員が、顔を見合わせる。そして、思わぬところから手が上がった。

「それなら、僕がお教えしましょうか？料理は趣味でよく作るんです」

シャルルが手を上げたことによつて、一夏と女子たちが驚いている。まあ、本人は女だろうし、料理が上手い場合があってもおかしくないよな。

「じゃあ、シャルル。セシリアのこと頼むな」

「ちよつと、待って下さいまし。さすがにいきなり頼むというのは」

セシリアが慌てて話を中断しようとしたが、俺はそれを更に進めていく。

「俺や一夏よりは作れた方が良好だろ。俺は最低限はできるけど、

「一夏なんかそこの女子よりできるんじゃないか？」

俺以外が驚いて一夏のほうを見た。少し前に、夜中で腹が減ってたが食堂が開いてなかったことがある。なので、それを見かねた一夏が夜食を作ってくれた。

意外のほか上手なので、将来は主夫でやってけばと背中を叩いた記憶もある。注目された一夏は、いきなり振られてあたふたしていた。

「俺だつてそんなできるわけじゃない。家じゃ作る人間はいないから、しょうがなくやってただけだよ。千冬姉は、家事全般は苦手だしな。しかし、シャルルって意外と女趣味だな」

「そ、そうかな！？たまたまだよ、作つてたまたま面白く感じただけ」

シャルルもあたふたしている。俺はセシリアの肩を叩くと、にこやかに告げた。

「決まりだな。頑張れよセシリア」

「はぁ。でしたら、喜久さんも付き合つて下さいな。発起人なのですから、一緒に練習致しましょう」

セシリアがにこやかに答えて、俺が道連れされかける。え、何で俺までやらなきゃいけないの？俺はすぐさま助け舟を求めて周りを見渡した。すると、一夏が俺の肩にわざとらしく手を置く。

「お前は部活とか入ってないし、部屋もシャルルと一緒になんだから大丈夫だろ？」

女子が喜びそうな極上のスマイルを浮かべてサムズアップする。一夏、いつもの仕返しをここですんじゃねえ。

「そうだね。どうせなら喜久も本格的にやってみたら？僕が喜んで
びしばし鍛えてあげるよ」

シャルルがとても嬉しそうに告げる。お前も溜まった鬱憤をここで
発散すんな。

「そうね。アンタは料理でもやって、少しは他の女子に嫌われる要
素を改善したら？」

「今時の男は料理も出来た方がいいだろう」

凰と篠ノ之が同意して、最後の砦もなくなった。

「くそ、何でこうなったんだ。しょうがなく、俺は両手を上げて降
参のポーズをとる。」

「わかったよ。付き合いますよ。これで良い」

かと言う前に、セシリアに胸倉を掴まれ引つ張られた。ドンと、セ
シリアの顔が目の前に来ると、にこにこして笑っている。これは、
間違いなく怖い方の笑顔だ。

「空返事で逃げないで下さいね」

「……はい」

俺は本当に観念すると、がっくり肩を落とした。この後、一夏と篠
ノ之の夫婦のようなヒトコマがあり、荒れた凰が一夏に自前の酢豚
を食わせていた。

2 - 5 | 2人ノ秘密

| 5 / |

今日も一日が終了し、俺とシャルルが部屋に入る。シャルルの荷物は既に届いていたらしく、俺が使っていないベッドとその脇に置かれていた。何でシャルルは一夏の部屋じゃねーんだ、隠れて煙草が吸えないじゃん。

「おじゃまします」

勝手知ったるなんとやらだが、シャルルは初めてなのでそんなセリフをいって入室する。俺はベッドに寝転ぶと、大の字になって盛大に背伸びをした。それを見て子供っぽく思えたのか、シャルルは笑いながらも一つのベッドに腰掛ける。

「喜久、今日はありがとう。一夏にもすごく良くしてもらってるし、何かの形で二人に返せればいいんだけど」

「俺も一夏もそんなの気にしないよ。そうさな、だったら一夏のIS訓練を見てやってくれない？あいつまだまだ慣れるのに大変みたいだからさ。俺は教えんのか苦手だし」

「わかったよ。是非そうさせてもらうね」

にこにこしながら、シャルルは身の回りの整頓を始める。荷物はさほど多くない。セシリアの荷物量はおかしいが、それでも同年代ならもう少し荷物は多くても良いと思う。

「あのさ、シャルル。荷物少くない？」

「え、ああ。いつもこんなもんだよ」

いつまでごまかすんだ？異性の真似事なんて苦しいことして。俺は呆れ気味にシャルルのほうを見るが、本人は気づく様子もない。しようがない、止めの一言でもいつてやるか。後の対応はおいおい考えればいいよな。

「なあ。同室だから先に言っとくんだけど、お前がシャワー先に使ってくれよ」

「いいよ、喜久が使つて。僕は後で大丈夫だから」

「いや、いいつて。湯上りのシャルルを見てみたいし。年の割に出るところでてそうだから、目の保養になるしな」
「…え」

シャルルは勘違いして、思わず俺から距離を取る。顔は少し青い気がする。わるいけど、俺は断じてゲイじゃない。

「えつと。喜久つて、そっちの気が…」

「あるわけないだろ。たんにレディファーストしてるだけだ」

シャルルの顔が今度は違う意味で顔面蒼白になる。

「えつと……喜久つたら、なに言ってるの？」

「ばれないとも思ったのか？」

こころなしか震えているように見えた。

「外見でごまかそうとしたって、そんな線の細い骨格の男がいるかよ。流線型の体格じゃ限度があんだよ、お嬢さん」

シャルルがいきなりがつくりと、肩を落とした。そして、しばらくしてから緩んだネジみたいな双眸を俺に向ける。

「…僕のことを学園に言うの？」

「そこは俺の領分じゃないよ。何が嬉しくて、鬼の首を取ったようにチクリに行かなきゃ行けないんだ。俺も煙草吸ってたけど、それを内緒にしてくれるなら誰にも言わないよ。どうだ、交換条件としては良心的だろ？」

俺は笑いながら、備え付けの冷蔵庫から水のペットボトルを取り出す。2人分のボトルのうち、俺は片方をシャルルに渡した。ぎこちない動きで受け取ったが、怯えて俺の様子を窺っている。

……しろうがなく、俺は真剣な顔に戻して対応することにした。

「正直言つてな、俺はボーデヴィツヒって奴より素性を隠してるお前のほうを警戒してる。デュノア社がバツクにあるせいなのが、一番大きい理由だけれどな。わざわざ大切な一人娘のご令嬢様を男にして入学させるのはなんでだ？」

俺が言うと、やがてシャルルはボトルの水を一口飲んでからベッドの脇に立てかける。俺は彼女がゆっくり喋りだすまで黙ることにした。

これじゃ、シャワーを浴びる余裕もないな。

それから何分が経った頃ぐらいだろうか。ぼそりとシャルルが喋りだした。

「…僕はね、社長である父の命令に従ってここに来たんだ」

「それで？」

「父の会社はね、今傾いてるんだ。第3世代の開発が遅れているん

だよ。男子として来たのは広告塔と、同じ境遇の人間に近づきやすくするため。一夏だけだと思ってたから、喜久がいてびっくりしたけどね。僕が受けた命令はね、一夏や喜久のデータを取ってフランスに持ち帰ることなんだよ」

「データ採取なんて、他に幾らでもやりようがあるだろうに。それよりもさ、俺が聞きたいのは違う部分だ。何でそんな危険な行為を身内であるシャルルにやらせたんだ？」

俺が引つかかっているのはそこだ。メリットよりデメリットの方しか見えないし、非効率すぎる。

「それは、僕が愛人の子だからだよ」

頭の中でパズルのピースが揃って少しすっきりした。それなら、シャルルを人身御供みたいに出来るわな。

「大体わかったから、これ以上は無理して喋らなくて良いよ」

俺は、今どんな顔をしているだろうか？ちょっと眉間にしわが寄ってるかもしれない。

「しかしさ、ISが絡んだ奴って、中には本当に境遇が恵まれない奴がいるよな。……で？」

「でって？」

シャルルが聞き返し、俺は軽く手をぶらぶらとさせる。

「これからどうする？わざわざ、フランスくんだりからこんなところまで来たんだ。ここにいりゃ、3年間は身の振り方を考える時間が設けられるけど？」

「僕に選ぶ権利なんてないよ。それにね、僕の存在が知れたところで、自身としては父の会社なんてどうでもいいんだよ。もともと愛着もなにも、そんなのないんだから」

部屋の空気が重く感じられる。俺はシャルルに近づくと、頭にデコピンをかましてやった。

「痛ったあ！！何するんだよ！！」

「暗いんだよ、お前さ。投げやりになって考えないで、これからをもう少し考えて生きろよ」

シャルルは両手で頭を抑えながら、諦めの顔をしている。

「そんなの無理だよ」

「無理なのか？俺なんて30まで生きれる保証もないのに」

本人にとつてわりとショックの強い言葉だったらしい。シャルルは「えっ」と言った後、そのまま固まってしまった。

「シャルルはもっと生きれるだろ？だったら、建設的に考えないと勿体無いだろ」

フェアじゃないのはしつくりとこない。俺は、自分のことをどこまで話せばいいのだろうか。少しの間だけ、頭の中で逡巡する。

「俺の秘密を教えてやる。煙草の校則違反なんてめじゃないくらい、生易しくない内容だ。これを話して、俺らは秘密の共有者になる。逃げないで聞けよ？」

俺はシャルルの両肩をがっしり固めて、立つ姿勢が取れないように

する。シャルルはロボットのようになり、とりあえず頷いた。

「俺はアメリカ軍の軍事ラボで生まれた。試作型試験管ベイビーで、ようは使い捨てのモルモットだ。卵子の時点で、ISへ適応出来るように試薬品を投与されてる。だから、その反動で30までしか生きられない。一夏みたいな純粹にISへ適応した人間じゃないし、このことは公に出来る内容じゃないんだ。俺はなシャルル、あることをしてかして軍から逃げた。俺がIS学園に入った理由はな、身の安全の為だよ。最近になってCIAに見つかっただ」

CIAはシャルルの知っている単語だろう。黙っていたが、口を開いて俺に質問した。

「喜久は何をしたの？」

この先を言うには勇気がいる。手に嫌な汗が出ている気がした。ここでなら、まだ話を止めてうやむやに出来る。

俺はどうしたいのか？

話すことで何を得られる？

一拍間を置いてから、俺は口を開いた。

「12歳の時にな、軍の任務で中東に駐留したときだ。作戦中にISに乗ったままで暴走して、自軍と敵が滞在してる町一つを壊滅させた。一人残らず、その場に居た人間を殺したんだ。軍は隠蔽したが、一部の連中にはばれてる有名な話だ」

シャルルが両手を口に当てて、絶句する。それは、まるで考えられ

ないといった表情をしていた。

「…それは、ISのシステムが暴走したの？」

「いや、俺の意思でそうしたんだ。女も子供も何もかも区別なく撃ち殺した。一緒にいた、仲間も含めてな。当時の俺にはな、それがTVゲームと一緒に感覚だったんだよ」

話していて、気持ち良い話じゃない。言っているだけで、吐き気がこみ上げてくる。俺は言い終えると、ゆっくりとシャルルから離れてボトルに残っていた水を無理して一気飲みした。

「さて、シャルルの自由だ。これを教師に告げ口でもするか？シャルルの場合はまあ、本国で豚箱が良いところだろうな。俺の場合は、アメリカで死刑扱いだろうがな」

吐き気は治まったが、喉にミミズが這うような感覚が残っている。

「喜久。なんで、そんな釣り合わない秘密を僕に話したの？」

「そんなん、決まってるだろう。信用を買うには相手より大きいものを差し出すのが大事だからだ。ちなみに、今の話を知っているのは学園には一人もいない。そして、俺のまわりで知っているのはシャルルを含めて6人だけだ」

シャルルは、しばらく俯いてから顔を上げた。

「僕には差し出されたものが大きすぎて、とても判断できないよ。

…でも」

「でも、なに？」

「ありがとう。喜久が言ったように、少し考えてみる。それと、喜久」

「ん？」

「喜久の顔も暗いよ」

そりやないだろよ。頑張つてこつちも話したんだから、むしろ抱擁して欲しいくらいだ。

「いや、これは普通の顔だろ。あとさ、どのみちどつかで一夏にもばれるだろうから。シャルルが抱えてる問題は早いうちに自分で言っとけよ？」

「わかったよ」

「それじゃあ、レディファーストだ。先にシャワー浴びて来いよ。俺は30分ほど、外で一服してくるから、その間に済ませておいてくれな」

俺はシャルルをうながして、先にシャワーを浴びせることにした。

「そうだね、そうさせてもらうよ。喜久、ありが…とう？」

最後が、なぜに疑問形？シャルルの顔がすごくいい笑顔になる。しかし、全然笑っているように見えない。俺はゆっくりと距離をとって、ドアノブに手をかける。

「…今日一日さ、僕のお尻叩いたり抱きついたりしたね。午前中に一夏が言ってたけど、わざと下品なことばかり会話に混ぜてたのは何で？僕が女だって知っててやってたの？」

「そらそうだろ。いつになったら根をあげるか、試したに決まってるじゃん。シャルルが最後まで根を上げない分だけ、俺はやりたい放題だしな。いい思いさせてもらいましたよ、ごちそうさん」

俺は即座にドアを開けて、廊下に飛び出してから勢い良く閉める。

同時にドアへ衝撃が走った。きっと何か手近なものを投げたのだろう。ドア越しにシャルルの大声が木霊する。

『喜久の変態！！馬鹿！！女の敵！！…もう、お嫁に行けない』

最後のセリフで、シャルルがうちひしがれたような声が聞こえた。しばらくは、部屋に帰らないほうがよさそうだ。余計な世話だけど今のシャルルの状態なら、少しは家庭のこと以外を考えるだろうか。俺は、部屋を離れると屋上を目指すためにゆっくりと歩き出した。

2 - 6 | 応接間ノ攻防

| 6 / |

IS学園は土曜の午後をフリーな時間として用意されている。いつものメンバーは、新たに加わったシャルルを追加してアリーナに向かう予定になっていた。もちろん、俺は行かないが。

授業が終わって寮に戻ると、シャルルは午後練習のためにISのデータをチェックしながら話し掛けてくる。

「ねえ。喜久ってISが嫌いなのはわかるけど、練習しなくて大丈夫なの？」

「俺は別にISで強くなりたいたいわけじゃないし。それじゃなくても今日は軍曹に呼び出しをくらっているんだよ。あー、めんどくさ」

軍曹とは、もちろん織斑姉を指している。あれは教師ではなく、間違いない軍人教官だ。

「また何か、良くないことをしでかしたんですの？」

「…なんでセシリアがここにいる」

今、この部屋には俺とシャルル、そして当たり前のようにセシリアがいた。俺はベッドにうつ伏せになりながら、顔だけをセシリアのほうに向ける。

「別に良いじゃない。喜久は、女の子の気持ちをもっと考えるべきだと思うよ」

「まあ！シャルルさんは、とても良いことを言ってますわね」

シャルルの援護にセシリアが喜びの声をあげている。どうせなら、セシリアはシャルルとくっ付きや良いのに。もちろん性別的に無理だろうけどさ。俺はくだらないことを考えながら話を進める。

「話、戻して良い？セシリアが言ってるようなことなら、まだましなんだよ」

「怒られたほうが良いなんて、喜久って本当に変わってるね。まあ、でも嗜好は人それぞれだもの。僕は気にしないよ」

「シャルル。毒舌が冴えてるんだけど、ひどくない？」

「喜久が疲れてるだけじゃない？僕はいたって普通だよ」

シャルルと知り合って5日になる。あの秘密を打ち明けあった次の日から、いきなりシャルルの毒舌が際立つようになった。主に俺にだけ。1日目にやりすぎたのはわかってるが、まさか次の日からこんな状態になるとは思わなかった。そんなせいでクラスの女子からは、俺に毒舌を吐くシャルルは違う意味でもとても喜ばれている。

俺の扱いって一体なんなんだ。

「それで。そんなにやる気が無いのはいつものことですけど、何があつたんですの？」

セシリアの言っていることも地味に酷いが、まったくそうなので言い返せない。

「机の上に答えがあるよ。見たければ、勝手に見てくれ」

「お言葉に甘えさせて頂きますわ」

セシリアが俺の机に向かい、薄いパンフレットが置いてあるのを確

認する。そして俺の方に振り返ると、突然はしやぎだした。

「すごいじゃないですか！喜久さん、IS系企業からオファーがあったのですか！？」

「喜久の性格は別として、ISの操縦技術は買ってくれてるみたいだね」

シャルルめ、なんとも言うてる。後で、きっちり仕返しをしてやるからな。

「受ける気は無いよ。そのパンフだって無理やり渡されたんだから」
宇宙開発事業の手伝いと、武器開発の手伝いではまったく趣旨が違う。たとえ良いことをしていても、根本のところは武器商人だ。シャルルの前で言うわけにはいかないけどな。

俺を指名したIS系企業は半縄技術研究所。一般の第3世代機開発とは、違うアプローチの仕方をしている場所だ。通称、思考力先行特化型IS研究所。従来の物理的現象における武器装備ではなく、思考によるイメージで武器を生成することに重点を置いて研究実験をしている。その特殊性故に、まったくISのテスト操縦者が見つからない変わった研究機関である。ようは、従来のISよりも、乗り手の方に要求度が高いISを製造しようとしている場所なわけだ。俺に白羽の矢が立ったのは、男性だからなのかかもしれない。セシリアはシャルルのほうを見て、シャルルも肩を竦める。なんでそんなに意固地になるのかといった様子だった。

「そんな無体に扱わずに。せつかくの機会ですから、一回くらい会社の方に会われては？」

「だから、無理やり軍曹が会わせるつもりなんだよ。こっちは一回でも多く、ISに触れる機会を減らしたいのにな」

まるでIS学園の趣旨を根本から否定する発言だが、俺の考えがそうなのだからしょうがない。現に支給されてるラファールは、アクセサリーのまま机の上に投げっぱなしになっていた。

「僕とセシリアさんは専用機持ちだから大丈夫だけど、今の発言はクラスで言わない方がいいね。じゃないと、喜久の立場が本当にかしくなるよ」

「忠告はありがたく受け取るよ。でもな、本音としては極力触れたくないんだ」

ISが嫌いなことを知っているセシリアと、なぜ嫌うのかの本当の理由を知っているシャルル。2人とも微妙な顔をしている。俺は、相変わらずうつ伏せのまま時計の方を向く。時間が。

「もうそろそろ、一夏たちと待ち合わせの時間だろ。2人とも部屋を出て、アリーナに行ったほうが良くないか？俺はまだ時間あるし、鍵はしとくから」

「一緒に出ようよ。僕としては、喜久に持ち物を漁られたら困るし」シャルルが軽蔑のような視線を俺に向ける。ち、ばれたか。漁る気なんてさらさら無いが、ベッド辺りに何か仕込んでおこうと思ったのに。俺は起き上がりながら、自分の机に向かっていく。

「シャルルさん、喜久さんも流石にそこまではしないと思いますが」セシリアには悪いが、する気は満々でした。俺は、机の下に潜り込むと、隠してあった煙草を取り出す。前にシャルルと話し合った結果、部屋は禁煙でその他はOKになった。セシリアに見つからないよう、直ぐに制服の内ポケットに隠す。

「喜久さん、何をしているんですの？」

「いやさ、筆箱を机の後ろに落つことしたのを思い出してさ」

カモフラージュにわざと落としておいた筆箱を見せる。すると、ISのチェックを終えたシャルルが立ち上がって俺の側までやってきた。

え、なに？

そして、しげしげとわざとらしく俺の胸辺りを覗く仕草をする。

「おい、ま

「喜久、煙草を隠すならもつと上手にやった方がよいよ。ああ、セシリアさんは前の同居人で喜久から聞いているから、もちろんこの場で指摘しても大丈夫だよな？」

俺が待てと叫ぶより早く、シャルルは一気に言葉をまくしたてた。

俺は、にこにこ笑っているその顔に本気で怒りを覚える。お前、俺との秘密協定はどうした？

「おまえ。後で覚えてろよ」

「なにを覚えれば良いのかな？喜久の煙草の保管場所なら全部覚えてるけど」

…こいつ。まじで下の穴を全部、塞いでやろうか。

ダムは一度決壊すると、貯水された水が放流されて空になる。同じように、セシリアに煙草のことがばれると、俺の煙草のストックは無くなる。現に、セシリアは冷めた目でこちらを見ていた。

「喜久さん、少しお話しが。その前に、出すものを出してください。もちろん、机の中もチェックして構いませんわよね？シャルルさん、

あとで私に煙草のある場所を教えてくださいな」

「ええ、喜んで。それじゃ、僕は先に行くから。セシリアさんと仲良くね」

そう言つてシャルルは部屋を出て行つた。取り残された俺は、無言で煙草を机の上に置く。次いで、仁王立ちのセシリアに肩を両手で握られた。しかも、爪を立てられながら。

「俺も人に会いに行かなきゃな。じゃ、あと頼んだ」

「まだ、時間は大丈夫なのでしょう？」

セシリア！その笑顔が怖いんだけど！！

「いいから！この場で正座なさい！！！」

セシリアの怒声が室内にびりびりと響く。このあと、俺は1時間はこつてりと説教をくらつた。

――

俺が応接室にノックして入ると、そこには織斑姉の他に3人の男女が居た。

「失礼します」

「市隈、何を考えている。時間厳守と言つただろう」

織斑姉からの叱咤がとぶ。くそ、俺は守るつもりだったんだよ。セシリアのやつ、自分がすつきりするまでがみがみ言いやがつて。

「イギリス製の紅茶でお腹を壊したので、トイレに行っていました」
「なにをふざけたことを言っている。先方を待たせるような教育を私はしていないはずだが？」

あとで殴らせるといった様子で、織斑姉の額に青筋が立ったのがわかる。すると、織斑姉と対面に座っていた若い痩せ型の男が口を開けた。

「まあ先生、そこまで生徒さんを叱らないで頂けると助かります。私どもは、今日は彼にお伺いを立てにきた身ですから」

丁寧な言葉遣いで対応され、俺は内心で一步後ろに下がる。どうせ、この会談からは離れることは出来ない。しばらくは、観察させてもらうか。

「遅れて申し訳ありませんでした。織斑先生、僕はどこへ着席すれば宜しいでしょうか？」

「……。私の隣の席に座れ。」

織斑姉は俺が入学以来、初めてとった礼儀正しい態度に呆気にとられながら席に座るよう促した。一礼して着席し、挨拶をする。

「市隈と言います。本日はお忙しい中、僕のような一学生のためにわざわざご足労頂きありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそ、私達の社にご興味を持って下さりありがとうございます。私、谷中と言います。他は部下の根本と斎藤です。いやあ、先生。良いご教育をなさっていますね」

「え、ええ。ありがとうございます」

織斑姉は俺の方を見て困惑し、曖昧に答えてしまふ。俺と言えば、そんな対応に腹の中で笑い転げていた。そして、もちろん追撃もする。

「織斑先生には普段とても優しく、いつも丁寧に教えていただいております。まるで教育者の鑑のような方ですし、僕の誇りでもあります。将来は先生のような人間性を身に付けることができると、常々考えて行動させて頂いております」

「すばらしいです！織斑先生は生徒たちにとって、とても魅力のある先生なんですね！！」

俺が普段は織斑姉に対して思っている正反対のことを言葉で羅列すると、根本と紹介された若い女が手放しにして喜んだ。ざまあみると、心の中で舌を出してやる。織斑姉は耐えられなったらしく、すごく嫌そうな顔をして俺を見た。

「い、いえ。申し訳ありません、ほんの少しだけ席を外させてください。市隈、一緒に廊下へ出る」

「先生、お客様をお待たせてしまうのは失礼かと存じます。先生のお話を後ほどお聞きできるのでしたら、先件を大事にされるのが宜しいかと」

廊下で縛り上げようってか。そうはさせるか、滅多にない逆襲の機会を逃す手は無いからな。

「市隈さん、ありがとうございます。先生、お手間は取らせません。ほんの少しお時間を戴ければ、我々も退散させて貰いますので」

嬉しいことに、半縄の人間も合いの手を差し伸べてくれる。後の恐ろしい出来事なんて、この際どうでもう良い。今をとことん楽しん

でやる。織斑姉はしょうがなく席に体を下ろした。

「く、わかりました。ご説明よろしく願います」

「ありがとうございます。市隈さん、パンフレットはお読みになって頂けましたか？」

谷中に問われて、俺はパンフレットの中身を思い出しながら答える。

「はい。一通り目を通して頂きました。素晴らしいコンセプトですね」

「これはこれは、恐縮です。でしたら今日は契約の書類を用意させて頂きましたので、一度我が社にお出で下さい。見学していただいた折に、お眼鏡に適いましたらサインを頂ければと思います」

契約書類に研究所の見学ね。どうだかね、俺は行く気なんてさらさら無いけどな。まあ、そんな面倒事は横の人にも投げてしまえば良いや。それよりも、内心の大笑いが止まらない。気味悪がっている顔が最高だ。

「了解致しました。日程の調整などは学生の本分を超えてしまいますので、織斑先生に一任して頂ければ宜しいかと存じます。先生、厚かましいお願いではありますが、宜しいでしょうか？」

「あ、ああ。了解した」

ははは！！終始俺のペースだ。話のたずなを握りたければ、奪ってみろ。

「市隈さん、ありがとうございます。織斑先生、後の詰めは追ってこちらから連絡をさせて頂きます。いや、本当に話がわかる方です。ありがとうございました。それでは、私どもはこれで失礼させて頂きます」

「先生、僕はこの後ですが、友人の手伝いがありますので退室しても宜しいでしょうか？」

話も終わり、俺は八つ裂きにされる前に退散を開始する。ふいに、織斑姉は不敵に笑うと余裕の笑みを返してきた。やりすぎてキレたか？

「市隈、退室して良いぞ。しかし、随分と気に入ったのだな。それなら、私が手間を省いといてやる。サインと判子は押しといてやるから、お前は後日ISの調整と受け取りをだけをしに相手先へ出向しろ」

なんだと？俺が遊びすぎたつけなのか、織斑姉はとんでもない爆弾を投下してきた。

「それは、本当ですか！？でしたら、直ぐにサインを！！」

谷中の目がLED電球のように輝きだし、余りの勢いに喋っている口から唾が飛ぶ。冗談じゃない！ちくしょう、引き際を完全に見誤った。

「了解しました。どうした市隈？退室しろ」

「いえ。一応、本人の希望を大切にし、成長の糧とすることも教育として大切に思います。僕としましてはやはり見学に行き、この目で確認し判断させて頂きたいのですが」

ふざけるな。何としてでも阻止してやる！！

俺が意気込むと、織斑姉は最後の止めを刺してきた。

「友人を待たすと言う教育をした覚えは私には無いが。早く退室し

て、駆けつけてやってはどうだ？」

ぐう、筋の通ったこと言いやがって。何か言葉は、反論する材料はないのかよ！！

……浮かばない。くそ、やられた！！

「……わかりました」

織斑姉は俺の肩を掴みながら顔を近づけてくる。そして、耳元で小さく囁いた。

「私を丸め込むなんて百年早いぞ。もっと人生を勉強しろ、ガキ」

ぐあー、ムカツク！！俺は無言のままドアを開けると、ゆっくりと閉めてその場を退室した。

2・7 | 荒レル砲撃音

— 7 / —

織斑姉にノックアウトの完封負けを帰してから、俺の精神は疲れきっていた。唯一の癒しだった煙草は、セシリアに駆逐されて完全に無くなってしまった。そして、シャルルには毎度の如く毒舌の嵐をくらっていた。

「喜久さん、今日こそは流石に練習に付き合ってくださいまし」

俺はいつもより、やる気がさらにない状態で第3アリーナに来ていた。主にセシリアに無理やり引つ張られてだ。なにが悲しくて、授業外にこんなところ来なきゃいけないんだよ。

「セシリア、俺は基本的に傍観だぞ。補助と助言はするが、お手本になるような実演はごめんだ」

「私はそれで、全然構いませんわ」

2人で話しながらアリーナのピットゲートを潜ると、俺たちより先客がいた。

「あれ、凰じゃん。あいつも練習か？」

「そのようですね」

セシリアと二人で凰の方へ歩いていく。音でわかったんだろう、向こうもこっちに気づいた。

「あら、随分珍しいわね。アンタが来るなんて、今日は雨かしら？」

「良いなあ、雨で練習中止になれば最高だな」

皮肉なんて単語は知らない。

「く、相変わらずやる気がないわねー」

しかし、ほんとに雨天中止にならんかね。セシリアは、ISを展開してその場に待機する。

「鈴さんも学年別トーナメントに向けて練習を？」

「そうよ。私としては、この前のアンタとの決着を直ぐにでもつきたいんだけど」

凰が挑戦的な発言をする。どうせ授業の模擬戦のことをいつているんだろ。…勘弁してくれよ。俺は手をぶらつかせて答える。

「そうか、二人で仲良くやってくれ」

「何言ってるのよ！！アンタよ、喜久！！」

興奮しながらISの展開が出来るなんて、器用な奴だ。すると、セシリアが俺と凰の間に割ってはいった。なんだ？

「待つてください。鈴さん、貴方とは一度よくお話しておくべきだと思っておりますの。この意味、おわかりでしょう？」

「ふーん、何なら二人一緒にでも私は構わないわよ？」

俺は、セシリアの後頭部を軽く拳骨する。

「痛あ！喜久さん、何しますの！？」

セシリアはぷりぷりとした表情で俺を見た。

「セシリア、なに挑発してんだ。鳳も練習すんだろ？ だったら、こん

ドンッ！！

なことで、俺が言う前にアリーナへ砲撃音が響き渡った。俺はとつさに部分展開して、攻撃を防ぐ。

「ぐうあー！！」

着弾した爆風の衝撃と爆音から来る耳鳴りで、意識が吹き飛びかける。セシリアと鳳は攻撃を避けきって、既に空中に浮いていた。

片目の視界が赤い。ち、額かどこかを飛び散った破片で切ったか？俺は、顔を拭って砲撃の飛んできた方を向く。黒いボディに赤いラインが特徴的な機体は、俺の視界画面にドイツ製シュヴァルツエア・レーゲンと表示される。乗っているのは銀髪の子ビだ。

「おい、てめえ。冗談にしちゃ程があんだろ。なめてんのか、ドイツ人」

『フン。今のは、この前の礼だ。貴様は教官を侮辱していると聞くならば、ここから消し飛ばしてやろう』

ボーデヴィツヒが再びレールカノン砲を構えた。

良い度胸だ。久しぶりに、切れちまったよ。最低でも、腕の一本はへし折ってやる。

「喜久さん！ ご無事ですか！！ 貴方、一体何を考えていますの！！」
「ちよっとアンタ、無防備な人間に攻撃って頭がおかしいんじゃない

いの!!」

セシリアと凰が叫び、ボーデヴィツヒが嘲笑の笑みを浮かべた。そして、手招きするように挑発する。

『お前らは所詮は有象無象の雑魚だ。私は三人でも構わんぞ。とつとと来い』

「セシリア、凰。お前らは絶対に手を出すな」

できるだけ低い声を心がけて出すと、セシリアと凰が俺の方をぎよつとして見てくる。ISを展開しながら、俺は笑ってボーデヴィツヒの方を向いた。

「なあ、ドイツ人。そんなにあの教師がお気に入るか？お前の国じや同性愛が美徳なのかよ。お前は、あのメスゴリラの妾でもなりたいのか？」

『貴様ア!!それ以上、教官を侮辱すると許さんぞ!!』

ボーデヴィツヒの琴線に触れたらしく、冷静だった目つきが怒りの色に染まる。思考を鈍らせるなら、もう一押ししてところか。

「なんだあ、聞こえねえよ。ああ、でもお前みたいな小さい奴じゃ肉もついてないしな。粗大ゴミに混ぜられて捨てられるのがオチか。いや、もう捨てられてんのか？」

『殺してやる!!』

完全にキレたボーデヴィツヒが一直線に突進してくる。すると、奴の機体から突然、電子ワイヤーのようなものが飛び出した。

全部で4つか。俺は避けるのも面倒なので、ブレードを瞬時展開して先の2つを叩き落とす。次いで、残りの二つをさらに瞬時展開し

たスナイパーライフルで弾き飛ばした。

『くらえ！！』

ボーデヴィツヒが叫びながらレールカノン砲を発射する。俺はスナイパーライフルを撃って砲弾の軌道をずらしながら避けると、そのままブレードを構えた。

途端、俺との距離を縮めきったボーデヴィツヒが片手を前に翳す。は、腕をプレゼントしてくれんのかよ。だったら、お望み通りに切り飛ばしてやる。

ラピッドスイッチ
俺は高速切替でスナイパーライフルからブレードへ変換して二刀流に代えた。そのまま沈み込むような構えで、両手を後ろに下げて攻撃の瞬発力を溜め込む。

「ふん、馬鹿め！」

「なあっ！？」

次の瞬間、ガクンツと何かが落ちたようにラファールの機体制御が効かなくなった。俺は両手を後ろにまわしているので、正面がから空きになっている。

くそ、なんだこの歪んだシャボン玉の膜みたいなのは！？こんな攻撃方法見たことないぞ！！

有無も言わず、ボーデヴィツヒのレールカノン砲が俺の顔面に下ろされる。

「五体満足で済むと思うなよ。貴様は絶対に八つ裂きにしてやる」

くそつたれが、挑発したわりに思ったより言葉が冷静じゃねえか！俺は忌々しいISTSを一瞬だけ発動すると、やたら軋む音を見無視して全力で片腕だけ前に出した。

「なに！？動けると！！」

ドンッ！！と発射音が鳴り、俺は砲弾の直撃をもろに受けて後ろに吹き飛ばされる。

「があ！！！！」

転がりながら体制を立て直すと、片腕がだらりと下がる。視線を動かして確認すると、攻撃を受けた装甲が破損して使い物にならなくなっていた。

これじゃ、武器の出し入れが出来ないな。おまけにISTSの反動で、体も少しだるくなる。あれじゃ、まだ隠し玉があるんじゃないだろうな。俺はしょうがなく、壊れていない腕の方を高速切替してブレードからライフルに持ち替えた。

「まさか、停止結界が破られるとは予想外だったが。貴様のIS、面白いものを積んでいるようだな。それにさっき、一瞬髪の色が変わった理由は何だ？」

「誰が教えるかよ。知りたきゃ俺を潰してから聞けよ、スクラップ」

口が裂けても教えられないわけがない。しかしISTSを使って、ぶっつけ本番で相手のIS同調率へ侵食を試みたのは初めてだ。出来なかったら、間違いなくさっきの一発で病院行きだったな。挑発に乗ったボーデヴィツヒの目が鋭利になる。

「貴様、本気で死にたいらしいな。望み通り殺してやる」

「やってみろや」

ボーデヴィツヒは再び突進を開始する。俺も瞬間加速で真っ直ぐに

イグニッション・ブースト

進みながらスナイパーライフルを放つ。しかし、さっきと同じように停止結界とかいう、ふざけた膜にライフルの弾が止められた。くそ、何でもかんでも止めやがって!!

「ふん、学習能力のない猿め」

「余裕ぶっこいてんじゃねえよ、スクラップ!!」

俺は短連続の瞬間加速で無理やり方向軌道を変える。後ろを取ったが、奴が動じる気配は無い。

「その程度で取ったつもりか？」

ボーデヴィツヒが電子ワイヤーを射出する。そんなこと、とつくに知ってたんだよ！俺はスナイパーライフルを投げ捨てて、そのまま奴の背中に組み付く。奴の電子ワイヤーが一瞬だけ動きを止めた。

「貴様!!」

そのまま、イグニッション・ブースト瞬間加速でボーデヴィツヒを掴んでアリーナの端まで飛んでいく。俺の後ろから組まれた腕のせいで、奴は腹を圧迫されて息に詰まった。

「ぐっ!!」

「一発、壁にぶち当たって来い!!」

俺はボーデヴィツヒを切り離して上空へ離脱し、奴はそのまま壁に激突する。衝撃を受けた壁は、方円上の盛大な亀裂が走った。

本人が速度を出して突っ込んだんだなら、例の停止結界つてのも意味ねえだろ。仮は返したから、これでイーブンだ。俺は起き上がるうとするボーデヴィツヒを上空から見下ろす。

「来いよ、スクラップ。本番はこっからだろ？」

『貴イ、様アアア！！！』

ボーデヴィツヒの声から、今度こそ本気でキレたのがわかる。おもしれえ、来てみ

『そこまでだ！！二人とも戦闘を停止しろ』

「……ち、良いところで水差しやがって」

織斑姉の言葉がアリーナに響き渡り、ボーデヴィツヒがビタリとその場で停止した。俺は織斑姉のいる管制室の方を向く。

「今は模擬戦中ですが。続行はさせてくれるんすよね？」

『模擬戦で壁を破損させる馬鹿がいるか。市隈、また謹慎をくらいたいか？』

『教官、やらせて下さい！！この反抗分子は今すぐにでも、排除すべきです！！』

俺とは違う理由で、ボーデヴィツヒが織斑姉に食い下がる。

『馬鹿者どもが。市隈、生徒から報告があつたぞ。私のことを随分言ってくれたようだな』

知るかよ、別に減るもんじゃねーだろ。俺は気にせず織斑姉の方を向き続ける。

『ラウラ、3度はないぞ。今すぐISを解除し自室へ戻れ』
『く、了解しました』

ボーデヴィツヒは言われるままに、ISを解除して地面に着地した。

「おいおい、ふざけんなよ。…しらけちゃった」

『市隈、貴様もISを解除しろ。今なら一発殴り飛ばすだけで勘弁してやる』

地面に着地してISを解除する。俺がボーデヴィツヒのほうを見ると、奴も俺のことを親の仇のように見ていた。

『お前ら、学年別トーナメントがあるのは知っているな？ちゃんとした公式の場で勝負を競えば、今後の禍根は残さず済むだろう。それまで、お前たち二人の戦闘行為を禁ずる』

「了解しました」

「クソツタレが。わかったよ」

織斑姉を無視して攻撃してやりたいが、向こうが返して来ないんじや意味がない。

『教師には敬語を使わないか。市隈、保護者に連絡を入れて欲しいか？』

「…イエス」

流石にこんな下らないことで、姉さんに迷惑をかけるわけにはいかない。しょうがなく、俺は織斑姉の言うことを聴くことにした。

『解散しろ』

ボーデヴィツヒは無言でアリーナを後にした。すると、直ぐにセシリアと凰が走り寄ってくる。俺は疲れた笑いをしながら、地面に腰を下ろした。

「よう、大丈夫か？」

「喜久さん、直ぐに保健室へー!!」

「アンタ、なにやってんのよ。馬鹿なんじゃないの？」

俺はボーデヴィツヒが歩いていったアリーナの出口を見る。すると、一夏とシャルル、篠ノ乃が走ってきていた。

「ボーデヴィツヒって、意外と強いな。驚いたよ。痛あ！」

セシリアが俺の後頭部を叩く。確か、初対面でもされたよな。

「何を考えていますの！もう少しは、体にお使いになるべきです」

だよね、俺もこんな模擬戦は2度とごめんだ。

「喜久」

「ん？」

俺は走り終えて到着していた、シャルルのを向く。そして、ボーデヴィツヒが対面初日に一夏を引つ叩いたように、今度はシャルルが俺を引つ叩いた。俺の周りにいた全員が驚いて固まっている。

「どういうつもり？こんな危険な真似して」

「勘弁してくれよ。先にやってきたのは向こうだし」

俺が適当に反発して言うと、シャルルはさらにすごんで見せた。

「それを買ったのは、喜久でしょ？」

「あ、それは反論できないな。ところでさ、シャルル」

俺は手をシャルルの方へ差し出す。

「なに？まだ、説教は終わってないよ」

「肩貸してくんない？頭から血が出続けたせいで、貧血なのかわからないけど視界が悪いんだよ」

この後、俺は保健室に連れて行かれて治療された。

壊したラファールは、また修理行きになって一時返却扱いになる。

そして、シャルルの説教はアリーナから、俺が自室で寝るまで途方もないくらい続いた。

こんなんだったら、毒舌の方が良いと俺はぐったりする。今回の騒動で一番多く俺を叱り飛ばしたのは、何故かシャルルだった。

2 - 7 | 荒レル砲撃音（後書き）

ストックを全て投稿しました。連投は、これで終了になります。この後は、ゆっくり書き上げながら投稿させて頂きます。

2 - 8 | 学年別トーナメント

| 8 / |

シャルルに散々怒られてから数日経ち、俺は自室でぐったりしていた。

回収されたラファールは欠損部分が思った程ではないらしく、もう少しすれば修理が終わるらしい。しかし、今の俺にはそんなことはどうでもよくて、全然違うことを考えていた。

「…煙草が吸いたい」

「それって、禁断症状だよな。一体、幾つから喫煙してるのさ？」

シャルルが私物らしきノートPCでISのデータチェックをしながら、呆れたように聞いてくる。

「14」

「ヘビースモーカーは早死にするよ。いい機会だから、この際に辞めちゃえば？」

うるさい、こんな状態にしたのは全部お前だろう。俺の備蓄してた煙草は、前回シャルルのせいでセシリアに根絶やしにされた。そのせいで、今は一本も無い。

「ああ、購買に売ってれば良いのに」

「未練たらたらだね」

「おかげ様で、たらたらだよ」

俺とシャルルが適当な会話をしていると、ふいに廊下に出る為のドアからノック音が聞こえた。

「一夏だけど。入っていいか？」

「シャルルが着替え中だ」

俺が答えると、一夏はドアを開けてそのまま入ってきた。

「だったらお前は部屋にいないだろ、喜久」

「あら、シャルルはちゃんと一夏に自分のこと話したんだ」

一夏の返答に、俺はシャルルが自分の秘密を一夏に告白したことを知る。ベッドで寝転んでた姿勢を直すと、一夏に席を勧めた。シャルルは作業を中断して、3人分のお茶を入れ始める。最近なんだか緑茶にはまったらしく、そればかり飲んでるみたいだ。

「はい、一夏。熱いから気をつけて」

「サンキュなシャルル」

一夏はシャルルからお茶の入ったコップを受け取って、手を添えながら膝の上に置く。俺も受け取って、ベッド脇の備え付けテーブルにお茶の入ったコップを置いた。

「喜久はシャルルの秘密を自力で気づいたんだって？」

「まあ、そんなとこ。変わりに煙草のことを黙っててもらってるけど」

黙るも何も、もはや一本たりとも残ってないがな。

「まだ吸ってるんだってな。喜久、いい加減に禁煙しろよ。セシリ

アが辞めてくれないって嘆いてたぞ」

「だろうね」

一夏が困った顔をして、シャルルが頷いた。勘弁してくれ、あいつは俺の姑かよ。

俺は本題を切り出すため、この話を一旦区切ることにした。

「話しを変えるけど、一夏はシャルルのことをどう思ってる？」

「シャルルがしたいようにすべきだ。俺は、そう考えてるし協力もする。生き方を決める権利は本人だけが持つてるんだからな。それに対して親なんてのは関係ない」

一夏の意見は、随分と熱意の籠った返答だった。

「ありがとう、一夏」

暗に守ってやると言われたシャルルは、とても嬉しそうにしている。

「一夏が言った方向で、概ね俺の意見も一緒だから。まあ、問題はなさそうだな」

「そうだな」

これで今のシャルルにとって、1番アウトになりそうな原因が除外された。それにしても、シャルルは俺が思ってたよりも早く一夏に打ち明けたみたいだな。これは、予想して考えてたより良い傾向だ。

「喜久、ありがとうね」

「ん？」

ふいにシャルルが俺に話し掛けてくる。

「喜久が僕の背中を押してくれたから、一夏にも正直に話すことが出来たんだ。だから、ありがとう」

「そう思うなら、なんで煙草の在り処をセシリアに教えたんだよ？」

「決まってるでしょ。それは、僕も喜久に煙草を辞めて欲しいからだよ」

ぐあー！ 敵が2人から3人に増えやがった。

俺は心の中で、早く20にならないかと虚しく願う。シャルルは気分よさそうに満面の笑みでこっちを見ているが、俺の気持ちは沈み込む一方だ。そんなことを考えていると、一夏が話題を変えてきた。

「それより、喜久は誰とペアを組むんだ？俺はシャルルと組むことになったけど」

「そうだね。僕は一夏と組むけど、喜久はセシリアさんと組むのかな？」

ペアを組むとは、学年別トーナメントのことだ。今回は、学年別トーナメントでペアを組んでの参加が義務付けられている。俺は、内心でそれに対しての方針を既に固めていた。

「俺はセシリアとは組まないよ。フリーで良いし、組んだ奴に合わせて行動するよ。ただし、ボーデヴィツヒの奴と当たるまでだけだな。あいつに当たったら、全部好きにやらせてもらう」

「セシリアさんと組まないのは1対1で勝負したいから？」

俺は心中で手放しに、シャルルへ賞賛を送る。相変わらず女の勘では鋭いよな。恐れ入るし、すごい能力だと思う。

「そうだよ。あいつは連携を望むだろうからさ。でも、それじゃあ

「一夏のねーちゃんにお預けくらってる意味が無いだろ？」

「気持ちわかるけどな。でも、ラウラは強いだろ」

前に頬を叩かれた記憶が過ぎったのか、一夏が少し嫌そうな顔ををした。

「シュヴァルツェア・レーゲンにはAICもあるしね。喜久、勝算はあるの？」

「無いよ。だけど、一回は身をもってAICをくらってるからな。もう、あんな不意打ちは食らわないさ。皮肉だけどな、ISの操縦だけなら俺はあいつに負ける気はしない」

俺が意気込んでいると、来客を告げるノックが廊下側のドアから聞こえた。俺は話を中断してドアの方へ向かう。

「どちらさんですか？」

「セシリアです。開けて頂けますか？」

うわ、話題が上がってた人が来ちゃったよ。俺が後ろを向くと、一夏とシャルルが苦笑していた。

さて、なんて言って向こうに納得してもらおうか。俺は頭の中で思案しながら、ゆっくりドアを開けてセシリアを迎え入れた。

／＼／

学年別トーナメントの当日。俺は、相方になった人間とアリーナの中央で相手チームを見ていた。そして、相方に対して盛大に舌打ちをする。

「くそつたれ、何でお前が相方なんだよ」

「それはこっちの台詞だ。これでは、貴様との勝負を預けた意味が無いではないか」

よりにもよって、自動的に決められた俺の相方はボーデヴィツヒだった。

これじゃあセシリアに、ものすごい苦勞してペアを断った意味が無い。俺の勞力を返せや、このドイツ人め。自分の中でのやる気がどんどん萎んでいくのがわかる。

「俺はお前とやる以外、なにも興味ないからな。試合が始まって、戦う気なんてさらさら無いぞ。むしろ、棄権したい」

「貴様との勝負は預けといてやる。私は織斑一夏にも用があるのでな。もし勝手に棄権してみろ、その時は貴様を血祭りに上げてやるから覚えておけ」

「は、言ってるよ」

最早、チームプレイのチの字もない。俺はだらけた姿勢のまま、対戦相手を見る。そこには、やる気満々な一夏とシャルルが居た。

「お前の力は借りん。せいぜい後ろで指を咥えて観戦しているのだな」

「名案だな。そっちが全部やってくれんなら、俺は後ろで寝てるとするわ」

ピーッと試合開始の合図が鳴ると、ボーデヴィツヒが前に。俺は後ろに下がりISを粒子化した。そして、そのまま寝転んで欠伸をする。楽をさせてくれると言うのだから、喜んで答えよう。前方ではボーデヴィツヒと一夏、シャルルがアリーナを最大限に利用して戦

闘を開始している。そして、一夏から「喜久、まじめにやれ!!」と大声が聞こえた気がした。

そんなの知ったこっちゃない、文句はボーデヴィツヒに言え。ISは完全に仕舞い込んでしまったので、今は通信さえできればしない。織斑姉の阿修羅のような怒り顔が浮かんだが、気にしないで俺は観戦を楽しむことにした。

しかし、そうはさせまいとアリーナ中に響く、織斑姉のふざけた命令が俺の耳に入る。

『織斑にデュノア、お前たちの試合形式を変更する。暫定ルールだ。参戦していない馬鹿を倒したら、その場で勝利したことを認めてやる。今すぐに銃弾を浴びせろ!!』

ふざけんな、何でそんなにドSなんだよ!! ISを瞬時展開してスナイパーライフルを構えると、シャルルが俺の方へ向かってきた。おいおい、俺のことは無視してくれよ本当にさ。

「さばる喜久が悪いんだよ!! そのままやられてくれない?」

「やだね! だいたいな、俺は”面倒臭いは放棄する”ってのが、座右の銘なんだよ!!」

オレンジの装甲に包まれたシャルルが高速切替を使いながら多種類の武器から銃弾を弾幕のように放ってくる。俺は短連続の瞬時加速ラビットスイッチを利用して、それを一発も弾が掠ることなく避けきつた。イグニッション・ブーストすると、シャルルはライフルとブレードに装備を整えながら俺との距離を計って、その場で停滞しだす。

「さすがは喜久。怪物じみた動体視力だね」

「そんな評価は嬉しくねーよ」

俺はスナイパーライフルを両手に持って、弾丸を発射した。シャルル目掛けてそれを撃ち放つと、そのまま急接近を仕掛ける。すると、シャルルは俺の攻撃を避けながらライフルをすぐさま高速切替し、マシンガンの乱れ撃ちを開始した。

「じゃあさ、これには付いて来れるか？」

俺は笑いながら言つて、持っているスナイパーライフルをシャルル目掛けて思い切り投げる。次いで瞬時展開で取り出した2つ目のスナイパーライフルを構えると、そのまま投げぬいたスナイパーライフルに向けて弾を発射した。シャルルの近くで投げたスナイパーライフルが爆散して、円状に飛び散る破片と煙を発生させる。

「くう！！」

「破片の散弾効果だ。避けられないだろ？」

俺はそれに構わず、シャルルの元へと突進した。煙の中へ突っ込むと、シャルルが盾を構えているのが目に入る。どうやら、ぎりぎりフビッドスウィッチで高速切替して防御したらしい。本人の技巧が優れている分、その堅実な部分が硬さになってISに反映されているのがわかる。

打撃は受けられる。しかし、掴むことはできるだろう。俺は、かさずシャルルの後ろに回りこむと、持っていたスナイパーライフルを粒子化してシャルルの片足を両手で掴んだ。

「股が裂けたら、責任とってやるよ」

「なあ！！変

変態と言いかけたんだろう顔の真っ赤なシャルルの言葉が千切れて、俺を軸に盛大な回転を開始する。片足ジャイアントスイングはIS

の力を借りて、ジェットコースターの速度を直ぐに叩き出した。男じゃなけりや、股関節が地味に痛くなるくらいの筈だ。俺は目標物の狙いを定めるために、辺りを見回す。確認すると、離れたところで一夏とボーデヴィツヒが接近戦を行っていた。

「一夏あ！プレゼントだこの野郎！！」

「ええ！？きゃあああ！！」

最後の一回転に瞬間加速で捻りを加えて、悲鳴を上げたシャルルを投げ飛ばす。人間砲弾の如く飛んでいったシャルルはボーデヴィツヒの背中に激突して、そのまま仲良く一夏を巻き込んでアリーナの端に激突した。

すると、いち早く起き上がったボーデヴィツヒが、お返しとばかりにレールカノン砲から弾を発射してくる。俺はそれを再び瞬間展開したスナイパーライフルで射撃し、飛んでくる砲弾の軌道をずらしながら避けきった。

『何の真似だ、貴様ア！！』

激昂したボーデヴィツヒが、俺に向かって叫ぶ。もちろん、俺の方に一人よこしたから送り返したただけだ。当然、織斑姉のことをボーデヴィツヒに八つ当たりするのも忘れない。俺は姿勢を直すと、スナイパーライフルを更に展開して両腕に装備を整えた。

「一夏に投げたんだ。でも外れたみたいだな」

『ぬけぬけと嘘を吐くな！！思いつきり、狙っただろう！！』

「俺を殴りたきゃ、2人に勝ってからしろ。もちろん俺は手伝わないから、あしからず」

『終わったら、覚えていろ！！』

やなこつた。俺は適当にその場で待機して、戦いを見守る。対戦相手の一夏とシャルルも、俺のやる気が完全に無いのがわかったのだろつ。2人掛かりでも厳しいボーデヴィツヒの方へ、攻撃を集中し始める。戦闘が本格化して時間が流れていくが、有利だったボーデヴィツヒがあるところで押され始めた。

ボーデヴィツヒの能力値は高いのだろつ。が、連携の取れた一夏とシャルルにやり返され始めている。俺は戦うつもりが無いので、ボーデヴィツヒが負けたら棄権するかなどと考え始めた。

そして、一気に試合進行が変化し、シャルルがボーデヴィツヒを追い詰め始める。いつの間にやら覚えたのか、イグニッション・ブースト瞬時加速で一気に距離を詰めていく。しかしそれも束の間で、このままだとシャルルがボーデヴィツヒのAICに止められてしまう。

『ふっ……。だが、私の停止結界の前では無力！』

ボーデヴィツヒが勝利を確信した台詞を叫ぶ。あれじゃ、まんま悪役の台詞だな。

しかし、ボーデヴィツヒがAICを発動する前に、一夏がシャルルのアサルトライフルで発射した弾丸を奴に当てた。

続けざまに、シャルルのパイルバンカーみたいな攻撃が決まる。ボーデヴィツヒの表情が歪んで見えると、威力が強すぎて人体にも影響が出ているのがわかった。

シャルルはそのままの勢いで同じ攻撃を放ち続けながら、ボーデヴィツヒと一緒にアリーナの端まで移動し続ける。これは、流石に決まっただろつな。俺は棄権するために、手を上げて白旗を掲げる準備をする。

「一夏、俺は棄権する

からと言いかけた瞬間にボーデヴィッヒを中心に閃光が走って、シヤルルがその場から吹き飛ばされた。

2・8 | 学年別トーナメント（後書き）

このお話を読んでいただいている皆様、大変にありがとうございます。
お話を更新させていただきました。また、各話の誤字脱字の修正及び、一部加筆修正をさせて頂きました。

2 - 9 | 暴走IS

| 9 / |

「あああああつ！！！！！」

ボーデヴィツヒの悲痛な叫び声があり、ナ中に響き渡る。それは何を求めて叫んだのか、理解不能な雄叫びに聞こえた。

おいおい、ボーデヴィツヒは一体なにしてたんだよ。俺は一直線にダツシユして、尻餅を着いているシャルルを立たせた。

「大丈夫か？」

「僕は平気だよ。それより」

一夏の方を向いて異常が無いのを確認すると、俺は再びボーデヴィツヒの方を向く。そこには、IS以外の何かに^{メタモルフォーゼ}変態していくようなシュヴァルツェア・レーゲンの姿があった。

黒いスライムがボーデヴィツヒを覆いきって、中に取り込んでいく。そして、それは人型に落ち着くと、原型とまるで違うISの形をしていた。

「…VTシステム」

「え？」

俺が無意識のうちに黒く象られたISの名前を呟き、それにシャルルが反応した。

昔にいたところで学習させられた知識が蘇る。しかし、あれは条約かなんかで禁止されている筈だ。なぜこんなところで、ボーデヴィ

ツヒの奴がそれを起動させてる？

俺が焦りながら考えていると、突然に一夏がVTシステムに飛び掛かった。

その行為に思わず叫んでしまう。

「馬鹿やろうが!!」

その場から俺は咄嗟に瞬間加速をして、一気にVTシステムへ距離を詰める。

一夏は剣戟による一撃の打ち合いの後、二撃目を避けた瞬間にISが粒子化した。エネルギーが切れてISが強制解除されたらしい。

「それがどうしたあつ!!」

「どうしたじゃねえだろ!! お前は阿呆か!!」

俺はISの腕で、一夏の顔に軽くラリアットをかます。極力加減して抑えたが、ISの威力は凄まじく一夏は後ろへ盛大に吹っ飛んだ。まずいな、思ったより吹っ飛んだよ。

「死にてーのかよ、一夏」

「うるせえ!! 邪魔すんじゃねえ、喜久!!」

立ち上がり、VTシステムに一夏が再び突撃しようとする。溜息を吐いた俺は、持っていたスナイパーライフルの銃口を一夏の目の前に突きつけた。

流石にこれは効いたのか、一夏は思わずその場で立ち止まる。

「もう一度聞くだ。お前は、死に行きたいのか？」

「頼む喜久、どいてくれ!! あれは、千冬姉なんだよ!! 千冬姉だけのもを……あいつは!!」

「頭冷やせよ。お前、興奮しすぎだぞ」

俺は説得するように、ゆっくりと話す。少し落ち着いたのか、VTシステムばかり見ていた一夏がやっとこちらを向いた。俺は視線だけ動かしてVTシステムの方を確認する。奴は俺と一夏が問答している最中に、攻撃を仕掛けて来なかった。

そのことから、カウンター型に設定されているらしいことがわかる。

「それにな、喜久。俺はあんなものに振り回されてる、ラウラのことも気に入らねーんだよ。ISもラウラも、一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

俺は周りを見渡す。アリーナは騒然としていて、既に緊急用シャッターが閉まり始めている。そして、警報音と共に、緊急避難の呼びかけが始まった。

よく聞いていると、生徒と来賓がアリーナから出るように言われている。そして、教師達は騒動の鎮圧にくるらしい。俺は、一夏に笑って答えてやる。

「なあ、一夏。そんなに、あの黒いのをぶっ飛ばしたいか？」

「ああ」

「じゃあ、乗ってやるよ。そういうのは大好きだからな。俺がバツクアップしてやる」

一夏は嬉しそうに頷き、俺は両手に1丁づつ持っていたスナイパーライフルを高速切替で二刀流のブレードへと展開する。それを見ていたシャルルは、溜息を吐きながら一夏に呼びかけた。

「一夏、ISのエネルギーはどうするの？普通のISじゃ無理だけど、僕のなら変換して白式にエネルギーを渡せると思うよ。良けれ

「は使う？」

「ほんとかシャルル!？」

「その代わり約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。喜久もついてるからな、これで負けたら男じゃねえよ」

一夏が籠手のついている腕をシャルルに差し出す。

「じゃあ、負けたら喜久と一緒に、女子の制服で学校に通ってね」

「はあ!？おい待てよ、何でそうなる？」

俺は、慌てて抗議の声を上げる。何で俺はいつも、他人に巻き込まれなきゃいけないーんだよ。すると、シャルルが俯いた仕草でぼろりと呟いた。

「さっきから、下半身がズキズキするんだよね。喜久、なんでか知らない？」

「行くぞ、一夏!さっさとエネルギーを転送してもらえ!」

待ってくれ、そういうネタ振りの後でにしてくれよ。俺は一夏を慌てて促し、一夏はエネルギーをシャルルから転送してもらう。転送が終わると、俺は一夏にどう動くか指示を出した。

「俺があいつの一刀を止めてやるよ。その間に、一夏は止めを刺せ」

「ああ、頼んだ」

一夏が部分展開で零落白夜を発動させると同時、俺は一気にVTシステムに突っ込んだ。反発して振りぬかれるVTシステムからの一撃は、とても綺麗な剣戟の軌跡を描く。普段なら、避けきるのは難しいような剣速だ。

「俺を切りたきゃ、もつと早く振りぬくんだな!!」

俺は、ISTSを発動させて五感と同調率を強化する。そのまま両腕をクロスさせると、敵の得物と俺のブレードがかち合って青い火花を散らした。

俺の横を一夏が鋭い切り込みで飛び込んでいく。

「いえあ!!」

叫びの咆哮と共に、一夏がVTシステムの胸から下へと零落白夜を切り付けた。

飛び交う戦闘機が突然、視界内に入る。俺は辺りを見回そうと首を動かすが、まったく動いてくれる気配がない。俺はどこにいるんだ？ここはコックピットの中なのか？

泡が見える。世界は薄い緑色のフィルターが掛かり、泡はぶくぶくと下から上がりつつづけている。俺はそれを眺めながらガラスの外を見た。外では、同じようなタンクが並んでいた。

大人の軍人らしき人間たちと、同じようにライフルのスコップを覗いている。的に狙いを定め、的確に的を撃ち抜いた。そこで、俺は初めて理解した。これが、ボーデヴィツヒの記憶なのだと。

「遺伝子強化試験体C-0037、今日から君の名前はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

軍人の格好した男から名前を言い渡されている。：そうか、お前も俺と同じ側の人間だったのか。

織斑姉が視界に入る。外見は変わらないが、軍服を着ていた。

「……よくわかりません」

ボーデヴィツヒが何かに対して返答している。

「今はそれでいいさ。いつか日本に来ることがあるなら会

そこで、俺の視界が再びアリーナに戻る。まるで、ビデオのフィルムが一気に巻き上がったような感覚だった。俺が慌てて状況を確認すると、一夏がVTシステムから出てきたボーデヴィツヒを抱えようとしていた。

「終わったか」

俺は混乱したままで、ぼそりと呟く。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

ボーデヴィツヒに笑いかけながら話す一夏に安堵し、ISTSの反動で疲れが増したのを認識する。俺はもう、くたくただよ。いつの間にか到着していた教員がこちらにやってくる。俺はISを粒子化して、今の混乱した頭を整理しだした。

2 - 10 | 対話ノ時間

| 10 / |

現在、俺は1人でだるく感じる体を引きづりながら、ある部屋を指している。どうしてもやっておきたいことがあって、俺は体に鞭打ちながら移動していた。

目的の場所につくと、先客がドアから出てくる様子が遠巻きに見えた。タイミングが良いのか悪いのか、俺は出てきた織斑姉に呼びかけられる。

「市隈、何をしている？」

「見舞いですよ。そんだけ」

織斑姉は俺を一瞥すると、にやりと笑った。

「どうしてこうも、ラウラの見舞いに来るのがお前だとわな。いがみ合ってた割に、馬が合うのか？」

「それならそれでも良いですよ。俺にはどっちでも構いませんから」

ボーデヴィツヒに不意打ちをくらったのを思い出すが、今の俺にはまったく怒りなんてもんは湧いてこなかった。

「ほう、ちゃんと成長してるじゃないか。あまり時間をかけるなよ、相手は病人だからな」

「イエス」

織斑姉がツカツカとヒールを鳴らしながら去っていく。俺は軽くノ

ツクして目的の部屋へ足を踏み入れた。
俺が部屋に入ると、ボーデヴィツヒがこちらに気づいて話し掛けて来る。

「なんだ？ やられた私を笑いに來たのか」
「いんや。そうして欲しかったのか？」

俺の返答に、ボーデヴィツヒが嫌な顔をした。

「馬鹿をいえ。そんなことされて、喜ぶ人間がいるわけないだろう」
「ごもつとも。かけてもいいか？」

俺はボーデヴィツヒのベッド近くにあるパイプ椅子に座っていいか質問する。奴は少し迷ったようだったが、そっぽを向きながら俺の返答に応じた。

「好きにしろ」
「お言葉に甘えさせてもらうよつと」

俺は椅子を引いて座らせてもらう。そして猫背になりながら、両手を組んでぼそりとボーデヴィツヒに言葉を発した。

「コード0211って単語を知ってるか？」
「いや」
「じゃあ、中東で3年前に起きたISの暴走事故って言えばわかるか？」

瞬間、ボーデヴィツヒが驚いた顔をして俺の方を向く。

「なぜ、お前がそのことを知っている。あれは、アメリカが必死に

隠蔽工作をしているものだぞ。：まさか、関係者か？」

「いや、当事者だ」

ボーデヴィツヒの目が見開かれるのがわかった。俺は気にせず話しつつける。

「そして、加害者だよ。あの事故で暴走したIS操縦者ってのは、俺なんだ」

少しの間2人揃って沈黙した。やがて、ボーデヴィツヒがゆっくりと喋りだす。

「しかし、それでは私の知っている知識と矛盾する。資料では暴走したISは、そのままISのコア以外は抹消されたと記されていたぞ」

「それは、向こうがでっち上げたもんだよ。いつもそうだけど、表に出るものと本当のものは違う。現に俺は生きているし、こうして今もここにいます。這っても這ってもな、拭えない業を背負ってるんだよ」

ボーデヴィツヒは考え込むような仕草をして、頭の中を整理しているようだった。しかし俺の独白が腑に落ちないらしく、その疑問をぶつけてくる。

「なぜ。お前は、秘匿しておかなければならないことを私に話す？ひけらかして、語る内容ではないだろう」

「俺はな、ボーデヴィツヒ。お前と同じだよ。お前と同じ、試験管ベイビーだ。まあ、俺の場合は使い捨てのタイプだったけどな」

ボーデヴィツヒの過去を俺が知っていることに、奴はいきなり慌て

始めた。取り乱したといった方が正しいだろうか。

「待て！何で、お前は私の過去を知っている！？」

「まあ、最後まで話させてくれよ。相手の話はちゃんと聞くもんだろ？」

興奮しているボーデヴィツヒをしばらく宥めてから、俺は話の続きを口にする。

「そして、俺にはISとの同調を促すなんて能力もある。もちろん、代償はあるし負荷がすさまじいんだけどな。前にAICを無理やり破ったことがあるだろ？あれは、俺がお前の同調率に侵食したから出来たんだ」

まあ、あの時はぶつつけ本番で使ったんだけどな。正直、今でもよく成功したと思うよ。

「…そうか。いやしかし、そんなことが可能なのか？…だが、事実だからな。お前が持っている能力で、私の停止結界をキャンセルしたのか。しかし、それと私の記憶がどう繋がる？」

「一夏が、お前のことを助け出しただろ。俺は補助に回っててな。お前を止めるために、少しだけ能力を使用したんだ。その時、原因は不明だけど俺はお前の記憶を覗いた。不可抗力だし、見たくて見たわけじゃない」

俺が、ボーデヴィツヒの記憶をなぜ覗けたのかはわからない。だが、俺は相手の大切にしているものを盗み見してしまった。

「俺のエゴだけだな。フェアじゃなきゃ嫌だって感覚がある。ボーデヴィツヒが差し出したわけじゃないが、俺は何か返さないといけ

ないと思った。これが、お前の腑に落ちないことの答えだよ」

俺はそのために自分でリスクを犯す。だから、シャルルの時もそれに見合うものを差し出したつもりだ。俺が真剣な顔をしていると、ボーデヴィツヒは何がおかしいのか突然に大笑いし出した。

「ぷう、あはははは！！だあ、めだ、あはははははは！！！」

部屋中に笑い声が木霊す。何が、つばに入っただよ。俺はボーデヴィツヒのなにかに変なスイッチをいれたのか？

「いやあ、すまん。ひい、腹がよじれそうになった」

やっと笑いが収まり、ボーデヴィツヒは一呼吸置いて喋りだす。

「お前のエゴとやらにな、思わず笑ってしまった。理由を聞けば、フェアではないからと来たもんだ。まるで、子供の理屈じゃないか。随分と、リスキーな性格をしているものだな」

「ごもつともで。否定はしないよ」

「楽しませてもらった礼だ。今のことは、私の胸の内に閉まっておいてやる」

「感謝しますよ、お嬢さん」

ボーデヴィツヒが笑い、俺もつられて笑う。俺は和やかな雰囲気にならず浸かるような気持ちになった。

「私から、お願いがあるんだが」

おや、珍しいこともあるもんだ。

「なんでしょう？今だけなら、何でも聞いてやるよ」

「教官にもっと、誠実に接してはくれないだろうか？あの人は、私にとつての恩人であり憧れでもある。そしてなにより私にとっては、とても大切な家族のようなものなんだ」

家族に恩人ね。ボーデヴィツヒが本音で語ったであろう言葉に、色々なものが俺の胸辺りでぐるぐる回る。自分にも、もちろん家族のような人間がいるだけに、これらのキーワードは心によく響く。俺は一夏を大切にしている織斑姉を思い浮かべた。その中に、ボーデヴィツヒが加わる。三人は仲良く笑っていた。

「きつついこと、要求してくれるな。でも、俺にも血の繋がってない大切な家族はいるしな。できるだけ、努力はさせて頂きますよ。保証は出来そうにないけどな」

「そうして欲しい。できれば、保証もして欲しいのだから」

俺が苦笑いし、ボーデヴィツヒは小さく笑った。ふと、夕暮れ時の陽射しが無くなり始めたのに気づく。窓の外をのぞけば、夜の帳が降り始めているのが確認できた。

2 - 10 | 対話ノ時間（後書き）

読んで頂いている皆様、大変にありがとうございます。まさか、一週間も経たないうちに、ここまでランキング上位に食い込むとは思っていませんでした。自身が小心者なので朝に確認して驚愕してまい、挙句の果てに少しですが吐き気を起してしまいました。

感想で頂いております千冬さんの扱いですが、主人公を制御できる人で当てはめて書いてしまったために、あのような設定にしてしまいました。大変申し訳ありません。自身の中での主人公像は不良のような少年で、扱いの難しい生徒としていました。そうすると、教育者という立場から、千冬さんの中でこの生徒をどうやって育ていけば良いかということに発展します。その上で、千冬さんなら主人公に対してどこまでやって良いか、距離を測りながらやるようになるのかなと自分なりに目測を立てて文章を書いていました。

長々と書いてしまいましたが、理由としてはこのような感じになります。ご指摘を受けまして、オリジナル設定を変更しました。無い頭で考えるのですが、結局はISTSという設定を利用するくらいしか思いつきませんでした。これで、主人公の考え方に新しい方向性を植付けられたと思うのですが、どうでしょうか？

ここまでこの後書きを書くために、2話ほど一気に書き上げたので少し疲れました。なので、ペースを少し落とさせていただきたく思います。申し訳ありませんが、よろしく願います。

ここまでに、個人で感想を書いていただいた方へ。申し訳ありませんが、返信を少し待っていただけると助かります。後日、必ず返信いたします。

2 - 11 | 出サレタ答エ

| 11 / |

夕食を食べ終えて俺が自室に帰ると、シャルルは外出中みたいだった。

眠い。そう考えながら明かりも点けずに、そのまま着替えることもなくベッドへと倒れこむ。ひんやりとした感触が、無償に気持ち良い。そう思っていたら、ふいにノック音が聞こえた。

「市隈君、いますか？」

「開いてまーす」

もう、動く気力が残ってないので返事だけする。すると、山田先生がなにより嬉しそうに入室してきた。

「良いお知らせがあります！！なんと、今日から男子の大浴場が使用解禁です」

「あっそお」

心底どうでもいい。俺は適当に返事して、顔をベッドに埋める。すると、俺から返ってきた冷たい反応に、山田先生がおろおろし出した。

「そんな！織斑君はものすごい喜び方をしていたのに…」

「俺は睡眠と惰眠の方が幸せですから」

「そんなこと言わずに、せっかくなんですから。勿体無いですよ、ね？」

なんで、そんなにしつこいんだ。こっちは、今すぐ寝たいんだよ。自分のやりたいことを阻害されて、俺はいい加減イライラしだした。

「勿体無いのは、俺の時間が今現在も先生に一秒ずつ削られ続けていることですから」

「そこまで拒否しなくても…」

山田先生が、その場で打ちひしがれたように座り込む。違うんだ、こっちは座るんじゃない、無くて、この場から立ち去って欲しいんだよ。しょうがなく、俺は頭を切り替えて意地悪な質問をすることにした。

「山田先生が、一緒に入浴してくれんなら入ります」

「…え、そんな」

山田先生が、その場でフリーズした。おいおい、そこは即座に否定して早く退室してくれよ。10秒くらいした頃だろうか、再び山田先生は始動して立ち上がった。

「それはいけません！！市隈君、一体何を考えているんですか！！」
「エロいこと」

怒ってもまったく迫力を感じない。そして、俺の回答に山田先生は力なく壁に持たれかかった。

そのまま、なにやらブツブツと独り言を呟きだす。

「織斑先生、私には教師には向いていないのでしょうか。私には、大事な生徒を育てる力が無いのでしょうか。どうせ私なんて」

末寺の坊さんが唱えるお経のように、山田先生は永遠に何かを呟き

続けそんな雰囲気醸しだしている。勘弁してくれ、泣きたいのはこっちだよ。大体、風呂一つで何でそんなに大事へ発展するんだ。俺はしょうがなく風呂に行く旨を伝えて、山田先生を納得させつつ部屋から退出してもらった。

――

山田先生をフリーズさせたように、今度は俺が大浴場の脱衣所でフリーズしていた。

おいおい、これはどういうことだ。なんで、一夏とシャルルと一緒に風呂入ってんだよ？お前らはそういう関係に発展してたのか？

そう考えたが一夏のことを思い浮かべ、それは無いだろうなとシャルルが哀れに思えた。

さて、どうするか。俺は、このまま立ち去るべきだろうと考える。

それが、あの2人にとって良い結果に繋がる筈だと思うからだ。

しかし、良い気分でアップの後は、それがダウンの落ちに繋がらないと面白くない。俺は、少し考えた末に、軽く悪戯を決行することにした。

2人の脱衣籠を確認する。そこにはきちんと畳まれた衣類があった。2人とも律儀だ。俺は両方の下着だけを交換して入れ替えた後、脱衣所のドアを挟んで反対の廊下側に退避する。

後は、どちらかの悲鳴が上がるのを待つだけだ。

「きゃああー！」

俺が廊下に出て15分ほどたった頃、シャルルの悲鳴が上がった。

「シャルロット大丈夫か！？うおっ！！」

すると、今度は一夏の声が聞こえる。あーあ、中が覗けたら面白いのにな。しかし、一夏め。確認するなら、浴場からガラスドア越しに安否を聞けばいいのに。最後の驚きは、間違いなくドアを開けちまった声だな。

「ぎゃあああ！！！！一夏のエツチイ！！！！」

「違う、待ってくれ！！俺はただ悲鳴が聞こ、ぐぼああ！！」

シャルルのすごい叫び声が聞こえ、次いで一夏のいいわけと何かに悶絶した声が聞こえた。

なんか、予想より被害がでかくなってるな。まあいいか、俺は関係ないし。

さて、そろそろ退散した方がよさそうだな。俺は壁に寄りかかるのを辞めて、ゆっくりと廊下を歩き出した。

しかし、シャルロットてのは、シャルルの本名か何かだろうか？

――

俺が部屋で寝ていると、雑なドアの開閉音が聞こえてシャルルが入ってきた。

「……うう。もう、一夏の馬鹿あ」

なんか、半泣き状態だな。それしたのは俺だけど、言ったら後が怖そうだな。そう思っていたら、ぱたりと倒れこむような音がした。

衣類の擦れる音がして、シャルルがベッドに潜り込んだのがわかる。

「喜久、起きてる？」

「ん？」

俺はシャルルの声だけを聞きながら、とりあえず起きてることを知らせる。

「大事な話があるんだ。一夏には、もう話したことなんだけど」

シャルルの声が室内に響く。俺はまどろみの中で眠りかけの頭を起した。

「僕の本当の名前。お母さんがくれた大事なもの」

「わりい、眠いんだ。明日じゃ無理か？」

「え、ああ。ごめんね。そうだね、もう遅いよね」

俺はそういつて、視線を机の方へ向ける。シャルルのISが待機状態のアクセサリーで置かれているのを確認すると、安心してもう一度布団に潜り込む。シャルルは静かに言葉を喋った。

「喜久、お休みなさい」

「ああ。お休み、シャルロット」

きつと、部屋は時間が止まったような空間になったに違いない。シャルルからは、ピシリと何かで頭に輝を入れられているような音が聞こえた気がした。

「…なんで知ってるの？」

これは、断じて名前の確認でないのがわかる。俺は起き上がって、顔が真顔になっているシャルルをみた。

「だって、脱衣所には俺も入れるだろ？」

「まさか、いや、そっか。あは、頭が混乱してて、全然思い浮かばなかったよ」

シャルルの視線がゆつくりと、ある場所へ移動するのがわかる。もちろん、俺はその場所を知っているから安心だ。俺はベッドから飛び起きると、机のところまで素早く移動した。

そして、シャルルのIS待機状態のアクセサリーを掴み取る。シャルルが一拍遅れで動いた為に、すごく悔しそうな顔をした。しかし、そのあとはまた笑顔になる。

「フフ、ウフフ、ウフフフフフ」

乾いた笑いが木霊する部屋は、何か異質な空間を連想させる。これは壊れたな。俺は急いでドアを蹴り開けると、そのまま全速力で廊下を走り抜けた。

「喜久ああ！！！！絶え、対にい、許さないからああああ！！！！」

後ろでは怒りが頂点に達したシャルルが、猛然と追いかけてくる。結局、この鬼ごっこはシャルルが力尽きるまで続いた。

／＼／

朝、シャルルに先に教室へ行ってほしいと言われて、俺は自分の席

で欠伸をかみ殺している。

「なあ、喜久。なんでお前の片目辺りに青タンができてんだ？」

「シャルルに昨日ぶっ叩かれたんだ。まあ、原因は全部が俺だけだ」

本当は一夏にも殴られそうだが、二度も殴られたくないので黙っての方が良さそうだ。

「今度はシャルルさんに何をしたのです？」

「いや、軽くからかったら仕返しされただけ」

「数少ない男性同士なのでから、喜久さんはもっと仲良くすべきです」

ああ、そうだね。俺はセシリアに窘められて納得する。まあ、今後は寝不足になるのは避けたいから考えて行動しよう。そうこうしている内に、チャイムが鳴ってホームルームの時間が始まる。

山田先生は挨拶を終えた後、視線を彷徨わせながらたどたどしい説明を開始した。

「えー、今日は皆さんに転校生を紹介しますというか……既に知っているんですが。そうぞ、入ってきて下さい」

「失礼します」

そう言って入ってきたのは、女子の制服を着ているシャルルだった。電子ディスプレイにはシャルロット・デュノアと表示されている。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しく願ひします」

俺は思わず、心の中で笑ってしまった。そうか、自分なりに考えた

答えが出たのかと。俺がそんなことを考えていると、クラスは突然すごい勢いで騒ぎ始めた。

「ちょっと待ってよ！じゃあ、今まで市隈と一緒に大丈夫だったの！？」

「あんた、シャルロットさんに変なことしてないでしょうね！！」
「いんや、だったら既に俺は退学してるから」

俺は慌てずに答えて、セシリアの方を見る。セシリアはよく俺の部屋に入り浸っていたので、大丈夫なことを知っている。現に俺の方を見て、今もにこにこ笑っていた。それを見た女子達は怪訝な視線を向けるが、大丈夫なのかもといった表情だった。

「それより、昨日って男子が大浴場を使ってなかったっけ！？」

そんな誰かの声が聞こえた瞬間、セシリアの顔が一気に変化する。

「喜久さん！！」

「俺はそれもノータッチだ。シャルルと一緒に入ってたのは一夏だけだし」

「おい、喜久！なんでお前が昨日のことを知ってた！？」

セシリアは安堵し、一夏は叫びながら傍と昨日の答えを見つけたらしい。ものすごい顔で俺を睨み始めた。

「この野郎！！犯人はお前かあ！！！！」

「おい、一夏。ドアの外と篠ノ之は良いのか？」

ドンッ！！

すると、一夏はぞつとしながら突然の衝撃音が鳴った方を向く。それは怒りに任せて登場した凰が、ISを展開しながら叫び声を上げているところだった。

「うー夏あつー!!」

そして、いきなり衝撃砲を一夏に向けて発砲した。いや、流石にそれはありえないだろ!!

すぐに惨劇が浮かんだが、その光景は意外なところからの助けで免れた。それは、寸でのところでボーデヴィツヒがIS展開してAICを発動、凰の衝撃砲を防いだからだった。

「助かった!! ありがとうなラウラ。むぐっ!？」

うわ、ボーデヴィツヒって、やることなすこと大胆だよな。奴は一夏の顎を掴むと、いきなりディープキスをした。

「お、お前は私の嫁にする! 決定事項だ! 異論は認めん!」

前言撤回、ボーデヴィツヒはまさに強引の権化だった。

「嫁? 婿じゃなくて?」

戸惑った一夏が、俺も思ったことを聞く。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

そんなもん、この国のどこで言っても通用しねえよ。あいつは誰に騙されたんだ?

俺は知恵を分け与えた奴が、ボーデヴィツヒを不幸にしていることに気づいているのか理解に苦しんだ。

教壇を見れば、既に状況についていけない山田先生がおかしな笑いを発し始めている。可哀想に、こうなると場の収集は織斑姉だけが頼りだな。

「あんたねええっ！！！！！」

凰が叫び、再び衝撃砲を放とうとしている。一夏は逃げ惑うが、奴の刺客は次々と現れた。

恐ろしいことに、セシリア以外の専用機持ち達がどんどんISを展開していく。あいつ本当に死ぬんじゃないのか？

見れば、シャルルもといシャルロットも同じようにISを展開していた。しかしすごいな。これで今現在展開してる全員が暴れたら、この校舎自体が崩壊するんじゃないのか？

俺は歯止めの利かない状態に、深く溜息をついた。

しょうがねーな。これで昨日の貸し借りは無しだぞ、一夏。俺は両手でメガホンを形作ると、入学日以来で久しぶりに織斑姉の声を真似る事にした。

「この、馬鹿者どもが！！今すぐISを解除しなければ、お前ら全員夜まで廊下に立たせるぞ！！！」

クラス全ての人間が、全員ビクウ！といった感じで声の発生源を探し始める。ISを展開していた人間は、神の一声を聴いたかのようには恐れ慄いていた。

織斑姉の声は絶大的な効果だ。これなら本人が来るまでは、問題なさそうだな。

俺は席でだらりすると、窓の外を見る。天気は快晴で、太陽は眩しく輝いていた。

2 - 1 1 | 出サレタ答エ（後書き）

小説をお読みになって下さっている皆様、大変ありがとうございます。

今回読んでくださった方の中に、私に気楽に投稿してくださいと言って下さった方がおられました。感謝をどういった形で返せばよいか考えた末、10日後に投稿しようかと思っていた次話を感謝の思いとして投稿させて頂きます。稚拙で、文章力の無い小説ですが宜しくお願いします。

追記： 2 - 1 2 - 4 } 2 - 1 0 を修正しました。

3 - 1 | 買イ物ノ時間

| 1 / |

「起きてくれ喜久、喜久」

揺すられてる？

…誰だよ。俺は無理やり起こそうとする奴にイラつきながら、目を開けた。

まだ外が暗いじゃん、夜明け前に何やってんだよ。だいたい、今日は休みなんだから寝かせるよ。ん？

口元辺りになんか当たって

「！？むぐっ！！」

「落ち着け。静かにしてくれないか、横で寝ている一夏が起きてしまっ」

視線だけ動かして、俺は同室の一夏が幸せそうに寝ているのを確認した。

口を塞がれて言葉が出せない。俺の目の前には人差し指を口に当てながら、こっちに顔を度アップで近づけて見ているボーデヴィツヒがいた。

おい、なにやってんだ…。

俺が冷静さを取り戻したのを確認すると、奴はすごいことを要求してきた。

「お、お願いがある。私の部屋で時間まで寝てくれて構わないから、今だけ部屋を交換してくれないか？」

ボーデヴィツヒは恥じらいながら言っているが、行動が大胆すぎて可憐さが微塵も感じられない。というか、もはや常識がぶっ飛んでいる。恋が人を盲目にするのはわかるけど、これは何か違う気がした。

大体さ、お前どこからこの部屋に入ってきたんだよ？ボーデヴィツヒが俺の口から手を外す。俺は口元に自分の手を平たくして当てると、一夏に聞こえないようにする。そのまま、ボーデヴィツヒと互いに小声で会話を交わす。

「鍵はかかった筈だけど？それと、夜這いのパターンがなんで逆なんだよ」

「入り口のドアはピッキングした。私の技術にかかれば、あの程度は造作も無い」

おい、それ犯罪。そして、絶対に威張ることじゃない。しかも、自慢げに語るな。俺も屋上こじ開けたから人のこと言えないけど。

「だいたい、同室のシャルロットには許可取ってんのかよ？」

取ってるわけないだろうな。ボーデヴィツヒは心配すると言った表情で、さも当たり前のように話す。

「あいつなら、思考が柔軟だから大丈夫だろう」

やっぱりか。なんだ、この絶対君主は……。理由が余りにも酷すぎる。言われた通りに実行したら、きっと俺と同室してた最後の一夜みたいなことが起きるに違いない。俺は溜息を一つ吐いて、しょうがなく従うことにした。

「いつもは、篠ノ乃が一夏を起こしに来る。その時間まで、俺は席を外させてもらう。これでいいか？」

「それで構わない。ありがとう、喜久」

感謝するなら、寝かせてくれよ。今度は進入されないように鍵を5重ロックにしてやろうか。でも、お金も馬鹿にならなそうだし、こいつはそれでも平気で突破してきそうだ。

俺は適当に服を着て歩いていくと、廊下側のドアに手をかける。後ろを振り返れば、手を小振りにする可愛いしぐさのボーデヴィツヒがいた。

いつもそうしてりゃいいのに…。

しょうがない。一階の入り口近くにあるロビーで、朝刊の新聞でも読んで時間潰すか。俺は一人ごちりながら部屋を後にした。

／＼／

「何で教えてくれなかったんだ。俺はお前のことを恨むぞ、喜久」

一夏が酷い顔をしながら、俺のほうを見る。あの後、俺が部屋に戻ると篠ノ乃が一夏を攻撃してサンドバッグにしていた。傍目から見て、痛々しい光景がそこには広がっていたのだ。

「俺だって被害者だ。文句は絶対君主に言ってくれよ。だいたい俺だって、起きたときには首に軍用ナイフを当てられてたんだから」

「う、それは嫌だな」

一夏は青い顔をして納得する。まあ、ナイフは嘘だけだな。

俺は現在電車に乗って、買い物に出かけている。一緒に行動してい

るのは俺たち二人の他に、セシリアとシャルロットだ。

「へえ、一夏。そんなことがあったの。道理で、起きたらラウラが部屋に居ない筈だね。僕は、理由がやっとわかったよ」

「待ってくれ！俺は被害者だ！！」

「そうだぞシャルロット。例えばボーデヴィツヒの裸を見ても、一夏が被害者だ。俺は一夏を擁護する。ちなみに俺は、ボーデヴィツヒがシーツを体に巻いてたのしか見れなかったけどな」

俺が爆弾発言を放り込むと、一夏が顔を勢いよく俺の方に向ける。セシリアは俺の発言に対して、顔が面白いように変化していた。前半の言葉で怒り、後半の言葉で安堵している。

「喜久！！それは擁護になってねえぞ！！」

なんだよ、裸は適当に言ってみただけなのに当たりかよ。一夏の奴は幸せ者だな。

「一夏、二人で話をしようよ。そうだな、人の少ない車両へ移動しようか。もちろん、付いて来るよね？」

俺の知っている中で、シャルロットが一夏に最大級の笑顔を向ける。そして、完全に目から光を失っていた。

「覚えてろよ、喜久！！」

「安心しろ一夏、骨は拾ってやらんから」

一夏は苦悶の表情でシャルロットに連行されていく。哀れだな。それにしても、4時起きのせいで眠い。何で俺まで買物に付き合わなきゃならないんだ。セシリアめ、強引に連れ出しやがって。

「喜久さん、今日は一日楽しみましょう」

俺の対面でセシリアが嬉しそうに笑っている。俺は楽しく寝たいんだよ。

「買い物ってなんだっけ？」

「私、水着を新調したいんですの」

ああ、臨海学校用ね。俺はあるから買わんけど。

「セシリアはスタイル良いもんな。普通に海に行ったら、男を選び放題だろうな」

「まあ、それは本当ですか！！！」

俺が言った言葉に反応し、すごい幸せそうな顔をしている。言葉の威力ってすごいな。言うのやめときゃ良かった。

「本当だよ。まあ、俺はもっと大人の女性が出す、魅力みたいなのがあった方が良くいけど」

「ぐうっ！！！」

セシリアは、頭に漬物石が落下したような声を出した。その場でどんよりと沈み込こむ。そして、色あせたフィルムのようになる。

「フツ。どうせ、私はまだ子供ですわ。く、しかし、いつか必ず振り向かせて見せますから」

発される言葉を聞いてると、なにやら自己完結したらい。悔しそうな表情をしている。

「まあ、そんなに捻くれるなよ。今日は最後まで、ちゃんと買い物に付き合うから許してくれよ」

「それは、当然です」

「はいはい」

俺は適当に手を振って答えた。

――

目的のアウトレットのような場所に着くと、俺たちは女性用水着売り場の店に入って行く。入店しているのは、女性かカップルしかない。これは、男が一人で入ると浮くな。まあ、IS学園もそんな感じか。そして、今現在の俺はといえば、盛大に気分が萎えていた。

「喜久さん、これなんてどうですか？」

「うゝん。右の方が見栄えいいけど、左はセシリアらしさが出てるんじゃないのか？」

セシリアが2着の水着を持って、俺に選ぶよう聞いてくる。

「ありがとうございます。でも、ちょっと色が私好みではないのですわよね」

しかし、また何かに悩んだようなしぐさをして他の水着を選び始めた。

かれこれ、こんなやり取りを30分程繰り返している。セシリア、なぜ俺に聞いてからまた商品を戻して他を取り出すんだ。お前は俺

に聞く必要があるのか？

女性の買い物は疲れる。不毛なやり取りでストレス溜めるなら、俺は2度と一緒にいかないぞ。

「なあ、俺少し疲れたから外のベンチで休んでて良い？」

「ええ！？今日は一緒に最後まで付き合ってくれと、仰ったではありませんか！！」

「俺は限界値を超えました。お願いですから休ませて」

セシリアの制止を振り切って、店の外にあるベンチに座る。セシリアは、「まったくもう！！」といった感じで再び水着を選び始めた。ゆっくり外から店の中を覗くと、シャルロットが突然に一夏を試着室に連れ込んだのが見えた。

今朝のボーデヴィツヒも大胆だったが、あいつも感化されたのか？

「市隈、こんなところで何をしている？」

「あ、織斑先生。お疲れさんす」

声のした方へ顔を向けてみれば、織斑姉と山田先生がいた。ボーデヴィツヒと約束したあの日から、俺は織斑姉を織斑先生と呼び、悪態をつくのをやめている。織斑姉は最初に言われた時は驚いていたが、今はもう当たり前になっていた。

「まさか、女性用水着で臨海学校に参加する気か？」

「それこそまさかでしょう。俺は、単なる付き添いです。そして水着選定の不毛な会話に付き合わされて、今は休憩中ですよ」

遠巻きに、セシリアを手で指して答える。すると、教師の2人は俺に同情したような苦笑いをした。

「市隈、覚えておけ。女はな、別に男に選んで欲しいわけじゃない。結局は自分が気に入ったものが見つかるまでは、探し続けるんだ。良い勉強になったな」

「良く覚えておきます。絶対に忘れないし、次から女性との買い物はごめんです」

「それじゃ、私と山田先生もここに用があるんでな。失礼する」
「あい」

俺は軽く手を振って見送った。

そして、ことの事態に驚愕する。あれ！？一夏って、まだシャルロツトと試着室から出てきてないよな？

織斑姉が水着を選びながら、どんどん一夏たちの方へ近づいていく。これは、二人して終わったな。俺は両手で合掌したあと、自動販売機に向かうために立ち上がった。

――

今日は適度に動いたな。俺は歩きながら大きく欠伸をする。

一夏とシャルロツトが山田先生に怒られてから、昼飯を食べて帰宅のためにアウトレットの出口に向かって歩いている。ついでに後をつけて来ていた凰が合流していた。凰と一緒にだったボーデヴィツヒは残って何かしていくらしい。

「なあ、喜久？」

ふいに一夏に声をかけられる。

「ん？」

「あの前方で手を振ってる人って、お前を見ながらみたいだけど。知り合いか？」

足が動かない。全身が凍りついたように歩みを止めた。

俺は頭の中で大混乱を始める。前方には、もう俺の前には3年間現れないと約束した人間が立っていたからだった。

…ニコル。何で、お前がここにいる……！！

俺はできるだけ平静を装って、混乱しながら口を開く。

「ああ、ありがとうな一夏。アレックスは俺の知り合いだ。悪い、なかなか会う機会が無いから、ちよつと先に帰っててくれないか？」
「え、でしたら私、アレックスさんに挨拶をしたいのですが」

やめろ！絶対に駄目だ……！！

「電車乗って戻ったら良い時間だろ？早く帰宅した方が良いよ。今度時間が会ったらみんなに紹介するからさ」

俺は、無理やりにみんなを促して帰らせようとする。殆どが納得したが、一人だけ例外が出た。

「喜久、汗かいてるよ？」

シャルロットに言われて気づく。冷や汗が出てるのかよ、そんなもん今の俺には麻痺しててわかんねえんだよ。

「ああ、ちょっと暑いよな今日って」

「今は曇りでそんな暑くないよ?」

お前は、勘が鋭すぎんだよ!!

「だってさっき、俺はホットコーヒー飲んだろ?だから汗が出たのかもな。みんな悪いけど、俺ちょっと会ってくるから。待つ必要なんてないからな」

俺はみんなと別れて、ゆっくりと小走りに走っていく。目的の人物の前に止まると、そのアメリカ人は嬉しそうに手を振った。

「やあ、サーフォ君。悪いが少し付き合ってくれるかな?」

30代の細身の金髪男性。サングラスにスーツを来たニコルは、俺に背を向けてゆっくりと歩き出した。

3 - 2 | 偽者への警告

| 2 / |

一夏たちと別れて、俺は別行動している。現在、カフェテリアで俺とテーブルを囲っているのは、俺がIS学園に入る原因を作った男だった。CIAの人間、ニコル。アノイは足を組みながら俺のほうを見ている。

「今日は天気も良いね。僕はね、スキューバダイビングが好きなんだよ。今が仕事中心じゃなきゃ、海に潜っていたいね」

「俺はお前の趣味なんて聞いちゃいねえ」

俺は舌打ちをする。

「それにしても、サーフォ君はもてるみたいだね？座ったらどうだい、お嬢さん？そんなところに立ってても、疲れるだけだろ」

俺は心臓が跳ねた感覚とともに、勢いよく後ろを振り向く。そこには、息を切らせているシャルルが立っていた。

馬鹿やるうが！！俺は先に帰れって言っただけだぞ！！

「はっは、はあ。喜久！！」

俺は辺りをぐるりと見回す。一般人に偽装してる人間を見つける技術なんて、俺には持っていないんだ。目の前にいるクソ野郎の部下はどこに、どれだけの人数がこの場にいる？

くそ！！！！

「喜久、大丈夫？」

「一夏たちはどうした？」

「乗り込んだ発射寸前の電車からぎりぎりでホームに飛び出したから、誰も追ってくることは出来ないよ。いるのは僕だけ」

「…わかった。シャルロット、俺の隣に来て座れ」

俺はシャルロットを座るように促して、隣に座らせた。そして、シャルロットが選択肢を間違えたことを伝える。

「シャルロット、お前の心臓の辺りを見る。ゆっくり見て、絶対に騒ぐな。俺がお前を絶対に守ってやるから安心してろ」

「え？」

シャルロットは自身の体に視線を走らせて行く。ゆっくり心臓辺りに持っていくと、明らかに服装と関係ない小さな光が輝いている。そこには死神が鎌を振り下ろす寸前のように、赤いレーザーサイトの点が4つ程うつすらと浮かび上がっていた。シャルロットを狙っていることを認識させると、その斑点はすっと消滅した。

ISの待機状態のアクセサリを持ち歩いていない俺と違って、シャルロットはいつもそれを普段から持ち歩いている。ISは強い。が、それは展開後の話が前提になる。銃器類から放たれる弾丸のスピードとISの展開速度はどちらが速いか。それは、明らかに前者だ。

シャルロットは今の状況を理解したらしく、俺の顔を怯えたように覗き込んだ。それに対して俺は精一杯、笑い返してやる。

「今日は、帰ったら面白い話を聞かせてやるよ。だから、お前は怯えずにリラックスしてればいい」

「…わかった。僕は喜久を信じる」

シャルルは覚悟を決めて、自身の手を俺の手の上に被せて強く握った。

「話を進めて良いかい？お嬢さんが変なことをしなければ、万事丸く収まるんだよ。この意味がわかるね？」

ニコルはコーヒーのカップを持って中身を啜ると、サングラスを外して俺を見る。白人独特の青い目が俺を見据えた。

「この国では割と融通が効くことがあるんだ。今のは米軍基地の知り合いに借りたものだけだね。なかなか、良い演出だろ？」

嬉しそうに語ると、トントントンと奴は指でテーブルを叩く。

「今日はね、サーフォ君にとっても良いお知らせを持ってきたんだよ。ところで、そのお嬢さんはどこまで君の事を知ってるのかな？」
「数少ない理解者だ、それで説明は足りんだろ。もったいぶつてないで、用件だけ言えよ。また、前みたいにあんたの部下を半殺しにするぞ」

俺が答えると、ニコルはピューイツとにやけながら口笛を吹く。余裕の態度で挑発すんじゃないやねえよ、クソ野郎が。

「そう熱^いくなよ、少年。老けるのが早くなるぞ？そんなことしたら、君の大事なもので失う可能性が出て来るかもな。もしかしたら2秒後には、ここに少女の遺体が転がってるかもしれない」

「…もう一言、余計なことを喋ってみろよ。そしたら、俺は迷わずお前の首を全力でへし折りに行ってやる」

ニコルの口から、身近な知り合いに危険性が出ることを示唆されて、何かが切れそうになる。俺の感情は、既に破裂しかけていた。

「もっと、余裕を持たないと世の中渡っていけないぞ？じらすのも可哀想だしな、そろそろ教えてやる。軍の依頼主がな、CIAの幹部を突つつき始めた。君をね、いつまで探してるんだってな。要は、いつまでたっても出てこないサーフォ君の情報にお冠なんだよ。上司は君のことを報告するか迷ってるみたいなんだな。一応それを教えといてやろうと思ったのさ。まあ結局のところ、CIAはIS学園との摩擦を望んじやいないから、3年は君を泳がせていたいところが正直な考えだ」

「どうだ良い情報だろう？」と、ニコルは手振りを交えながら俺に説明する。喉がごくりと鳴った。俺は自身が冷や汗と、極度の緊張に陥っていることに気づく。焦点がばやける。ズツと椅子がずれる音がすると、ニコルが立ち上がったのに気づいた。

「今日はそれだけを伝えに来たんだよ。ここは僕の驕りだ。この後は、可愛いお嬢さんと楽しいデートを楽しんでくれ。それと、僕が君たちの視界から消えるまで、おかしい事はしない方が身のためだよ？それじゃあ、サーフォ君。良い休日を」

1万円札が一枚テーブルの上に置かれる。ニコルが歩き出すと、俺は奴が視界から消えるまでずっと見続けた。

ニコルが完全に見えなくなると、テーブルの上に赤い斑点が点滅するように現れる。それはモールス信号で言葉を伝えてきた。

コドモ ヲ オドス ノ ハ シュミ ジャナイ ワルカタナ

ダンッ！！

俺は勢いよくテーブルを叩く。カップが宙に放られ、そのまま落下して割れる。周囲に居た客がみんな俺の方を向いた。

クソクソクソ！！なめやがってえ！！！！

「喜久、落ち着いて」

背中に何か感触が当たる。俺は、シャルロットが後ろから抱きついたことに気づいた。

「僕は喜久に守られた。だからここに居るの」

「だからどうした。俺は……無力だ。結局、誰も守れない。だから、母さんは死んだんだ」

大嫌いなISに頼ったって、搭乗時間には限度がある。エネルギーが切れたら、そこで終わり。俺の能力もリスクだらけの諸刃の剣だ。今、この場でシャルロットが死んでたかもしれない。下手をしたら、大切な姉さんも殺されてたかもしれない。視界が滲んでいく。堰を切った感情を止めることが出来ない。

シャルロットが、俺の体をさらに強く締め付けてくる。

「聞いて喜久。僕はね、ずっと迷ってたことがあるの。でも、決めたよ。僕は貴方に付いて行く。一人が辛いなら、僕と一緒に居てあげる。喜久は一人じゃないの、だから泣かなくて良い」

俺とシャルロットは、しばらくの間そこから動くことは無かった。

3 - 2 | 偽者への警告（後書き）

いつもお読みになって下さっている皆様、大変にありがとうございます。昨日は知人と外で会い、お酒を4ヶ月振りに飲んだために気分が良くなりました。

そして、遊びながら2話ほど一気に書き上げました。

感想を書いてくださっている皆様の反応で、冒険してみますと一人の方に返信いたしましたので、シャルルを主人公側につけました。次の更新は間を空けまして、来年からにしたいと思います。宜しく願っています。

それでは、皆様良いお年をお過ごし下さい。ありがとうございました。

3 - 3 | 車内ノ3人

| 3 / |

『かはっ………』

『アイリア!!』

いつもの悲しげそうにしてる方の女が叫び声を上げる。なんだ、たかだか一人が死んだだけじゃないか。なんで、そんなに叫ぶ必要があるんだよ。

僕は、ブレードを相手の頭に貫通させて突き刺していた。肉の焼け焦げる匂い、そしてびくびくと体が動いている。跳ねてる魚みたいだな。

気持ち悪い動きだ、こんなのいらないや。

腕を振ってブレードから死体を抜くと、息をするのを止めた女が地上に落ちていく。雑魚キャラにはお似合いだ。やっぱり、やられたら落下しなきゃね。

『サーフオ。あ…あなたはあああ!!!!』

残りの女が叫びながら突っ込んで来た。僕は愉快でしょうがない。足枷がやっと消えたんだ。だから、もう何にも縛られない。

「あははは、大丈夫だよ。お前も直ぐに、殺してやるから」

『あああああああ!!!!』

僕はISTSを発動させて、直ぐに力を底上げした。ほら、そうすると相手が蚊みたいな動きになるんだ。瞬間加速で一気に加速して、
イグニッション・ブースト

女に突撃する。

相手はブレードを二刀流にして振り抜いてきた。僕もわざと、それに合わせて切り結ぶ。激しい光が、フルフェイスのマスク越しに見えた。

『くう！！』

「じゃあね」

僕は、それを弾き飛ばし、イグニッション・ブースト瞬時加速で一氣に間合いを詰めなおす。そしてそのまま相手の絶対防御を突破して、お腹にブレードを貫通させた。

「馬鹿だね、手の内が丸見えなんだよ。僕にブレードの使い方を教えたのは、アンタじゃないか」

腹を貫かれた相手が、ゆっくりと震えながらこっちの方に手を伸ばす。そして、僕の頬を一撫でした。

『サー、フオ。ご、めん、なさい』

「あああああ！！！！」

俺は叫び声を上げてベッドから飛び上がると、そのままトイレに駆け込んだ。

「うう、げえ！うばあ！！」

今日食べた物が一氣に逆流して、それを便器の中に流し込む。酸っ

ばい味が口の中に広がった。

「うう、かは。はあ、はあ……」

吐ききつたのを確認してから、ゆっくり立ち上がって備え付けの洗面台で口の中をゆすぐ。やっとのことで落ち着くと、適当にその場でもたれかかった。

久しぶりに、最悪な夢だ。…いや、過去の業か。

「おい！大丈夫か喜久！！」

騒ぎに気づいた一夏が、慌ててトイレに駆け込んでくる。俺は軽く手を振って答えた。

「大丈夫だよ。起こして悪かった。ちょっと、悪い夢を見たんだ。ほんとにそれだけだから」

「本当に大丈夫なのか？」

お前は俺と違って優しいな、一夏。

「ああ。だから俺のことは気にしないで、先に寝てくれ。俺も直ぐに寝るからさ」

一夏は落ち着いた俺の様子を見て、安心してからベッドへ戻って行く。

きつと、ニコルに会ったから、久しぶりに思い出したのかもしれない。

俺はもう一度眠るために、ゆっくりと立ち上がった。

ニコルに忠告を受けたあの日から数日が経った。俺はニコルが去った後で、感情が制御できなくなり。その場で心が折れそうになったが、シャルロットの言葉に救われて何とか留まれた。

それは同時に、シャルロットから俺への好意の告白でもあった。来週から臨海学校が始まる。そんな数日前、俺はある場所から連絡が来て、現在その場所へ向かっていた。平日の真昼間なので、普段なら教室の机に座って勉強している。が、外出許可をもらって、3人で目的の場所へ向かっていた。

俺は今、一緒に付いてきた2人のせいで、頭を抱え始めている。それは、学園が出てきてくれているセダン車の後部座席で、件の2人が言い争っていたからだった。

「なぜ、シャルロットさんが一緒に付いて来るのです？ 貴方は、一夏さんがお好きだったのではありませんか？」

「セシリア、僕は一言もそんなことを言った記憶はないよ。それに、授業を抜け出すのは良くないんじゃない？」

「それは、貴方が喜久さんに付いて行こうとするからです。貴方こそ、勉学に支障をきたすのではなくて？」

「一日くらい遅れても、僕は平気だよ。それに、セシリアよりも僕の方が座学は順位が上だよ？」

まるで、磁石の反発みたいだ。俺は困った顔の男性運転手に頭を下げ、サイドシートから顔を後部座席の方に向ける。

「…頼む。運転手の人が苦笑いし続けてるから、そこから勘弁してくれ」

織斑姉め、何で笑いながら2人の外出許可を出した。俺は、あんたの笑顔が悪魔に見えたぞ。この日、俺は初めて一夏の苦しみを違う意味で理解した。

女性は三人揃えば姦^{かしま}しいなんて言葉がある。冗談じゃない、2人になった時点でもものすごいうるさい。そして、俺の言葉は聞き入れられることはなく、既にヒートアップしていたセシリアが噛み付いてくる。

「だいたい！あの電車で、シャルロットさんが飛び降りていくなんて。くう、まさかそんな手を使うだなんて…」

セシリアが、やられたと言った感じで目つきが鋭くなった。

いや、それで正解なんだよセシリア。あの時は、絶対に来ちゃいけなかったんだ。だから、お前はそれで良かったんだよ。見れば、俺と同じようにシャルロットも少し表情が硬くなっていた。

「とにかく、私は喜久さんに付いていきます。これ以上、シャルロットさんに差を付けられては堪りません。一夏さんと違って、喜久さんは朴念仁ではありませんから。ですが、ほいほいと女性になびき易いタイプでもありませんし」

おいおい、ヒートアップしすぎだ。しかし、セシリアって随分ストリートに言うようになったな。

そして、セシリアが溜息を一つ吐きながら呟く。

「…はあ。まあ喜久さんが、シャルロットさんを完全に受け入れたわけではなさそうなので。それについては安心しましたわ」
「うう、」

あ、シャルロットが齒軋りした。頼むから、お前も冷静になつてく

れ。だいたい、何で俺が鎮める側に徹さなきゃいけないんだ。しかし、愚痴を言っても始まらない。何とか機嫌を良くして、怒れる2人を止めよう。

「なあ、車が目的地に着いたら何か飲み物でも飲もう。だから、静かにしてくれ」

「喜久、安易に物で釣っても良い年を僕はとうに通過してるよ」

「喜久さん、私はそんなに安い女ではありません」

裏目に出たよ。俺は、女性の扱い方なんて知らねえんだよ。説得する手段が思いつかず、俺はうな垂れながら口を閉ざした。ああ、女性の説明書みたいながあれば楽なのに。

「大変ですね。まあ、まだ若いんですから、青春は大事ですよ」

にこやかに運転手の人が声をかけてくれる。俺は、人の良心に触れて心が癒された。

盛大に伸びと欠伸をする。それを見ていたセシリアとシャルロットが、ここになって気になっていたらしいことを口にしてきた。

「しかし喜久さん、よくISを受け入れる気になりましたわね」

「そうだね。喜久、どうして承諾したの？」

「うん？ああ、必要になったんだよ。それだけ」

ニコルとの接触で、俺はそれまでの考え方を変えた。ISが嫌いだのと駄々を捏ねる状態は、終わったんだ。これからは力をつけなきゃいけないし、独自のコネによるパイプも増やすべきだ。だから、自分の我侭を捨てて、利用できるものは最大限活かきつけてかなきゃならない。俺がそんなことを考えていると、運転手の人が声をかけてきた。

「皆さん、そろそろ半縄技術研究所ですから。降りる用意をお願いします」

運転手の人に言われて、窓越しに外を見る。何も無い平坦な景色に、一際大きい施設が見えた。

3 - 4 | 黒イ花ノ産声

| 4 / |

「ようこそお出で下さいました。お待ちしてましたよ」

両手を広げて学園へ訪ねてきた谷中が研究所の玄関で俺たち三人を迎え入れる。

「これはまた、可愛いお嬢さん方ですね。市隈さん、ご学友の方ですか？」

「ええ、そうなります。僕自身の浅はかな知識では限界がありますので、身近な聡^{さと}しい友人に貴重な時間を割いて頂いて来てもらいました。ご迷惑でしたでしょうか？」

俺の敬語を横で見ていたセシリアとシャルロットが、驚いて言葉を失っていた。なんで、そんなに珍獣を見たような反応なんだよ。

「喜久、なんかその言葉遣い気持ち悪い」

「いつもの喜久さんではありませんわね。まるで、別人ですわ」

らしくないのは、重々承知してるよ。それにしてもシャルロット、気持ち悪いってなんだ。セシリア、別人じゃない俺はどんな人間なんだ。だいたい、相手は企業なんだから敬語は当たり前だろ。

「ははは、なかなか面白いご学友をお持ちですね。これは両手にバラで、棘もあるということでしょうか。市隈さん、敬語は必要ありませんよ。それは、大人になってからで充分なことですから。それ

と、他の方が御参加されても特に問題はありません。見せてはいけない部屋が幾つかありますが、その部分に触れなければ平気ですから」

「申し訳ありません。お厚いご配慮、感謝いたします。ここからはお言葉に甘えさせて頂き、敬語を控えさせていただきますね。それじゃあセシリア、シャルロット。谷中さんの許可が下りたから、中に入らせてもらいますか」

俺はセシリアとシャルロットを促す。谷中は俺たちに背を向けると入り口から奥へ進んでいく。俺たちも、谷中についていくようにして先へ進む。

「やっぱり、喜久はこっちの方が良いね」

「そうですね。それにしても、どちらでそのような言葉遣いを覚えられたのですか？」

セシリアに言われて、俺は昔のことを思い出し少し笑いそうになった。あの頃は何もわからなかったから、俺はよく暴れてたな。

「俺には、1人姉がいるんだ。血は繋がってないけどな。それで、その人に厳しく教え込まれたんだ。なんでも、人には礼節を尽くせ、自分の振舞いで全てが決まるんだって口を酸っぱくして言われたよ。まあ、俺にはそんなの無理だけだな」

「へえ、喜久と違って随分立派な人だね」

「喜久さんのお姉様には、是非ともお会いしてみたいですわ」

2人はえらく感動している。うーん、確かに考え方は良いんだけど…。

「でも、なんでも学ばべきだとか言って、酒と煙草を12の俺に教

えたよ」

「…それは、違うと思う」

「…随分と変わった方なのですね」

これには、流石に2人とも引いている。

「まあ、人は良くも悪くもだからなあ。それでも、俺を大事に育ててくれたのには変わらないよ」

俺は笑いながら足を進めていく。しかし、姉さんは今頃どこで仕事してるんだろうな。

――

「あら、来たのね。この子が市隈君？驚いた、本当に男の子なのね」

谷中に案内されて辿りついた大きい間取りの部屋で、丸い銀縁眼鏡に長髪を適当に束ねた女性が俺たちを出迎えた。歳は30後半くらいだろうか？

「やあ、笹崎主任。ご注文を届けに来たよ。彼が市隈さんで、他の子は彼のご学友だ。宜しく頼むよ」

「ええ、了解しました。それじゃ、さっさとやってしましましょう。市隈君、あそこにあるISに乗ってもらえるかしら？」

え、いきなりかよ？テストも何もなしで？俺は、いきなり乗り込めと言われて困惑した。

笹崎が指した方を向くと、塗装が真っ黒なISが鎮座している。し

かも、角張ったラインが殆ど無く、ものすごくスマートな形をしていた。

色も、黒と青のラインが入った二色しかない。シャルロットとセシリアは、それを興味心身で見ている。

「テストはしないんすか？」

「あの子に乗ればそれで解るわよ。制服のままで構わないから、とりあえず乗ってくれるかしら。起動後の安定が第一条件だから、先ずはそれをクリアしてくれば良いわ」

どういう意味だ？

俺はとりあえず、ISの足部分に自分の足を差し込む。すると、笹崎がフルフェイスのマスクみたいな物を俺に渡してきた。

俺は、3年前を思い出して嫌な顔をしそうになる。

「これを被ってくれないかしら？脳波の拡張とこの子の会話に必要なのよ」

「会話？」

「そ、会話よ。じゃ、被ってみて」

「はあ」

意味もわからず、俺はそのまま手渡されたマスクを被る。すると、いきなりISが起動して、俺の脇を装甲が囲い込みを始めた。

視界は仮想現実の世界が出来上がり、マスクを被っていない状態と同じようになる。

【あなたは だれ】

「はあ！？」

どこからともなく聞こえてきた子供の合成音に、俺は思わず素っ頓

狂な声を上げた。そして、諦めのような声が呟かれる。

【わたしは あなたとは わかりあえない。わたしは あなたなんか いない】

「おいおい、そりやどいう意味だよ！」

俺が怒鳴ったせいだろう。シャルロットとセシリアが俺の方へ寄ってきた。笹崎と谷中は笑っている。

「どうしたの、喜久？」

「喜久さん、大丈夫ですか！？」

「いや、わりい。なんかこのISが喋ってるから、戸惑ったんだ」

俺に言われて、セシリアとシャルロットもさらに困惑する。

「喜久、どこか頭が痛むの？おかしいのはもともとだけど、どこか悪化した？」

「幻聴がするなら、直ぐに病院へ行くべきです。性格以外は良くなる筈ですわ」

おまえら……。2人揃って、俺に喧嘩売ったのか？俺は、怒りを抑えながら言葉を続けた。

「マスクの中の耳に当たる部分から、子供の合成音が聞こえたんだよ」

「その子は補助プログラムの人工AIよ。その子がいないと、このISは動かないのよ。あなたの脳波を補助するのに必要なの。難儀なことだけど、勝手に自己進化すぎて好き嫌いができたみたい。その子に気に入られることが、このISに乗るための第一条件よ」
「なんだよそれ！？そんなん、聞いたことねえよ！！」

笹崎は「他のテストパイロットは、全部この子に弾かれたんだだけだね」と、笑いながら俺に話している。

おいおい、俺にどうしろってんだよ？ だいたい、人を選ぶにしたって程があるだろ。この会社は、絶対に金儲けの量産化なんて考えてないな…。

【あなたは ひつよう ない いますぐ わたしから おりて】

「…このやろつ。そこまで言うなら、お前の首根っこ掴んでやるよ」

苛立った俺は今まで嫌っていたISTSを発動させると、無理やりクソAIの主導権を奪うことにした。すると、今度はISTSに反応したクソAIが不思議そうな声を上げる。

【なにこれ ちがう いままでと おなじ ひとたちじゃ ない】

「そらそうだろうよ。だから、主導権をこっちによこせや」

【しゅどうけん あげない】

「くそつたれが」

もつと同調率を上げて、このクソAIの意識を捻じ伏せるか。そう考えていたら、AIが予想外の意見を俺に伝えてきた。

【でも わたしが あなたを ささえて あげる】

「…支えるね」

随分上から目線じゃねーかよ。AIの癖に生意気言いやがって。まあ、これから長い付き合いになるかもしれないからな。少しは融通してやるか。

「しゃーない、妥協してやるよ」

俺は首を軽く回すと、大事なことを聞くことにした。

「おい」

【なに】

「俺は、呼び方は喜久でいい。お前の名前は？」

【ない】

「はあ？」

【なまえ　なんて　ない】

俺はすぐさま笹崎の方へ向く。

「笹崎さん、こいつ名前無いらしいんだけど。なんか、愛称とかあるすか？」

「あら、気に入られたの？おめでとう。この子の名前だけど、あなたが付けてあげたら。その子にそんなものなんて、もともと決められてないからね」

え、俺が決めるのかよ。ここは、なんて適当な会社なんだ。おかしいぞ、絶対に。めんどくせーな、こんなのISの初期設定でやったことねえよ。しょうがなく、俺はAIに喋りかける。

「お前の名前は何が良いんだ？自分で決めるよ」

【おもい　つかない　よしひさが　きめて】

うぜー。なんだこの決定力の無いAIは。俺は、思わず溜息を吐いた。

これじゃ、こいつは本当に子供じゃねえか。しょうがないな、まったく。

「変更はしないぞ。自分で決めなかったお前が悪いんだからな。お前の名前は、今からティアーニだ」

俺は、3年ぶりに懐かしい名前を呟いた。大事な名前だ。俺の相手になるんだから、この名前を無断で使っても、きつとあの人は笑って許してくれる筈だ。

【わたしは ていあーに にんしき した】
「宜しくな、ティアーニ」

コンコンとマスクを叩かれた。見れば、笹崎が指示を出そうとしている。

「これで、この子はあなたのものよ。大事に使ってあげなさい」
「わかりました。そういえばこのISはなんていう名前なんですか？」

「ISの名前？このISはブラックペタルよ。黒い花びらってところから」

花びらね。削り落としたスマートなボディに、そんなのついてないけどな。

「それじゃ、その他の説明をするけど先に進んでいいかしら？」
「はい、お願いします」

俺は待機状態から機体を立たせて、次の指示を仰いだ。

3 - 4 | 黒イ花ノ産声（後書き）

31日に上げようと思っていたのですが、思ったよりも早く主人公のISのコンセプトが固まりました。ですので、予告していたより少し早く投稿させていただきます。予定日を変えてしまいまして、申し訳ありません。

| 5 / |

「喜久さん、起きて下さい。ほら、海が見えますよ！」

「…うん？ああ、そろそろ着くのか」

俺がアイマスクをつけて寝ていると、隣に座っていたセシリアが嬉しそうに体を揺すってきた。

アイマスクを外しながら、体をゆっくり起して窓の外を覗く。すると、晴天の青より濃い海の色が視界内に入る。首に手を当てると、チョーカーのようなものが感触として指に引つかかった。

擦って確かめると先週、半縄から受け渡されたIS待機状態のアクセサリーがあることが確認できる。俺が視線をそらすと、少し前方の座席で恨みがましくこつちを見ているシャルロットがいた。

「喜久さん、何か飲まれませんか？私、紅茶を入れてきましたの」

「いや、勘弁してください。俺はもう限界です」

遡ること、朝のバス乗車の時だ。俺の隣を座る女子に席を替わってくれと、セシリアとシャルロットが言い出した。言われた女子は素直に従ったのだが、その後でどちらが座るのかで口論になり始める。俺は面倒臭いので、2人を隣同士で座らせようとした。

「喜久は、僕の横に座りたくないの！？」

「喜久さん、そんなに私の隣がお嫌なのですか！？」

が、今度は俺がものすごい勢いで攻撃され始める。しょうがないの

で、俺は織斑姉に助けを求めたのだが…。

「織斑先生。セシリアとシャルロットが、席を決められずに困っているみたいです」

「だったらお前が選んでやってはどうだ。本人たちもそれなら納得するんじゃないのか？」

余計に油を注がただけに終わった。しょうがなく、駄目元で今度は弟の方へ縋ってみる。

「だったら、セシリアとシャルロットの間に挟まれるように、一番奥の5人席を譲ってもらえば良いんじゃないのか？」

全然的外れな回答をもらった。一夏、お前がやってみろや。そんなので間に挟まれたら、俺の胃が縮んでしまうわ。だいたい俺がお前の横で納まれば、こんな問題にならなかったんだよ！！
ほとほと困り果て、結局2人にはじゃんけんで公平に決めてもらった。

それで今の状態だが、セシリアが何か俺にするたびにシャルロットの目が光を失っていく。乾いた笑いが怖い。最終手段として、俺は居眠りを決め込むことにして現在に至る。

「喜久、お前は向こうに着いたら泳ぐのか？」

「いんや。俺は部屋で読書でもして、ゆっくりしてるよ」

少し前の席に座ってる一夏に声をかけられて、俺は適当に答える。

「ええ！？そんな、せつかく海に来たのですから泳ぐべきです！」

「読みかけの小説があるんだよ。俺はそれを読んでたいんだ」

セシリアが俺に非難の声を上げた。
すると、前方に座っていたシャルロットも抗議の声を上げる。

「喜久、セシリアの言っている通り外に出ようよ！滅多に無い機会だし、もったいないよ」

「うーん。じゃあ、少し考えてみるよ」

相部屋になるだろう一夏は、どうせ海に泳ぎに行くだろう。俺はゆつくり本でも読みながら、だらりと寛ぎたい。俺が悩んでいると、織斑姉が席から立ち上がる。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

レクリエーションのような騒ぎが収まり、バスの中は静かになった。俺は再び外を見ながら、盛大に欠伸をした。

――

「うわー！１年生を受け持つとこの場所に来ますが、やっぱり部屋が広いですね。どうですか、市隈君？」

目の前で、自分の泊まる部屋に喜んで入る山田先生がいる。旅館に着いて部屋に向かって到着してみれば、俺以外は部屋に居なかった。そして、職員同士の打ち合わせが終わったらしい山田先生が、普通に部屋に入ってきたのだ。

俺は、一番苦手な人間を相部屋にされたために、現在とても苦悩している。この人は俺が打てば倒れ、邪なことをすれば泣き、軽い冗談を全部受け入れてしまう。まさに一番相性の悪い人間だった。

駄目だ、このままだと20歳になる前に禿げるかもしれない…。

織斑姉がこの配置を割り当てたのだろうが、本当に生徒のことを細かく見てやがる。ありがたいことなのだが、これは酷い。俺は、てつきり一夏と同室だと思っていたのに。これじゃあ一夏たちと買い物に行った日に、隠れて自販機で買った煙草が吸えないじゃないかよ。

「山田先生、なんで俺は一夏と一緒にの部屋じゃないんですか？」

「それはですね、市隈君たち2人になると、女子が夜中に押しかけてくると思ったからです。なので、市隈君は私で、織斑君は織斑先生にしました。それに、織斑先生の方はもともと家族ですしね」

まあ、一夏が織斑姉と一緒になら流石にあのボーデヴィツヒでも、おいそれと部屋には近づけないだろうな。しかし、あんたは俺と一緒に平気なのかよ…。

「山田先生は俺と一緒に平気なの？」

「市隈君は、女性に対して優しく接しててるのを知ってますから。その辺に関しては、心配してませんよ。今回の部屋割りに関しては、私が織斑先生に提案したんです」

この部屋割り決めたのあんたかよ！！

俺は思わず脱力して、その場で大の字になった。

ふいに、山田先生が私物らしきものをもって、バスルームに入っていく。ああ、水着に着替えるのね。

バスルームの中から山田先生が話し掛けてくる。

「市隈君は、泳ぎに行かないんですか？」

「誘われてはいるんですけど、行く気がしませんね」

俺は天井を見上げながら、手をぶらつかせて答える。山田先生は着替えを終えると、バスルームから出てきて水着の格好をしていた。胸が大きいのがわかるが、指摘すると怒られそうだ。

「市隈君が、最後に海水浴に行ったのはいつですか？」

「海になら、この前ISを展開している状態で投げ込まれました。正直、死ぬかと思いましたよ」

無人機ISとの戦闘を思い出しなげらいうと、山田先生も意味がわかったらしく顔が引きつった。

「はは……。それは、災難でした。でも、せつかくですから楽しまなきゃ損ですよ？」

「もともと、もやしっ子なんで。山田先生は、先に行ってください。俺は、気が向いたら行きますから」

山田先生は少し考えた後で俺の自主性を尊重してくれたらしく、軽く手を振って部屋から出ていった。

すると、1分も経たない内に慌しいノック音がする。俺は、その行為を誰がしたのか解っているためにげんなりした。頼む、ゆっくりさせてくれ。

「喜久、早く外に行こうよ！」

「喜久さん、居留守は通じませんわよ！」

く、居留守しようと思ってたのに。女の勘なんて大嫌いだ。俺はしようがなく立ち上がった、廊下側に繋がるドアを開けた。ドアを開ければ、水着姿のシャルロットとセシリアがいる。

「まだ、着替えてなかったのですか!？」

「喜久、遅いよ！待ってるから早くして！」

おいおい、なんで行くことが決定してんだよ。

…はあ、しょうがない。俺は、根負けして読書を諦めることにした。

「降参だ、着替えてくるよ。一旦閉めるぞ？」

そう言うのと、2人はとても嬉しそうな顔に変わった。

――

俺は、水着に着替えて軽く上を羽織ると、学園が貸切にしている砂浜に歩み出る。すると、そこは水着を着た女子一色で埋め尽くされていた。

俺は思わずその光景に引いてしまい、一步ほど後退する。なんだ、この中学時代に友達の家で見たAVのネタみたいなのは…。しかも、規模がおかしい。

少し眺めてみると、一夏が普通にその集団の中を平然と歩いている。すげーな、あいつ。

俺は水着の女子の一群の中に、平気でいる一夏を少し尊敬した。

「喜久さん、行きますわよ！」

「喜久！なに立ち止まってるの！？」

セシリアとシャルロットが、遅れている俺を促す。おいおい、俺にあの群集の中に混じれってのか…。

俺が戸惑っていると、焦れた二人が戻ってきて俺の両手を片方ずつ引っ張り始めた。

「ほらほら、突っ立ってないで早く行くよ、喜久！」

「喜久さん、何をしているのです！」

「わかったから！そんなに引っ張らないでくれ！」

俺はそのまま引っ張られていき、最終的に誰かが立てたらしきビーチパラソルの下まで来た。

周りにいた、全ての女子が俺の方を向く。これじゃ、俺は異物扱いだな。

一夏のほうを見れば、奴は凰を肩車している。そして、凰に変われと言って他の女子たちが殺到していた。

「喜久さん、お願いがあるのですが」

「あん？」

セシリアの声がして呼ばれた方を向くと、奴は水着の上の方を紐解いて背中だけになりながら寝そべっている。なあ、セシリア。その手に持っているサンオイルはなんだ？

「オイルを塗っていただけませんか？」

「俺が塗ると、塗らなくていいとこまで塗ることになるぞ？」

俺はそんなのごめんなので、少し脅すつもりでセシリアに答えた。すると、奴は頬を染ながら呟く。

「…私は、それでも宜しくてよ」

「阿呆か、お前は…」

俺は、げんなりしながら答える。すると、俺の横で見ていたシャルロットが笑顔で答えた。

「じゃあセシリア、僕が塗ってあげるよ」

そう言つてセシリアからサンオイルを引手繰り、一気に塗り始める。…主に脇へ集中して。

俺は呆れながら一步下がり、様子を見守ることにした。

「あはは、あは、あはははは！…やめ、あは、辞めて下さい！シヤルロットさん！…」

耐え切れなくなったセシリアが、怒りと共に立ち上がり金切り声で叫ぶ。俺は、びっくりしてセシリアに声を上げた。

「おい、セシリア！上は隠せ！！」

「え？きゃあああ！！」

今度は一拍置いて、ものすごい悲鳴を上げ始める。もちろん、上が丸見えだった。

セシリアが突発的に行つた、ISの部分展開した腕が俺に迫つて来る。おい！なんで俺なんだよ！！

俺は咄嗟にバックステップを踏んで、それをぎりぎり避けきつた。

すると、セシリアは標的を変えたらしく、今度は胸を抑えながらシヤルロットの方を向く。それにしても、目付きが怖い。

「ウフフツ。シヤルロットさん、あなたにもオイルを塗ってさしあげましょう。だから今すぐ、こちらに来て下さいな？」

「僕は遠慮しておくよ。それより、喜久にもう一度オイルを塗ってもらつのを頼んでみたら？」

シヤルロット！お前怖いからって、俺にセシリアを押し付けんなよ

！！

「あ、織斑先生だ」

俺が適当に言うと、2人は俺の顔が向いている方へ即座に顔を動かす。そして、その隙に俺は一夏の方へ全速力で駆け出した。

後ろから「喜久さん！！」と叫ばれ、さらに「喜久の裏切り者！！」と断末魔が聞こえた。

必死の思いで一夏のそこまで辿り着く。

「一夏、助けてくれ！」

「は？どうしたんだよ、喜久？」

俺が指差した方を一夏が見る。そこには怒り狂ったセシリアと、それから逃げるシャルロットがいた。もちろん、二人は俺の方に向かって走ってきている。

「喜久、お前何したんだよ？」

「俺は何もしてない。シャルロットが、勝手に暴走したんだ」

わけがわからないと言った感じで、一夏が俺の方を見た。

「何をしている？」

「あ、織斑先生。向こうから走ってくる二人組みを何とかして下さい」

近くにいた織斑姉に声をかけられて、俺はセシリアとシャルロットを見る。織斑姉は走ってくる2人と俺を交互に見比べた。

「市隈、何事も経験だ。両手に花じゃないか、まあ頑張れ」

うわ、こいつ今の状況が面倒臭くて俺を見捨てやがった！！
次いで、一夏が俺の肩に手を置いてきた。

「俺には無理だ。頑張れ、喜久」

ひでえ。姉弟揃って、薄情な奴らだ。

そう思っていると、後ろからものすごい勢いでシャルロットが俺を横切って駆け抜けていく。そして、それに一足遅れで氣いた俺は、肩を何かに思い切り掴まれた。

きつと、油を差してない音がしたに違いない。ギギギという音がするような感じで、俺はゆっくりと後ろを向いた。

「喜久さん。突然逃げだすというのは、酷いではなくて？」

「…俺は何もやってない」

「覚悟は良いですか？」

「無理です」

次の瞬間、セシリアのボディブローが俺の鳩尾に決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733z/>

IS _ロスト_ナンバリング

2011年12月27日21時53分発行